

博士學位論文

「カラ」「デ」「ニ」の標識を持つ統語構造および理解

名古屋大学大学院国際言語文化研究科

日本言語文化専攻

穆 欣

平成 29 年 3 月

目 次

序 章	8
第 1 章 主語について.....	11
1.1 いわゆる「主語」	11
1.1.1 主語の廃止.....	12
1.1.2 主語の存置.....	15
1.2 対応関係の多様性と非ガ格主語.....	18
1.2.1 対応関係の多様性.....	19
1.2.2 非ガ格主語.....	21
1.2.3 非ガ格主語の主語性.....	23
1.2.4 カラ格名詞句の主語性.....	24
1.2.5 ギ格名詞句の主語性.....	26
1.3 まとめ.....	28
1.4 課題.....	28
1.5 方法.....	31
第 2 章 コーパス検索.....	32
2.1 目的と方法.....	32
2.2 コーパスに関する仮説.....	32
2.2.1 頻度仮説.....	33
2.2.2 ジャンル仮説.....	33
2.2.3 指標.....	33
2.3 コーパス.....	33
2.4 検索、分類の方法.....	36

2.5.	カラ格の検索結果.....	37
2.5.1.	用法の分類.....	37
2.5.2.	結果と考察.....	40
2.6.	デ格の検索結果.....	44
2.6.1.	用法に関する分類.....	44
2.6.2.	結果と考察.....	48
2.7.	まとめ.....	55
第3章	文処理実験およびテスト調査.....	57
3.1.	後置詞主語と格助詞主語の構造.....	57
3.1.1.	階層的な構造と格付与.....	57
3.1.2.	格助詞（ガ格）主語文と後置詞（カラ格・デ格）主語文の構造.....	60
3.2.	心理言語学から.....	64
3.2.1	主語の優位性.....	65
3.2.2	スクランブル効果と空所補充解析.....	68
3.2.3.	付加詞の処理メカニズム.....	70
3.3	日本語母語話者によるカラ格主語文の処理.....	72
3.3.1.	2つの仮説.....	72
3.3.1.1.	主語仮説.....	72
3.3.1.2.	付加詞仮説.....	74
3.3.2.	二項動詞能動文の実験.....	75
3.3.2.1.	参加者.....	75
3.3.2.2.	刺激.....	75
3.3.2.3.	実験の手続き.....	76

3.3.2.4.	分析と結果.....	77
3.3.2.5.	反応時間.....	78
3.3.2.6.	正答率.....	80
3.3.2.7.	考察.....	81
3.3.3.	IP 副詞を含めるカラ格主語文の実験.....	82
3.3.3.1	仮説.....	82
3.3.3.2.	被験者.....	84
3.3.3.3.	刺激.....	84
3.3.3.4.	実験の手続き.....	84
3.3.3.5.	結果と分析.....	85
3.3.3.6.	考察.....	87
3.3.3.7.	総合考察.....	88
3.4.	中国語を母語とする日本語学習者によるカラ格主語文の処理.....	89
3.4.1.	中国語を母語とする日本語学習者の文処理のメカニズム.....	90
3.4.1.1.	ガ格主語文の理解.....	90
3.4.1.2.	ニ格格主語文の理解.....	91
3.4.1.3.	カラ格主語文の理解に対する予測.....	91
3.4.2.	実験.....	92
3.4.2.1.	仮説.....	92
3.4.2.2.	被験者の選択.....	93
3.4.2.3.	刺激文.....	93
3.4.2.4.	実験の手続き.....	93
3.4.2.5.	結果と分析.....	94

3.4.2.6.	総合考察.....	96
3.4.2.7.	まとめ.....	98
3.5.	日本語母語話者によるデ格主語文の処理.....	99
3.5.1.	2つの仮説.....	99
3.5.1.1.	主語仮説.....	99
3.5.1.2.	付加詞仮説.....	99
3.5.2.	実験.....	100
3.5.2.1.	参加者.....	100
3.5.2.2.	刺激.....	100
3.5.2.3.	実験の手続き.....	101
3.5.2.4.	分析と結果.....	102
3.5.2.5.	反応時間.....	103
3.5.2.6.	正答率.....	104
3.5.2.7.	総合考察.....	105
3.6.	中国語を母語とする日本語学習者によるデ格主語文の処理.....	107
3.6.1.	実験.....	107
3.6.1.1.	仮説.....	107
3.6.1.2.	参加者.....	108
3.6.1.3.	刺激文.....	108
3.6.1.4.	実験の手続き.....	109
3.6.1.5.	結果と分析.....	109
3.6.1.6.	反応時間.....	110
3.6.1.7.	正答率.....	111

3.6.2. 総合考察	112
3.7. 中国語を母語とする日本語学習者による主語標識の理解に対する文法的諸要 因.....	113
3.7.1. 日本語における「非ガ格主語文」	114
3.7.2. テスト調査の概要.....	115
3.7.2.1. 参加者.....	115
3.7.2.2. テストの下位カテゴリーと問題例.....	115
3.7.2.3. 文法知識に関するテスト.....	116
3.7.2.4. 主語標識に関するテスト.....	119
3.7.3. SEM の潜在および観測変数.....	120
3.7.4. 分析と結果.....	122
3.7.5. 考察.....	123
終 章 まとめと今後の課題	126
参考文献.....	131
付 録.....	137

資料 I : コーパス調査によるデ格主語文

資料 II : 正順とかき混ぜ語順のガ格主語文

(日本語母語話者および中国語を母語とする日本語学習者による

カラ格主語文の文処理実験)

資料 III : 正順とかき混ぜ語順のカラ格主語文

(日本語母語話者および中国語を母語とする日本語学習者による

カラ格主語文の文処理実験)

資料 IV : 正順とかき混ぜ語順の IP 副詞を含めたガ格主語文

(日本語母語話者によるカラ格主語文の文処理実験)

資料 V : 正順とかき混ぜ語順の IP 副詞を含めたガカラ格主語文

(日本語母語話者によるカラ格主語文の文処理実験)

資料 VI : 正順とかき混ぜ語順のガ格主語文

(日本語母語話者および中国語を母語とする日本語学習者による

デ格主語文の文処理実験)

資料 VII : 正順とかき混ぜ語順のデ格主語文

(日本語母語話者および中国語を母語とする日本語学習者による

デ格主語文の文処理実験)

資料 VIII : 文法テスト

謝辞..... 202

序 章

国語学・日本語学では、早い時期から日本語には、英語では見られない現象や構文が存在すると考えられてきた。ハとガをめぐる論争がその代表例の一つとして挙げられる。英語における主語 (subject) と呼ばれるものが、日本語においては、ハとガという2つの標識 (marker) によって示されている。

1950年代、三上章の「主語廃止論」(1972b, 復刊)によって、日本語における「主語」という用語に関する論争が引き起こされた。これによって、ハとガに関する様々な言語現象が取り上げられている。この間に、主語をめぐる、数多くの議論が行われてきており、現時点で主題・主語については、ある程度の一致がみられる。日本語学や日本語教育においては、ハもガも「主語」(大槻, 1897)、あるいは、ハを「総合的な主語」、ガを「主語」と呼ぶ(草野, 1978)時期があった。三上は、ハは「主題」(topic)の標識であり、日本語の根幹は「題述関係」であることを主張した。「主題」という用語は、今広く受け入れられてきている。一方、ガ格は「主語」ではなく、「主格」とであるという主張に対して、賛否両論があるが、実際のところ、ガを「主語」と呼ぶことのほうがずっと多いと思われる。

「主語」という用語の必要性を論じる研究が数多くある(原田, 1973; 柴谷, 1978; 角田, 1991; 尾上, 2004, など)。その必要性の1つは、日本語における多様な主語の標識また尊敬語化現象や再帰代名詞現象をどのように統一的に説明するかという問題から生じる。言語事実として、日本語の主語は、主格 (nominative case、本研究では以下ガ格と呼ぶ)だけでなく、与格 (dative case、本研究では以下ニ格と呼ぶ)によって示される場合がある。ニ格以外にも、実際、奪格 (ablative case、本研究では以下カラ格と呼ぶ)や具格 (instrumental case、本研究では以下デ格と呼ぶ)も一定の条件を満たせば、主語を示すこ

とが可能であるということも、記述的な研究においてしばしば指摘されている（たとえば、角田，1991）。

しかし、三上章は、主語を主述関係を形作る存在とし、日本語におけるガ格が英語の主語のように絶対的な優位を持たないことから、ガ格名詞句を主語と呼ぶのは不適切で、必要もないと考えている。主語という範疇を認めないため、文の主語がガ格以外の標識で示される、いわゆる「与格主語」などを「主格の代用」として扱っている（三上，1970）。

生成文法の導入につれて、日本語の文の構造に関する研究が数多く行われてきている（たとえば、井上，1976；竹沢 & Whitman, 1997；長谷川，1999；三原，2008）。従来の日本語学に比べて、生成日本語学では様々な面において記述言語学と異なる見解を示している。本研究の主たる研究対象となるカラ格、デ格に限っていえば、日本語学ではガ格やヲ格と同様に格助詞（case particle）だとされているが、生成日本語学では、ガ格¹、ニ格²、ヲ格³を格助詞、カラ格とデ格を後置詞（postposition）として扱い、区別をつけている。その主な理由は、生起位置が異なると想定しているからである。早い時期に、三上や柴谷は、ガ格名詞句をも動詞の補語（complement）として扱い、日本語の文を平な構造（non-configurational structure）を取ると想定していたが、近年、心理言語学の実験を通して、SOV語順とOSV語順の間においてスクランブル効果（scrambling effect）が現れることが明らかにされており（Tamaoka, Sakai, Kawahara, Miyaoka, Lim, & Koizumi, 2005など）、日本語の文であっても階層性（configurational）があるという結論に至っている。このことを前提として、動詞句内主語仮説（VP-internal subject hypothesis, VPISH; たとえば、Kitagawa, 1986; Kuroda, 1988; 三原・平岩, 2006）に基づき、ガ格主語は動詞句内（vP-Spec）にまず生成さ

¹厳密に言えば、「総記」を表すガ格は、格助詞と異なる。たとえば、「太郎が一番背が高い」。本研究では、格助詞のガ格のみを対象とする。たとえば、「太郎がボールを蹴った」。

²ニ格は、格助詞と後置詞の性格を有する。分けて考える必要があるが、本研究では立ち入らない。

³厳密に言えば、「出所」などを表すヲ格は、格助詞と異なる。たとえば、「9時に家を出る」。

れ、屈折辞句 (Inflectional Phrase, IP) の主要部 (head) I と照合 (check) し、一致 (agreement) を経て、併合 (merge) によって IP の指定部 (IP-Spec) まで繰り上げられる (主語上昇)。一方、カラ格主語やデ格主語は I との照合が不必要であるため vP の指定部に留まることとなる。しかし、標識に関係なく、文の主語であれば、C 統御 (c-command) を用いて、構造的に主語の位置にくる名詞句が優位性を持つことを説明できる。

このように、本研究では理論背景や研究手法の変遷や交代の中で、「主語」という文法関係レベルの範疇の設定が必要であると考え、三上の「主格の代用」(三上, 1970) の中のカラ格主語とデ格主語に対して、まず、これまでの日本語学における先行研究を概観し、本研究の課題について述べる。次に、『現代日本語書き言葉均衡コーパス中納言』(Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese、略称 BCCWJ、以下、『中納言』とのみ呼ぶ) を利用し、コーパスにおけるカラ格主語とデ格主語がどのような頻度パターンを示しているかを、頻度、割合、エントロピー、冗長度の 4 つの指標を使って数値化し、また実例をあげながら検討する。最後に、生成日本語学 (主にミニマリズムプログラム) を主たる理論背景にし、心理言語学的なアプローチを利用し、日本語母語話者および中国語を母語とする日本語学習者が実際にどのようにカラ格とデ格主語文を理解するかを検討する。ただし、主語を認める本研究では、三上の「主格の代用」という言い方を踏襲する代わりに、主語がカラ格、デ格、ニ格によって示される文を「非ガ格主語文」と呼ぶことにする。

第1章 主語について

第1章では、三上（1970, 1972a, 1972b）の主語廃止論および主語存置論を主張する研究者の考え方をまとめる。次に、深層格と表層格における対応関係の多様性について述べた上で、従来の日本語におけるカラ格主語とデ格主語に関する研究を概観し、本研究の目的を提示する。

1.1. いわゆる「主語」

日本語のハもガも「主語」として扱われる時期があった。現代英語においては、格標識がすでに消えてしまい、語順や異なる形態による屈折変化（inflection）を用いて、文法関係（grammatical relation）、態（voice）を表すこととなっている。一方、現代日本語においては、格助詞や後置詞などが名詞句の後ろに現れ、各構成素（constituent）間の文法関係、もしくは、ある文における名詞句の働きを表す。そのため、主述関係をもとにする英語では、「甲は、乙だ」「甲が乙だ」のような違いを区別することが難しい。主語廃止論の狙いの一つは、このような日本語の言語事実に対する注意や関心を喚起することである。

日本語の特徴として、同一の事象（event）を伝える際に、常に同じ格パターンで表すとは限らないことが知られている。主語に限って言えば、多くの記述的な研究で指摘されているように、ガ格だけでなく、ニ格、カラ格、デ格が主語を示すことが日本語では許される。さらに、主題を表すハがガ格を兼務するケースが多く、主語については、かなり複雑な様相を呈している（たとえば、原田, 1973; 柴谷, 1978; 角田, 1991; 黒田, 2005; 丹羽, 2004）。三上（1970, 1972a, 1972b など）の主たる功績は、英語は主述構文（subject-predicate construction）を主幹とするのに対して、日本語は題述構文（topic-predicate construction）を主幹とし、主語より主題のほうが有力であることを力説し、ハを「主語」

から分離させ、主題（または題目）としての地位を確立したことである。その反面、しかしながら、格の視点からガ格を主格と呼び、日本語の主格と英語の主語という異なるレベル（または範疇）における直接比較によって主語廃止を唱えた。この提案に対して、支持する研究者と反対する研究者の対立がみられる。主語廃止と主語の存置については、第1項と第2項に分けてまとめる。

1.1.1. 主語の廃止

三上（三上, 1972a, p. 73; 三上, 1972b, p. 13 など）は主語（文法関係レベルでの用語）・主格（格レベルでの用語）・動作主（深層格レベルでの用語）がそれぞれ異なるレベルの概念であることを区別している。そのため、主語の廃止あるいは主語の存置に関する問題は、実際にどのレベルで日本語の統語現象を説明するかの問題でもある。三上は、主語をもつばら述語に対する用語として考え、日本語の根幹をなす関係は、主述関係ではなく、題述関係であると主張した。この発想に基づいて、英語における主語は、日本語ではガ格ではなく、主題に相当すると考えていた。つまり、主題はガ格などを兼務することができるため、ガ格より優位性を持つ。ガ格は相対的な優位しか持たない。英語の述語は、主語の時制、数、人称によって異なる屈折形態が決められるが、日本語のガ格は常に動詞の形態を決める役割を果たさない。結果として、三上は、日本語の統語現象を説明する際に必要なのは、格レベルと深層格レベルだけで済み、文法関係レベルが不要だと主張した。深層格レベルと格レベルでの対応関係について、三上（1972b, p. 14）は「仕手を表す格が主格（subjective）である。というよりも、主格『X ガ』としてあらわれる有情者や非情物が仕手である（後略）」と述べている。また、「殿下がおききになる」のような尊敬語化現象に対して後に多くの研究者から（たとえば、柴谷, 1978; Miyagawa, 2010 など）頻繁に指摘されることになった。これについては、三上は「主格なり目的格なりが、相手か、

相手の近親か、または相手の眼上である場合に『オ……ニナル』や『オ……スル』があらわれるのである。だから、敬語法は主語存置の理由にならない」（三上，1972b，p. 44）と述べている。

英語の主語に比べて、日本語のガ格の優位性は絶対的ではなく、相対的である。いくつかの言語事実がこの観点を支持している。たとえば、（動作の）主体を表す際にガ格は多いが、ニ格も（能力の）主体などを表すことができる。主題化する際に、ガ格だけでなく、ヲ格、カヲ格、ニ格、デ格なども問題なくできる。「ガ・ノ」可変の場合に、ガ格しかノ格と交代できないものの、交代しなければならないということはない。省略の場合、ガ格もヲ格も省くことが可能である。たとえば、数学の問題の説明において、「自動車の速さを毎時 x km とする」という表現は、特に 1 人称の私を想定しているわけではなく、仮定として考えているため、このような文においては主格が不要である。さらに、主要部後置型言語としての日本語は、各構成素の役割が動詞によって決められる。したがって、図 1 のように、三上（三上, 1972b, p. 82）は、ヲ格・ニ格と同様に、ガ格も特別な存在ではなく、ただの補語（complement）であると主張した。

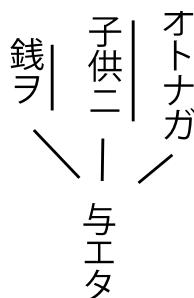


図1 動詞の補語構造 (三上, 1972b, p. 82, 注: この図は、三上, 1953 の復刊)

しかしながら、三上（1970）の生成文法を援用して描いた樹形図（図2）を見れば、三上（1953）の考え方にも変化がみられる。この図では、日本語の文が階層的な構造（configurational structure）を持つように描かれている。しかし、三上（1970）は、ガ格名詞句が VP の外に出ない限り主語として認めていない。また、その主格（あるいはガ格）の優位性は、あくまで動詞句内に留まるものとしてのみ考えている。文面にあらわる多様な格パターンや同じ格標識が異なる深層格を表す場合には、格レベルでどういう用語を使ったら良いのかについて、X ガは主格（して）、X ヲは対格（めあて）、X ニは位置格（ところ）、X ニは方向格（めあて）のように深層格に基づいて区別している（三上, 1972b, p. 82）。

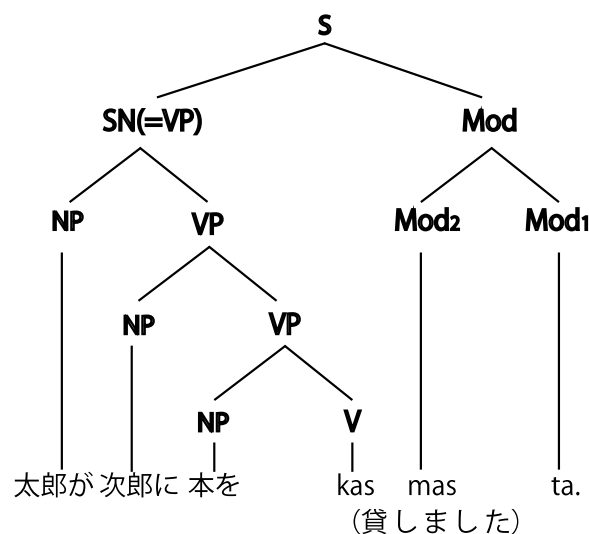


図2 核文 (kernel sentence) の構造 (三上, 1970, p. 37)

以上の内容をまとめてみると、主語廃止の理由は以下の2つになる。1つは、日本語は主述関係ではなく、題述関係が主幹である。そのため、英語の主語と対等な存在は日本語の主題であり、ガ格名詞句ではない。もう1つは、英語の主語に比べて、日本語のガ格が相対的な優位性しか持たず、斜格と同様に動詞の補語として捉えられる。そのため、日

本語の統語現象は、格レベルで説明することができ、わざわざ文法関係レベルの用語を使用する必要がない。北原（1981）や小池（1987）も三上の考えを支持している。

1.1.2. 主語の存置

三上（1953, 1972a, 1972b）の主語廃止について、柴谷（1978, p. 197）は、三上が主格と主語とをあまりにも強く結びつけて考えすぎたと指摘している。また、文法関係レベル、格レベル、深層格レベルの3つに分けて考えないと、異なる格パターンを取る文の説明に矛盾を生じる場合がある（たとえば、角田，1991）。たとえば、日本語においては、「コーヒーが飲みたい」のような文では、ガ格で示される名詞句は主語ではなく、目的語である。また、「先生に（は）、この問題が解けるでしょうか」のように、ニ格で示される名詞句は間接目的語ではなく主語である。これらの文を見ても、ある名詞句が同じ格標識で示されていても、必ずしも同様な文法機能を持つとは限らないことがわかる。柴谷（1978）が、「主格」とは別に「主語」を設けることの必要性を唱える主な理由は、日本語におけるガ格（格レベル）と主語（文法関係レベル）が、必ずしも一対一の関係ではないことにある。

三上（1972b）は、「主語」という概念を使用せず、Xガは「めあて（目当て）」、Xニは「して（仕手）」として、このような現象を深層格で区別して説明している。しかし、三上のような深層格で区別する以外に、一義的な定義を下されない一次的文法範疇⁴に属する概念としての「主語」（文法関係レベル）を設定するという方法がある（柴谷，1978を参照）。これにより、主語の位置にくる名詞句または主語として認められる名詞句は、どのような表層格（Xガ、Xニなど）を取っていても、どのような語順で現れていても、同様の文法機能を果たすとして想定される。たとえば、ある名詞句が主語であれば、表層格が異なっても、「先生に（は）、この問題がお解けになるでしょうか」の尊敬語化を

⁴柴谷（1978）では、主語も用言や体言などと同様に、一次的な文法範疇の概念である。

誘発することができ、また「山田さんに（は）、自分がその問題を解けない」の再帰代名詞の先行詞となることが可能である。このように、尊敬語化などの言語現象は、文法関係レベルで説明すればより整合性がとれる。そのため、主語の存置を唱える研究者が多くいる。

原田（1973）も柴谷に近い考え方を示している。原田は、尊敬語化と再帰代名詞化以外にも、「同一名詞句条件」と「不定代名詞削除」という2つの現象を、主語で説明する必要があるとしている。そして、三上（1972b）のいう主格（格レベル）は生成過程中的の深層構造の段階に相当し、主語（文法関係レベル）は表層構造に相当するとした。そして、原田（1973, p. 90）は、深層構造と「知的意味」⁵を結びつけ、表層構造と「情報的意味」⁶を結びつけている。そして、主語についての尊敬語化などを構文的に位置づけることは、ごく自然なことであると指摘した。

(1) 太郎が 花子を 褒めた。		
動作主	対象	(深層格レベル)
主格	対格	(格レベル)
主語	目的語	(文法関係レベル)

(角田, 1991, p. 224 より、一部改正)

角田（1991）は、動作主、主格、主語は別の概念であるとしており、区別して考えなければ混乱や不都合が起こることがあると主張している。たとえば、「宮内庁では今、花嫁

⁵原田（1973）のいう「知的意味」は、ある文が指し示す事態の型である。たとえば、「先生が太郎をほめた」という事態の型に対して、「太郎が先生にほめられた」や「先生は太郎をほめた」などの一連の表し方があると考えられる。

⁶原田（1973）のいう「情報的意味」は、ある事態の型に対して、中立的に叙述されるか、それとも話し手の視点から叙述されるかによって、情報的に意味が異なることをいう。

候補を探しておられます」であれば、ガ格が文面上にあらわれていないものの、この文には、デ格で示された主語がある。実際、柴谷（1978）の研究をきっかけに、深層格レベル、格レベル、文法関係レベルを異なるレベルの概念として捉えて言語現象を検討しようとするアプローチが広がった。たとえば、角田（1991）は、ガ格を主語とする二項能動文に対して、各レベルの対応関係を以下のように描いている。

以上に述べた内容をまとめると、主語の設定を必要とするのは、主に以下の2つの理由がある。1つは、尊敬語化・再帰代名詞・同一名詞句条件などといった言語現象を誘発する格パターンが多様であるため、より統一的に説明するために、文法関係レベルに属する一次的な用語の主語を設定することである。実際に、尊敬語化の場合、主語と動詞の間に一致があると主張する研究がある（Miyagawa, 2010）。主語名詞句によって、尊敬語が決められる。この点においては、日本語と英語はよく似ている。もう1つは、深層格と表層格が一对一の関係ではないため、三上（1972b）も同じ X ニであっても、位置格と方向格と深層格にしたがって区別している。そうすると、角田（1991）が指摘したように、深層格にしたがって、いちいち格を定義せねばならなくなり、膨大な格の数を設定する必要が生じてしまい、不便である。

さまざまな言語現象を考慮して、格レベルの上に文法関係レベルを設定することによって、多様な格パターンを1つの文法関係レベルの用語でまとめることが可能となり、結果的に、表層格の多様性を認めると同時に、整合性も保持できる。本研究でも主語の設定が必要であると考え。そこで、図3のように、深層格レベル、格レベル、文法関係レベルの3つのレベルを設定した。もっとも上位にあるレベルは、柴田（1978）の主張した一次的範疇の文法関係である。このレベルには、主語・目的語・間接目的語などの用語で表現される。次のレベルは格レベルである。ガ格（主格）、ヲ格（対格）、ニ格（与格）

などの格がこのレベルに属する。もっとも深いレベルは、深層格レベルである。動作主、対象、経験者などがこのレベルに属する。

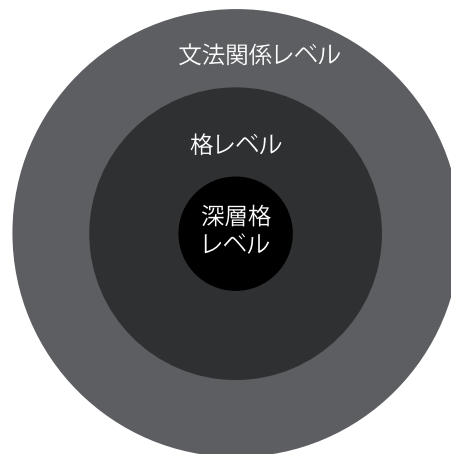


図3 深層格、格標識、文法関係のレベル関係

日本語においては、3つのレベル間での対応関係が極めて多様である。そのため、ある言語現象を検討するにあたって、表層格だけでは名詞句の文法関係を判断し難い場合が多い。たとえば、主語の格標識が1つだけではないため、「先生に（は）」「宮内庁で」などのような名詞句が文の主語であるか否かを判断するために、尊敬語テストなどのような統語テストを行うことが多い。次節では、プロトタイプの主語とカラ格名詞句、デ格名詞句の主語性について、具体的に検討を加える。

1.2. 対応関係の多様性と非ガ格主語

前節では、主語廃止論と主語存置論の考え方をまとめながら、深層格レベル、格レベル、文法関係レベルの階層関係を示し、この3つのレベル間での対応関係の多様さについて、主語の標識を例あげて考察した。本章では、多様な対応関係の背後にある主語標識の多様さ、主語の判定の基準および非ガ格主語の判定を検討し、研究の目的を提示する。

1.2.1. 対応関係の多様性

前節においては、深層格、表層格は一对一の関係ではないことを概観した。本節では、本研究における用語について詳しく説明する。生成言語学では、深層格の代わりに意味役割 (θ -role) を使うのが一般であるが、本研究では、実際に文面に現れる格標識を表層格と呼び、表層格と対応して、意味役割のことを深層格と呼ぶ。すなわち、述語と共起する名詞句の述語に対する意味的關係、または述語の意味する現実の一断面、あるいは動作・状態・関係・シチュエーション・こと・事柄・出来事においてその必須または随意的参加者の担う意味的役割である（国立国語研究所，1997）。対応関係の多様性については、まず文面にあらわれる格標識（表層格）が常に同一の深層格と対応しないことを指すが、文法関係レベルを含めて考えると、深層格も常に文法関係と対応しているわけではない。さらに、格標識も常に文法関係と対応しているわけでもない。そこで、本研究での対応関係の多様性とは、3つのレベルでの非対応関係を指す。角田（1991）は、図4のように深層格と表層格の対応関係を描いている。たとえば、動作主（動作者）であっても、ガ格、ヲ格、ニ格などの表層格と対応している。さらに、図4に描かれていない文法関係を含めて考えると、主語は常に動作主に独占されているのではなく、経験者、無意志主体などで示されることも多い。さらに、すでに例を挙げたように、主語はガ格で示されることが多いが、ガ格以外でも示される。またその逆に、ガ格で示される名詞句も常に主語であるとは限らず、「コーヒーが飲みたい」のように、「コーヒーを飲みたい」と言い換えることができ、目的語であることもある。これらのことから、深層格と表層格と文法関係における対応関係の多様性が頻繁にみられることがわかる。

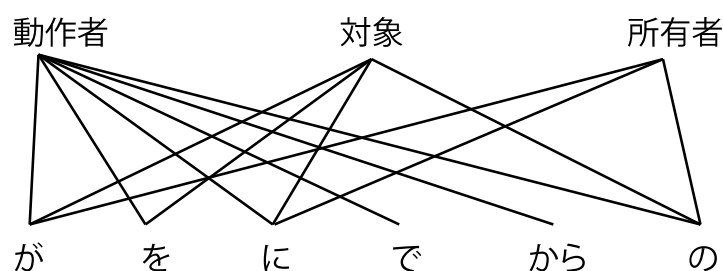


図4 日本語の深層格と表層格の対応関係（角田，1991，p. 189）

図4に示されている格には、ガ格をはじめとするさまざまな格がある。ガ・ノ可変、使役文などを考慮する場合、ノ格やニ格が動作主を表すことができる。なお、ガ格、ニ格、カラ格などが対象や経験者、無意志主体、能力の主体、動作を発する主体などを示すこともある。三上（1970）は、ガ格以外の格で動作主などを示す文を「主格の代用」と呼んでいる。これらの内でよく研究（柴谷，1978 など）されてきたのはニ格で示される与格主語である。1990年代に入ると、カラ格、デ格に関する研究もある（張，1995；井上，2002；Ueda，2003 など）。

しかし、格間での交代に注目する前に、格そのものに対してまず考察する必要がある。その理由は、ガ格、ヲ格がノ格、カラ格などに比べると、特性が多少異なる面があるからである。たとえば、主語を表すガ格には、特定の意味が含まれておらず、もっぱら名詞句の文法機能を示すのみである。また、日常会話においては、主語のガ格の省略も許される。目的語を表すヲ格も同様である。しかし、デ格やカラ格では、これらの省略の現象はほとんどみられない。そのため、理論背景によって、これらの格に対する扱い方が異なっている。日本語学や日本語教育では、図4にある格標識を格助詞として扱っている。生成日本語学では、格助詞がそれだけで深層格を特定できるか否かや、脱落できるか否かなどを考慮し、もっぱら文の主語と目的語を表すガ格（総記のガ格を除外）、ヲ格（起点などのヲ格を除外）、ニ格（帰着点などのニ格を除外）を格助詞として扱い、デ格、カラ格、ノ格を後置詞として扱っている（長谷川，1999；三原，2008を参照）。このように、主語

を示すことのできる各標識間に格助詞と後置詞という差異があるため、後置詞が格助詞と同様に文の主語として見なせるのかどうかという疑問が残る。次の節では、日本語におけるプロトタイプの主語の特徴を含めて、カラ格名詞句とデ格名詞句（すなわち非ガ格主語）がガ格主語と同様に主語として考えることができるかどうかを、先行研究をまとめながら検討していきたい。

1.2.2. 非ガ格主語

記述的に日本語の主語を定義するのは難しい。そのため、主語に関わる言語現象に基づいて、これらの現象を引き起こす名詞句やこれらの条件に満たす名詞句が主語であると定義したり（たとえば、黒田，2005）、表層格を用いて主語を規定したり（たとえば、尾上，2004）している。前節で述べたように、日本語では表層格の変動が激しい上に、格助詞と後置詞に差異がある。角田（1991）は、格は、名詞、代名詞、副詞などの形式だけで、統語機能を分類する基準ではないとして、ガ格を主語認定の基準としない考え方を示している。本研究でも深層格、表層格、文法関係における対応関係の多様性を考慮し、特に非ガ格主語を考察する際に、3つのレベルに区別するほうがより妥当であると考えられる。これまで非ガ格主語をめぐる研究は少なく、それらの多くがニ格とカラ格に着目したものであり、デ格に関する研究はほとんどない。そこで、プロトタイプの主語に照らして、カラ格主語とデ格主語の特性、成立条件、どのような点でプロトタイプの主語と一致するかについて述べ、本研究の立場を示す。

日本語のプロトタイプの主語には、いくつかの特徴がみられる。これらの特徴はある名詞句が主語であるかどうかを同定する際に使われる。まず、統語機能について、角田（1991，pp. 212-213）は、主語の4つの統語機能を挙げている。その中で数量詞遊離が主

語だけでなく、目的語にも適用されるため、ここでは数量詞遊離を除く 3 つの機能をまとめて示す。

- (a) 尊敬語の動詞の先行詞になれる。
- (b) 再帰代名詞「自分」(又は「自分自身」)の先行詞になれる。
- (c) 継続の「～ながら」における主節の語句 X と従属節の語句 X の対応。

(角田, 1991, p. 213 より)

(a) と (b) については、よく知られた機能であり、これまでの節でも述べた。(c) については、たとえば「涼太が (は) 仕事をしながら、ラジオを聞いた」においては、従属節の主語が主節の主語が対応関係をなしており、従属節における主語があらわれない。しかし、逆接の「～ながら」にはこういう現象はみられず、従属節と主節ではそれぞれ異なる主語の存在が許される。似たような表現として、「～つつ」などがある。これは、原田 (1973) の提示した「同一名詞句条件」に近い言語現象で、主語の統語機能の 1 つであると考えられる。

統語機能以外に、深層格レベルと格レベルにおいても特徴がみられる。深層格レベルでは、プロトタイプ的な主語が動作主 (たとえば、「太郎が花子を褒めた。」) を担う場合が多く、動作主は他の深層格よりも主語として理解されやすい傾向がある。格レベルでは、主語がガ格で示される場合がほとんどである。国立国語研究所 (1997) の日本語の表層格と深層格の対応に関する調査でも、このことが裏付けられる。国立国語研究所の調査によると、動作主に対応する表層格の中でガ格が圧倒的に多く、全体の 966 例中 913 例 (94.5%) も使われ、続いてデ格が 25 例 (2.59%)、ニ格が 13 例 (1.35%)、ヲ格が 11 例 (1.14%)、カラ格が 4 例 (0.41%) であった。経験者に対応する表層格の中でもガ格

が多く、全体の 176 例中 120 例 (68.2%) あり、続いてニ格もかなりの頻度でみられ 39 例 (22.2%)、ヲ格が 15 例 (8.52%)、デ格が 2 例 (1.14%) であった。無意志主体に対する表層格の中でもガ格の例がもっとも多く、118 例中 116 例 (98.3%) もあり、続いて、ニ格が 2 例 (1.69%) のみであった。対象に対応する表層格の中では、ヲ格がもっとも多く、5,968 例中 3,955 例見られ (66.3%)、続いてガ格が 1,851 例 (31.0%)、ニ格が 150 例 (2.51%)、デ格が 12 例 (0.20%) であった。

そこで、統語機能（または文法機能）、深層格、格標識という 3 つの側面から考えると、プロトタイプ的な主語には以下のような特徴がある。まず、統語的には、尊敬語を誘発することが可能であり、「自分」などの再帰形や継続の「～ながら」などの表現において、従属節と主節の間で対応関係を有したりする。動作主という深層格を持ち、なおかつガ格で示されているとまとめられる。この 3 つのプロトタイプ的な主語の特徴に照らして、カラ格主語とデ格主語の先行研究をまとめながら、カラ格名詞句とデ格名詞句の主語性を詳しく見ていきたい。

1.2.3. 非ガ格主語の主語性

非ガ格主語の中でよく検討を加えられてきたのはニ格主語文である。柴谷 (1978) では、主語の必要性を説明する際に、ニ格主語を例として挙げた。ニ格名詞句を主語として認められるのは、プロトタイプ的な主語と同様に尊敬語を誘発することができ、再帰代名詞の先行詞にもなるからである。のちに、日本語学、生成日本語学、心理言語学からの考察が増え、ニ格主語の格付与やニ格主語文の成立条件などが検討された（たとえば、Ura, 1995; 佐貫, 2010; 日本語記述文法研究会, 2009; Tamaoka et. al., 2005 など）。格付与の問題はともかく、プロトタイプ的な主語に比べて、ニ格主語文には成立のための条件が課されるという点については注目に値する。

二格主語文には成立のための条件には、次の2つがある。条件1は、特定の動詞や形容詞を取ることである。たとえば、述部に「驚きだ」「心配だ」のような心理動詞、「話せる」「弾ける」など $-(rar)e$ の可能形を取る動詞、あるいは「ある」「ない」などの存在・所有動詞と「多い」などの分量の多寡を示す形容詞（柴谷, 1978; Fukui, 1986; Ura, 1995; 佐貫, 2010; 日本語記述文法研究会, 2009 など）が来なくてはならない。

条件2は、目的語にヲ格を取ることができず、ガ格を取らねばならないことである（Ura, 1995; 佐貫, 2010）。たとえば、「*ジョンにメアリーを心配だ」や「*太郎に英語を話せる」など、ヲ格の目的語が含まれると非文になることから裏付けられる。この2つの条件を満たせば、二格主語文が成立する。

また、二格主語の深層格もプロトタイプの動作主である主語と異なり、国立国語研究所（1997）の深層格の分類にしたがえば、対象であり、日本語記述文法研究会（2009）の分類にしたがえば、所有・能力・心的状態の主体である。このように、二格主語文は、主語の表層格が二格で、深層格が対象または所有・能力・心的状態の主体でありながら、統語上プロトタイプの主語と同様に機能する。そのため、プロトタイプの主語ではないが、立派な主語である。まとめてみると、二格主語文は、成立条件が課され、深層格は対象・主体であり、表層格は二格である。それでは、カラ格名詞句とデ格名詞句はどうか。以下で2節に分けて検討する。

1.2.4. カラ格名詞句の主語性

カラ格名詞句の主語性に関する研究は二格よりも少ないが、ほとんどの先行研究においては、カラ格名詞句を主語（*kara*-marked subject）として考えている（たとえば、張, 1995; 角田, 1991; 伊藤, 2001; 井上, 2002; Ueda, 2003 など）。しかし、二格主語文と同様に、カラ格名詞句を主語として認めるためには、条件を満たす必要がある。第1に、

文の動詞は提供・伝達行為を表す他動詞でなくてはならず、たとえば「叱る」「ほめる」のような二項動詞あるいは「送る」「譲る」のような三項動詞でなければならない（たとえば、伊藤, 2001）。第2に、カラ格名詞句は動作主という深層格が求められる同時に、動詞を表す動作の起点でなければならない（井上, 2002; 日本語記述文法研究会, 2009）。これらの2つの条件を満たさなければ、カラ格で主語を示すと、不自然な文となり、許容度も低くなる。

ニ格主語に比べて、カラ格名詞句の2つ目の条件が目立っている。ある動作の動作主であり、動作の起点でもあるという条件は、すなわち、「研究科長から学位記を渡した」という文におけるカラ格名詞句「研究科長から」は同時に「動作主」と「起点」という2つの深層格を持つということとなる。動作主という深層格が動詞（または述語）の項の深層格と一致するため、動詞の項として解釈できるわけである（長谷川, 1999 を参照）。証拠として、プロトタイプ的な主語のガ格と交代でき、「研究科長が学位記を渡した」と書き換えられる。しかしながら、カラは後置詞でもあり、それ自身が深層格を持っているため、「研究科長から」を起点として理解することも可能である。つまり、動作主でありながら、起点でもあるという両面性が1つの名詞句に共存している。カラ格名詞句のこの深層格の両面性によって、カラ格名詞句の統語機能を判断する際にゆれが生じる。さらに、表層格からもカラ格名詞句の統語機能を判断することができない。そこで、プロトタイプ的な主語と同様に、尊敬語を誘発するかどうかや再帰代名詞との対応関係を持っているかどうかを考察する必要がある。角田（1991）は、カラ格名詞句を原型でない主語として扱

(2) 私から自分を売り込むとはなんですが... (角田, 1991, p.233)

(3) 私から自分を売り込みながら、ついでに太郎も売り込んでおいた。

(角田, 1991, p.234)

(4) お父さんから何かをおっしゃってくださいよ。

っている。その理由は、(2)～(4)のように、プロトタイプ的な主語と同様に、尊敬語を誘発することができ、再帰代名詞および継続の「～ながら」との対応関係がみられることである。

以上の内容をまとめると、カラ名詞句は、動作主という深層格を持つと同時に、起点という深層格も持っている。この2つ深層格は表裏一体の関係をなしている。さらに、文が成立すれば、カラ格とガ格の間での交代が許される。もっとも重要な点は、プロトタイプ的な主語と同様に、尊敬語を誘発することができ、再帰代名詞および継続の「～ながら」における対応がみられる。これらのことを考慮し、本研究ではカラ格名詞句を主語として認め、カラ格主語と呼ぶことにする。

1.2.5. デ格名詞句の主語性

デ格名詞句の主語性に関する研究は少なく、デ格名詞句が主語であることを強く主張する研究はあまり見られない。その中で、格レベルでのガ・デ交代(仁田, 1995)、デ格名詞句の担う深層格(日本語記述文法研究会, 2009)などを検討した先行研究がいくつかみられる程度である。カラ格と同様に、デ格名詞句も、「動作の主体」(仁田, 1995)または「動きの主体」(日本語記述文法研究会, 2009)として認めるためには、条件を満たさなければならない。

デ格名詞句を「動きの主体」として理解するためには2つの条件がある。1つは、デ格名詞句は「複数性をもった人」「組織・団体」として捉えられる名詞でなければならないことである。もう1つは、デ格名詞句は、グループとしてまとまって、ある行動を行えるものでなくてはならない(日本語記述文法研究会, 2009) ことである。カラ格と同様に、

デ格は後置詞でもあるため、それ自体が深層格を持っている。たとえば、「外務省で（は）、訪問団を招待した」という文におけるデ格名詞句「外務省で」は「招待」の「主体」と「場所」という2つの深層格を備えている。「主体」という深層格は述部の項として解釈され、「場所」という深層格は、デ格自体が備えていると解釈できよう。そのため、「外務省で」は場所として理解することができると同時に、動きの主体としても理解することが可能である。実際、2つの条件の効果はデ格名詞句に有生性を持たせ、「場所」として理解される可能性を低めることにある。こうすることによって、動作主として理解される場合に、プロトタイプ的な主語のガ格と交代することができ、「外務省が（は）、訪問団を招待した」と書き換えられる。

こうなると、デ格名詞句はプロトタイプ的な主語と同様に、尊敬語や再帰代名詞との対応関係を持っているかどうかを考察する必要がある。実際（5）～（7）のように、プロトタイプ的な主語と同様に、再帰代名詞との対応関係がデ格主語にもみられる。

（5）野球部では自分達を賞賛している。（角田, 1991, p. 232）

（6）県警ではこの犯人を探しながら、あの犯人も探した。（角田, 1991, p. 232）

デ格名詞句は、述部の項としての解釈（動きの主体）と後置詞としての解釈（場所）という両面性においては、カラ格主語とは共通の特徴を持つ。しかし、上の2つの条件が満たされれば、デ格とガ格の間での交代が許される。さらに、統語機能的には、プロトタイプ的な主語と同様に、尊敬語を誘発することができ、また再帰代名詞および継続の「～ながら」における対応がみられる。これらの言語現象を考慮し、デ格名詞句を判断する際に、ゆれが生じるが、立派な周辺的な主語だと考えることができる。したがって、本研究では、デ格名詞句を主語として認め、デ格主語と呼ぶことにする。

1.3. まとめ

本章では、深層格、表層格、文法関係という3つのレベルでの多様な対応関係を概観し、さらに格助詞と後置詞間の相違を検討した。このような中、カラ格名詞句とデ格名詞句の主語性の問題に関して、プロトタイプ的な主語の特徴に照らしながら、統語現象、深層格、表層格という3つの側面から検討した。これらのカラ名詞句とデ格名詞句には、以下のような共通点がある。まず、深層格的には両面性がある。すなわち、述部の項としての解釈（主体）と後置詞として固有の解釈（起点と場所）である。次に、表層格では、それぞれガ格で示されるわけではない。しかし、主体として理解される場合に、ガ格との交代が許される。さらに、尊敬語、再帰代名詞化および角田（1991）で主張した継続の「～ながら」を使ってテストした結果、プロトタイプ的な主語と同様の現象を誘発できることがわかった。3つの側面を全体的に考慮した結果、カラ格名詞句とデ格名詞句はプロトタイプ的な主語と異なるが、周辺的な主語として認めるという立場が示された。

1.4. 課題

従来の記述的な研究を踏まえて、本研究でもカラ格名詞句とデ格名詞句を主語として認める立場に立つ。ところが、前節の分析には、いくつかの問題点や今まで考察を加えていない点がある。まず、先行研究では、カラ格主語文とデ格主語文の成立条件について検討する際に、深層格の両面性について、具体的に考察していない。カラ格主語について、井上（2002）は、カラ格名詞句は起点であると同時に動作主でなければならないと指摘している。デ格主語文について、日本語記述文法研究会（2009）では、「動きの主体」の条件にしか言及していない。ただし、両面性の問題は、実際に、生成言語学の原則に反している。生成言語学では、1つの名詞句は1つの深層格しか有しないと規定している。この原則は、ある名詞句の構造上の位置に関わっている。異なる深層格が異なる構造上の位置

に生成されるというのが生成言語学の考え方である（たとえば、三原, 2006）。そのため、生成言語学においては、両面性の問題は、カラ格主語文とデ格主語文がどのような構造を取るのかという問題である。これは、本研究の1つ目の課題である。

次に、日本語の深層格、表層格、文法関係における対応関係の多様性と原田（1973）の深層構造と知的意味を結びつけ、表層構造と情動的意味を結びつけるという主張とを合わせて考えると、格助詞主語と異なり、後置詞主語は「主体」と「起点または場所」という両面性があり、もともと知的意味と結びつける段階において2通りの解釈ができる。そのため、これもまた最終的に文法機能を判断する際に影響すると予想される。この意味で、2つの深層格が「競合関係」にあり、どちらか文を理解する際により強く影響するかによって結果が変わる。これもまたカラ格とデ格主語の主語性の強弱にも関わっていると言えよう。さらに、主要部後置型言語（head-final language）の日本語は、文末の動詞を見ないで、各構成素の深層格と文法機能をはっきりと判断することは難しい。日本語母語話者が動詞を見ていない時点での予測処理（pre-head anticipatory processing）と動詞を見てからの再解析（post-head parsing、とりわけかき混ぜ語順の場合）のメカニズムで文を理解することが、視線計測による心理言語学的な研究によって示唆されている（Tamaoka, Asano, Miyaoka & Yokosawa, 2014）。動詞を見ていない段階では、カラ格とデ格をそれぞれ起点と場所（後置詞）として理解する可能性がある。しかし、動作主または主体（動詞の項としての解釈）として理解しなくてはならない場合は、動詞を見てからの再解析が文処理において重要になる。この2つの点を考慮し、条件を満たせば、カラ格名詞句もデ格名詞句も主体という深層格を持ち、理論上文の主語として考えられる。こうした文について、日本語母語話者および中国語を母語とする日本語学習者がどのように理解するのか、すなわち、主語として理解するのか、それとも後置詞として理解するのかについて、心理言語学的な実証研究が期待される。これが、本研究の2つ目の課題である。

この2つの課題は表裏一体の関係をなす。2つ目の問題を明らかにすることにより、1つ目の問題もある程度解明できる。生成日本学的な仮説の多くは、心理言語学的な研究によって証明されている。たとえば、SOV 語順のガ格主語二項動詞能動文の場合、生成日本学的に動作主を表すガ格主語は、vPの指定部に生成された後、IPの主要部 (Spec IP) に移動したという仮説も、心理言語学の実験で実証されている (Koizumi & Tamaoka, 2010)。

また、目的語を文頭に移動すれば、OSV のかき混ぜ語順になる。かき混ぜ語順における目的語が IP の付加位置に移動しているため、SOV 語順より構造が複雑になる。この構造上の複雑さは反応時間に反映している。反応時間に基づく心理学的な研究では、SOV 語順の反応時間が OSV 語順より有意に速く理解され、正答率も高くなると報告している (たとえば、Tamaoka et. al., 2005)。また、視線計測により、動詞を見た後の解析がかき混ぜ語順にみられることも示されている (Tamaoka et. al., 2014)。

本研究でのカラ格主語とデ格主語に関する考察も同様に、先行研究を踏まえて、カラ格主語文とデ格主語文の構造を想定し、心理言語学の実験を行う。ガ格主語文の理解メカニズムに照らし、結果を分析することで想定したカラ格主語文・デ格主語文の構造が結果と一致するかどうか、また日本語母語話者および中国語を母語とする日本語学習者によるカラ格主語文・デ格主語文の理解メカニズムを検討する。また、非ガ格主語と関連して、日本語教育においては、カラ格・デ格・ニ格に対して、主語としての用法をほとんど教えないようである。そういう条件下で、中国語を母語とする日本語学習者にとって、どのような文法知識が非ガ格主語文の理解に貢献するのかを検討したい。

1.5. 方法

本研究では、以上の2つの課題を検討するために、主に2つの方法を取る。まず、2つの課題に対して、反応時間パラダイムに基づく文処理実験を行うという方法を使用する。実証研究として、これまでの記述的な研究と生成日本学的な研究を踏まえて、異なる主語標識と異なる語順の刺激を作り、構造にしたがって仮説を立てる。実験では、反応時間と正答率という2つの指標を使用する。反応時間は、刺激がパソコンの画面上に提示された時間から実験の参加者が指定されたボタンを押すまでの時間を指す。正答率は、正誤判断課題における刺激を正しく判断する割合である。反応時間と正答率を統計手法で分析し、その結果を用いて仮説を検証する。頻度が反応時間に影響するということがよく知られている。そのため、実験に入る前にコーパス検索で用法別で頻度を明らかにし、主語（主体）としての頻度、割合、カラ格・デ格のエントロピーと冗長度を第2部で調べておく。さらに、中国語を母語とする日本語学習者を対象にテストを行う方法で考察する。文法知識を測るテストと非ガ格主語文に関するテストをそれぞれ出題する。テストの結果を構造方程式モデリング（SEM, structural equation modeling）の因果関係の解析法を使って分析する。

第2章 コーパス検索

2.1. 目的と方法

穆（2014）では、非ガ格主語文（三上 1970 の「主格代用」）が実際にどのくらい使われているかを、『伊豆の踊子』と『雪国』の2冊を使って検討している。その結果、2つの小説における非ガ格主語文は「君から頼んでみてくれよ」のわずか1例であり、デ格主語文およびニ格主語文は見られなかった。もちろん、言語表現は、ジャンルや書き手によって随分異なってくるということが考えられ、また位相（phase）差の影響も無視できないであろう。しかし、穆（2014）の調査だけでは、特定の著者の特定の小説であるため、一般的な非ガ格主語文の実際の使用状況や使用頻度を反映しているとは言えないであろう。非ガ格主語文は、課された条件を満たせなければ、文自体の許容度がかなり落ちることも知られており、もともと後置詞自身の意味解釈も含まれているため、語用論的には、ガ格主語文と異なるニュアンスを持ち、異なる情報を伝えると考えられている。このことから、非ガ格主語文は、限られた場面や場合に限って使われることが予測され、結果として、使用頻度は低くなると推測される。

そこで、カラ格主語とデ格主語の文の頻度を調査するために、『中納言』で使用可能な3つの下位コーパスを利用し、検索をする。検索結果を用法別で分類し、主語（主体）としてのカラ格とデ格の用法の頻度、割合、カラ格・デ格全体のエントロピーと冗長度を算出する。

2.2. コーパスに関する仮説

2.2.1. 頻度假説

ガ格主語と異なり、カラ格主語とデ格主語は、深層格は動作主でなければならず、有生性や限られたタイプの動詞としか共起できないという厳しい制約を受ける。これらの条件が満たされなければ、カラ格主語文とデ格主語文の許容度が低くなるか、あるいは許容されなくなる。日本語においては、文の主語を示す際にガ格がほかの格より優位性を持つため、カラ格とデ格の用法の中では主語という用法の頻度が低いという仮説が立てられる。

2.2.2. ジャンル仮説

コーパスは、ジャンルによって表現や文章のスタイルがかなり異なることが考えられる。より均衡性を保つために、『中納言』の中から「新聞」、「広報紙」、「雑誌」のそれぞれ異なるジャンルに属する3つのサブコーパスを利用して、カラ格・デ格の各用法の頻度を検討する。これら3つのジャンルは、それぞれ異なる情報伝達の目的を持つため、文章のスタイルや助詞の用法に違いがあろう。たとえば、新聞の場合、事実を一般大衆に伝えるため、簡潔でわかりやすい表現を取るだろうが、自治体の広報紙の場合やや改まった丁寧度の高い表現を取るであろう。また、雑誌の場合、くだけた多様な表現が使われるのではないかと思われる。そこで、ジャンルによってカラ格・デ格の用法の頻度が異なるのではないかというジャンルに関する仮説を立てた。

2.2.3. 指標

主語としてのカラ格とデ格を考察する際に、頻度（または使用頻度）、割合、エントロピー、冗長度という4つの指標を使用する。頻度は各サブコーパスにおける各用法の出現回数である。頻度を出した後、割合も計算する。しかし、ジャンル仮説を検討するにあた

って、それぞれのコーパスの総合頻度が異なるため、頻度と割合は直接に比較できる指標ではない。ジャンル間で比較するためには、コーパスのサイズに左右されない指標が必要である。そこで、クロード・シャノンによって提出した情報量の尺度であるエントロピーと冗長度という 2 つの指標を利用する (Shannon, 1948)。エントロピーは、情報の曖昧さや乱雑さの増減を表す指標であり、言語研究では表現の種類と使用頻度に基づいて不規則性を示す指標として解釈され、以下の図 1 の式で求められる。

$$H = - \sum_{j=1}^j p_j \log_2 p_j$$

図 1 エントロピーの計算式

冗長度は、エントロピーともっとも不規則な状態を示すエントロピー最大値を用いた規則性の指標である。図 2 の式で求められる。ジャンル仮説に対しては、エントロピーと冗長度を使って、頻度パターンを数値化して、異なるジャンルでの主語標識の用法の頻度を比較することが可能であり、両指標を組み合わせることで、3 つのジャンルの表現の多様性と規則性の検討も可能になる。

$$R = \left(1 - \frac{H}{H_{\max}} \right) \times 100$$

図 2 冗長度の計算式

エントロピーと冗長度を利用した研究として、共起頻度（Miyaoka & Tamaoka, 2005; Tamaoka, Lim & Sakai, 2004; 玉岡・木山・宮岡, 2011; 難波・玉岡, 2016）、敬語（玉岡・宮岡・林, 2003）、袋小路文（Den & Inoue, 1997; Inoue & Den, 1999）などがある。たとえば、難波・玉岡（2016）においては、副詞またはオノマトペと共起する動詞の種類とその種類ごとの共起頻度をエントロピーで表している。エントロピーが大きい場合には、多様な動詞が副詞またはオノマトペと共起することを意味し、小さい場合には、特定あるいは限られた動詞しか副詞またはオノマトペと共起していないことを意味する。一方、副詞またはオノマトペが特定の動詞と共起するか否かを冗長度で示す。冗長度が大きい場合には、特定の動詞と繰り返し共起していることを意味し、小さい場合には、動詞との共起の繰り返しが少ないことを意味する。

本研究では、カラ格とデ格の用法を検討する場合に、エントロピーが大きければ、カラ格とデ格は多様な用法を持つことを意味し、小さければ、一定あるいは限られた用法しか持たないことを意味する。また、冗長度が大きければ、用法の中における一定の用法がくり返して使用されることを意味し、小さければ、一定の用法ではなく、多様な用法が使用されることを意味する。

2.3. コーパス

『中納言』に収録された出版サブコーパスの中の総語数は137万語の新聞、総語数は444万語の雑誌および総語数376万語の特定目的サブコーパス中の広報紙という3つのコーパスを利用した。新聞コーパスは、2001年から2005年までの5年間の全国紙（朝日新聞、毎日新聞、読売新聞、日本経済新聞、産経新聞）、ブロック紙（北海道新聞、中日新聞、西日本新聞）、地方紙（河北新報、新潟日報、京都新聞、神戸新聞、中国新聞、高知新聞、愛媛新聞、琉球新報）の中からランダムにサンプルを抽出したものである。雑誌コーパス

は、2001 年から 2005 年までの 5 年間の社団法人日本雑誌協会に加盟していた出版社が出版した定期刊行物の中からランダムにサンプルを抽出したものである。広報紙コーパスは、全国各地から、地域や人口構成比などを考慮し、100 の自治体（区市町村）をサンプリングし、2008 年度に発行された広報紙の中からランダムに抽出したものである（詳細は、国立国語研究所・コーパス開発センター(2011)の『現代日本語書き言葉均衡コーパス利用の手引き（第 1.0 版）』を参照）。

2.4. 検索、分類の方法

利用した 3 つのサブコーパスの規模があまり大きくないため、「主語＋目的語＋動詞」の 3 つのパターンで検索した結果、主語に限らず、カラ格の文そのものが見られなかった。また、デ格の文も、わずかに 4 例しか見られなかった。しかも、これらの 4 例のデ格は、主語としての使用ではなく、範囲と場所についての使用であった。つまり、このパターンで、主語としてのカラ格およびデ格の使用は皆無であった。957 万語のサイズのコーパスでは、3 つの同時検索では、カラ格やデ格の主語としての用例を見つけることはできないということを示している。

そこで、「主語＋動詞」の 2 つの条件の検索パターンで検索した。具体的には、「語形がカラまたはデ」に指定し、前方共起条件を「品詞の大分類が名詞」に指定し、後方共起条件を「品詞の大分類が動詞」に指定した。次に、各サブコーパスを 1 回ずつ選択し、短単位検索で検索をかけた。検索した結果を分類した。用法を分類する際に、『新明解国語辞典（第五版電子版）』『スーパー大辞林（電子版）』『広辞苑（第六版電子版）』の 3 つの辞書および日本語記述文法研究会(2009)によって編纂された『現代日本語文法 2』の「第 3 部格と構文」を参考にした。なお、辞書や参考資料のほかに、一部の検索結果およびカラ格とデ格主語としての用法については、日本語母語話者の判断も参照した。

辞書においては、たとえば、カラ格の用法の1つとして、「理由・原因・動機などを表す」（『スーパー大辞林（第五版電子版）の解説例』）のように併記する場合が多いが、本研究では検索結果を分類する際に、用法を併記する形を取る代わりに、カラ格の用法を11種類、デ格の用法を18種類に細かく分け、「理由」「動機」「場所」のように一文一用法のようにしている。以下では2章に分けて、カラ格とデ格の検索結果をみる。

2.5. カラ格の検索結果

2.5.1. 用法の分類

カラ格の用法について、辞書によって異なる。用法の分類が少ないのは、『新明解国語辞典（第五版電子版）』であり、6通りしかない。一方、分類が多い辞書は、『スーパー大辞林（電子版）』であり、9通りある。さらに、『広辞苑（第六版電子版）』においては、10通りある。各辞書で用法に関する記述に違いがあるが、以下のような4通りの用法は、上記の3つの辞書に共通に記載されている。

- ❶ 起点（または出発点） 「学校からまだ帰らない。」
- ❷ 経由点（または通過点） 「玄関からお入りください。」
- ❸ 原因（または理由、根拠、動機） 「風邪から肺炎をひきおこした。」
- ❹ 材料（または構成要素、原料、資料、素材） 「酒は米からつくる。」

しかし、カラ格の主語（主体）としての用法についての記述は、『新明解国語辞典（第五版電子版）』と『スーパー大辞林（電子版）』には記載されていない。『広辞苑（第六版電子版）』では「動作の発する人物を示す」との記載がみられる。この場合、実際、カラ格名詞句は動作を発する主体という深層格を持つと考えられ、文の主語としての役割を

担い思うと思われる。辞書以外では、日本語記述文法研究会(2009)によって編纂された『現代日本語文法 2』の「第3部格と構文」では、カラ格が主体の意味を担うのは、提供・伝達行為の起点となる場合であるとしている。両者から考えると、主語として使われるのは、提供・伝達行為を起点として行う人物あるいはそれに代わりうるものだと言えよう。

本研究での分類は、上述の辞書および参考資料に記載されたカラ格の用法の解説および挙げられた例文を参照した。以下は、各用法の分類基準および検索結果の中から1例を取り上げて説明する。

- ① 起点：カラ格の基本的な用法の1つであり、3種類の辞書に記載されている。本研究では、時間、空間、場所、位置、範囲などの起点や出発点などは、すべて起点として扱う。たとえば、「福岡県久留米市から駆けつけたという村出身の長谷部次義さん…」
- ② 出所：『スーパー大辞林（電子版）』に記載された「動作・作用の出どころを表す」という用法を参照した分類である。たとえば、「国民から選ばれた裁判員が…」
- ③ 順序：『新明解国語辞典（第五版電子版）』に記載された「物事の順序・範囲を示す場合の始まりを表す」という用法を参照した分類である。たとえば、「狙い球を絞って初球から振っていく」
- ④ 根拠：『スーパー大辞林（電子版）』には「理由・原因・動機などを表す」、『新明解国語辞典（第五版電子版）』には、「原因・理由・根拠を表す」というように併記しているが、本研究では検索データをもとに「根拠」そのものを用法の1つとして扱う。たとえば、「戦争演習騒動を繰り広げることから察する

と、米国が敵視政策を解消して…」

- ⑤ 構成：『スーパー大辞林（電子版）』と『新明解国語辞典（第五版電子版）』では「材料・構成要素を表す」というように併記しているが、検索データの分析をもとに「構成」そのものを用法の1つとして扱う。たとえば、「日本海の波洗う美しい島々からなる」
- ⑥ 理由：カラ格の基本的な用法の1つであり、3種類の辞書に記載されている。『スーパー大辞林（電子版）』『新明解国語辞典（第五版電子版）』『広辞苑（第六版電子版）』に記載された「原因、理由、根拠、動機」を参照した分類である。たとえば、「住民の日常生活に支障となっていたことから行ったものです」
- ⑦ 通過点：『スーパー大辞林（電子版）』に記載された「通過する位置を表す」という用法を参照した分類である。たとえば、「男は無施錠で防犯カメラセンサーのない通用門から入り…」
- ⑧ 基準：『新明解国語辞典（第五版電子版）』に記載された「予測・予想される基準に達することであることを表す」という用法を参照した分類である。たとえば、「県によると当初の予定から遅れている要因は用地取得に不測の年数…」
- ⑨ 原料：『広辞苑（第六版電子版）』に記載された「資料・素材・原料を示す」という用法を参照した分類である。たとえば、「羽織から作るコートジャケット」
- ⑩ 主語：『広辞苑（第六版電子版）』に記載された「動作の発する人物を示す」という用法および『現代日本語文法2』に記載された「『から』が主体の意味を担うのは、提供・伝達行為の起点となる場合である」という用法を参照した分類である。たとえば、「自分から申し出た工事でなければ、その場で現金を支払わないでください」

- ⑪ 数量：『スーパー大辞林（電子版）』に記載された「おおよその数量を示す」という用法を参照した分類である。たとえば、「機能により幅がありますが、四千台からあります」

2.5.2. 結果と考察

検索した結果、新聞コーパスでは696件、広報紙コーパスでは1,138件、雑誌コーパスでは3,053件が検出された。これらの結果を上記の11種類の用法に分類した。各コーパスにおけるカラ格の用法の頻度、割合、コーパス全体の割合、エントロピーおよび冗長度を計算して、表1で示した。用法からみると、新聞、広報紙、雑誌の3つのコーパスを通して、もっとも頻度が高かった用法は「起点」であり、50%以上の割合を占めていた。それに続いて、「出所」「順序」の用頻度が高かった。一方、頻度の低い用法が「数量」や「主語」「基準」「原料」であった。

表1 新聞、広報誌、雑誌コーパスにおける
カラ格の用法の頻度、割合、エントロピーおよび冗長度

カラの使用法	新聞コーパス (N=137万語)		広報紙コーパス (N=376万語)		雑誌コーパス (N=444万語)	
	頻度	割合	頻度	割合	頻度	割合
起点	428	61.49%	581	51.05%	1,942	63.61%
出所	190	27.30%	353	31.02%	669	21.91%
順序	31	4.45%	130	11.42%	184	6.03%
根拠	19	2.73%	18	1.58%	152	4.98%
構成	12	1.72%	24	2.11%	46	1.51%
理由	9	1.29%	12	1.05%	9	0.29%
通過点	4	0.57%	2	0.18%	20	0.66%
基準	0	0.00%	2	0.18%	4	0.13%
原料	2	0.29%	14	1.23%	16	0.52%
主語	1	0.14%	1	0.09%	10	0.33%
数量	0	0.00%	1	0.09%	1	0.03%
合計	696	100.00%	1,138	100.00%	3,053	100.00%
コーパス全体の割合	5.08E-04		3.03E-04		6.88E-04	
エントロピー(H)	1.55		1.79		1.60	
冗長度	55.28%		48.38%		53.71%	

注：エントロピー最大値(Hmax)は、カラ格の用法が11種類のみなので、すべてのコーパスで

3.46($\log_2 11$)である。コーパス全体の割合は、指数表記である。

以上の3つのジャンルを合わせて957万語のサイズのコーパスを検索した。この内、「名詞+カラ+動詞」のパターンが4,887件あり、用法別の内訳を表1にまとめて示した。主語として使用されたのは、わずかに12例であった。それらはすべて、表2にリストした。主語としてのカラ格の使用頻度は極めて低いことがわかった。

カラ格の用法の頻度パターンを情報量の尺度であるエントロピーと冗長度を使って数値化した。カラ格の用法の頻度について、エントロピーが大きければ、カラ格が多様な用法を持ち、小さければ、一定あるいは限られた用法しか持たないことを意味する。一方、冗長度が大きければ、一定の用法がくり返して使用され、小さければ、一定の用法ではなく、多様な用法が使われることを意味する。冗長度は、カラ格の用法の規則性を反映すると考えられる。カラ格の11種類の用法の頻度は、ジャンル別に図1から図3に示した通りである。全体的に見て、用法の頻度の分布は、3つのジャンルを通して頻度が高いのは「起点」と「出所」である。『新明解国語辞典（第五版電子版）』『スーパー大辞林（電子版）』『広辞苑（第六版電子版）』では、共通に「起点」の用法が記載しており、また『現代日本語文法 2』では、「『から』は、起点を表すもっとも基本的な格助詞である」と記載されている。コーパスを使って用法の頻度を調べた結果、やはり、カラ格のもっとも基本的な用法は「起点」であった。結果として、次に、「出所」と「順序」、さらに頻度の低い「数量」「主語」「基準」「原料」へ推移している。エントロピーと冗長度を計算した結果、表1および図1から図3に示したように、新聞コーパスにおけるカラの用法のエントロピーは1.55で、冗長度は55.28%、広報紙コーパスにおけるカラの用法のエントロピーは1.79で、冗長度は48.38%、雑誌コーパスにおけるカラの用法のエントロピーは1.61で、冗長度は53.54%であった。ジャンルと総語数が異なるにもかかわらず、3つのコーパスは、エントロピーと冗長度共に類似した数値であった。カラ格は、ジャンルにかか

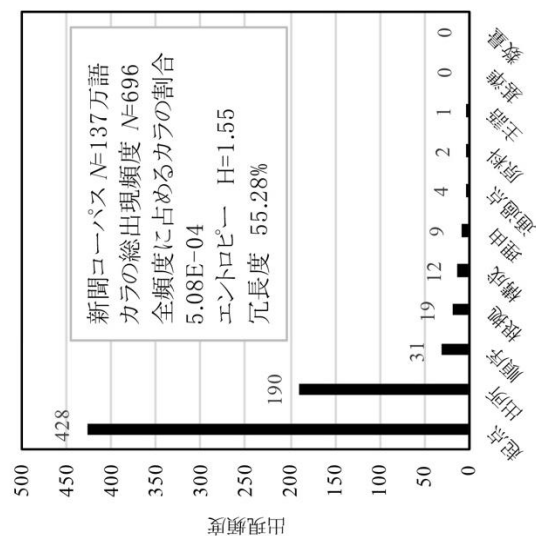


図 1. 新聞コーパスにおけるカラの使用法別頻度

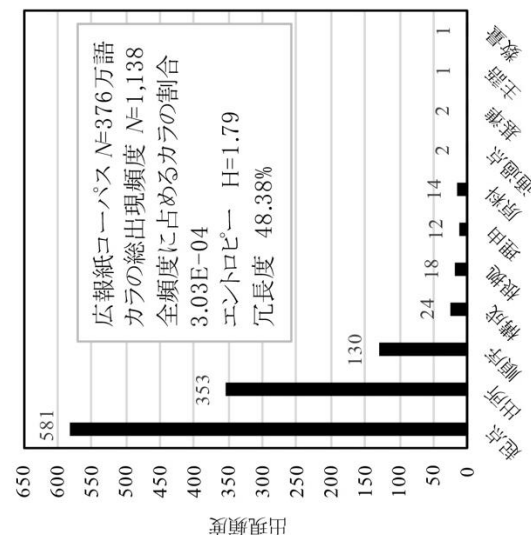


図 2. 広報紙コーパスにおけるカラの使用法別頻度

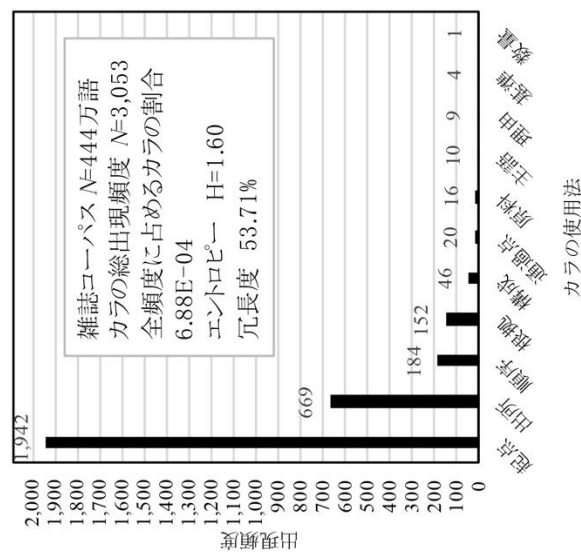


図 3. 雑誌コーパスにおけるカラの使用法別頻度

ならず、特定の用法が規則的に繰り返し使用されていることがわかる。仮説2で想定したジャンルの違いは、カラ格の用法において見られなかった。

また、表2からわかるように、カラ格主語の12の実例の中で「自分から」が11例もみられ、3分の2以上が「自分」にカラ格が付いた形式の主語であった。これは、自分という主体が起点となった主語であり、カラ格の主語というのは、これだけの用例を調べても、ほぼ「自分」を起点的な主語とするものであった。人称に関して、『現代日本語文法 2』の「第3部 格と構文」では「『カラ』が主体を表す場合には人称が関わってくる。

表2 コーパスで見つかったカラ格が主語で使われた実例 (N=12)

No.	カラ格が主語で使われた 12 の実例	コーパスの種類
1	捜査員の <u>思い</u> に犯人から近づいてきた。	出版・新聞
2	<u>自分から</u> 申し出た工事でなければ、その場で現金を支払わないでください。	特定目的・広報紙
3	いつも <u>自分から</u> 迫ってゲットするの。	出版・雑誌
4	<u>自分から</u> 求めて貧乏の底に身を置いた。	出版・雑誌
5	南美と結城に <u>自分から</u> 明かした。	出版・雑誌
6	<u>自分から</u> 望んで始めたわりにはいい加減で…	出版・雑誌
7	<u>自分から</u> 動かずして相手をその気にさせる駆け引き上手。	出版・雑誌
8	とくにファンや家族に <u>自分から</u> 謝らなきゃいけないと思っています。	出版・雑誌
9	ならば <u>自分から</u> 仕掛けよう！	出版・雑誌
10	だから、最初のきっかけをつくる面白い企画は <u>自分から</u> 持ち込まないと…	出版・雑誌
11	キヨは性格上、ダメな時は <u>自分から</u> 申し出てくるタイプ。	出版・雑誌
12	「ドライブが楽しいもの」とわかれば、 <u>自分から</u> 喜んで飛び乗るようになるはずだ。	出版・雑誌

平叙では、1人称（話し手）が主体になるのが一般的である」という記述があり、例文も「私」という1人称の例しか挙げられていない。しかしこれは、会話という言語的直感からの例文であり、書き言葉のコーパスでは、1人称の「私」や2人称「あなた」はほとんど見られないので、「自分」が主語となる例が多数となったと思われる。言語使用と特性によってカラ格の主語としての使用がある程度決まるようである。他の主語として使用された1例は「犯人」の使用しか見られなかった。『現代日本語文法 2』の「第3部格と構文」には、「3人称が主体の『カラ』を取ることもあるが、この場合でも、話し手が情報源であり、3人称者を經由して情報が伝わるという意味になる」と述べている。「情報源」または「情報が經由して伝わる」担い手の3人称の例として、「時間変更について、鈴木から知らせました」というカラ格主語文が問題なく作れるが、書き言葉コーパスを使って検索した結果、実際に3人称のカラ格主語の実例は少ない。

2.6. デ格の検索結果

2.6.1. 用法に関する分類

デ格の用法について、『新明解国語辞典（第五版電子版）』と『スーパー大辞林（電子版）』においては6通りであり、『広辞苑（第六版電子版）』においては8通りである。各辞書で使用法に関する記述に違いがあるが、以下のような4通りの用法は、上記の3つの辞書に共通に記載されている。

- ❶ 所・時・場合・場面 「家の中で遊ぶ。」「現在では、簡単に解決する問題だ。」
- ❷ 方法・手段・道具・材料 「木と紙でできた家」
「ラジオのニュースで事件を知った」
- ❸ 原因・理由 「火事ですべてを失う。」

④ 事情・状態 「いい加減な気持ちで言ったのではない」

しかし、カラ格の主語としての用法が辞書における記述が少ないのに対して、デ格の主語としての用法について、『新明解国語辞典（第五版電子版）』と『スーパー大辞林（電子版）』では「その動作・作用の主体を表わす」あるいは「動作・作用の主体を表す」というような記述がみられる。また、『広辞苑（第六版電子版）』では「事を起こした所を示す」という用法が記載されているが、例文「君の方で答えてくれ」をみると、実際に『新明解国語辞典（第五版電子版）』と『スーパー大辞林（電子版）』における「動作・状態の主体を表す」という用法に相当する。実質上、3つの辞書においては、デ格の「動作主」という用法が挙げられている。辞書以外では、『現代日本語文法2』の「第3部格と構文」では、デ格が主体の意味を担うのは、述語で表される事態に対処する組織として捉えられた主体や場所・方向として捉えられた主体を表す場合であるとしている。主語として使われるのは、グループとしてまとまった複数の主体あるいは場所・方向を持つ主体に相当するものだと言えよう。

上述の3つの辞書に記載されたデ格の使用法の解説および辞書に挙げられた例文を参照し、デ格の用法を18種類に細かく分けた。以下、各使用法の分類基準および検索結果の中から1例を取り上げて説明する。

① 場所： デの基本的な用法の1つであり、3種類の辞書に記載されている。本研究では、

「場面」「位置」および抽象的な「場所」「位置」などは場所として扱う。たとえば、「在日が大阪城公園でやっているのと同じで…」

② 立場： 『広辞苑（第六版電子版）』の中「場合」または「立場」や「視点」などをま

とめて、立場として扱う。たとえば、「イラク国民の視点で見るとイラク戦争

は侵略そのもの」

- ③ 状態： デの基本的な用法の1つであり、3つの辞書においては、「状態」という用法がみられる。本研究では、「事情」「条件」や「前提」などを表す場合でも一種の「状態」として扱う。たとえば、「中国の生産が2倍の勢いで伸びている…」
- ④ 道具： デの基本的な用法の1つであり、3種類の辞書に記載されている。たとえば、「動脈瘤をクリップで止めて破れた血管をふさぎ、出血した血液を抜き取る手術を受けた」
- ⑤ 範囲： 『広辞苑第6版（電子版）』に記載された「期限・範囲を示す」という用法の中の「範囲」を参照した分類である。本研究では、時間的な範囲や空間的、地域的な範囲なども「範囲」として扱う。また、「領域」「分野」などを表す場合でも一種の「範囲」として扱う。たとえば、「日本の広範囲で用いられていた用語であることが分かる」
- ⑥ 時間： 『スーパー大辞林（電子版）』には「動作・作用が行われる時を表す」、『新明解国語辞典（第五版電子版）』には「その動作や状態がどんな時点において問題にされるかを表す」、『広辞苑第6版（電子版）』に記載された「動作の行われる所・時・場合を示す」の中の「時」を参照した分類である。本研究では、「時間」としてまとめる。たとえば、「政府として現時点で立ち入り実現に助力する考えのないことを説明して…」
- ⑦ 主語： 『広辞苑（第六版電子版）』には「事を起こした所を示す」と『新明解国語辞典（第五版電子版）』には「動作・状態の主体を表す」、『スーパー大辞林（電子版）』には「動作・作用の主体を表す」という用法がある。これらの記述を参照し、「主語」がデ格の用法の1つとして扱う。たとえば、「塩野義製薬や大塚製薬など二十二社でつくる「タンパク質構造解析コンソーシアム」が解析し、新

薬開発につなげる」

- ⑧ 原因： デ格の基本的な使用法の1つであり、3種類の辞書に記載されている。『スーパー大辞林（電子版）』『新明解国語辞典（第五版電子版）』『広辞苑（第六版電子版）』に記載された「原因・理由」を参照した分類である。たとえば、「父親を病気や自殺、災害で失った遺児の母親の4人に1人が…」
- ⑨ 限界： 『広辞苑第6版（電子版）』に記載された「期限・範囲を示す」という用法の中の「期限」を参照した分類である。本研究では、時間的な期限だけでなく、境界なども一種の「限界」として扱う。たとえば、「二車種の生産を二千二年九月で打ち切ると発表した」
- ⑩ 付着物： 『現代日本語文法2』に記載された「手段」の下位分類の「付着物」という用法を参照した分類である。たとえば、「周りは漏れた汁で汚れて異臭を放っていました」
- ⑪ 内容物： 『現代日本語文法2』に記載された「手段」の下位分類の「内容物」という用法を参照した分類である。たとえば、「地球上はたくさんの生命で満ちている」
- ⑫ 材料： デ格の基本的な用法の1つであり、3種類の辞書に記載されている。たとえば、「吉清草で編んだかご…」
- ⑬ 構成要素： 『現代日本語文法2』に記載された「手段」の下位分類の「構成要素」という用法を参照した分類である。たとえば、「紙に印刷され読者へ届く活字や写真は、すべて電子データでできている」
- ⑭ 方法： デ格の基本的な用法の1つであり、3種類の辞書に記載されている。本研究では、手段をはじめ、方針なども一種の「方法」として扱う。たとえば、「先行減税分は後年度の増税で取り戻す方針」

- ⑮ 資格：『広辞苑第6版（電子版）』に記載された「身分・資格を表す」という用法の中の「資格」を参照した分類である。本研究では、身分も資格として扱う。たとえば、「早稲田大学で、日本史を非常勤で教えている」
- ⑯ 基準：『広辞苑第6版（電子版）』に記載された「配分の基準を示す」『スーパー大辞林（電子版）』に記載された「動作・作用の期限・限度を表す」を参照した分類である。たとえば、「多くの信号機は道路状況に関係なく、1機ごとに一定時間で切り替わる」
- ⑰ 目的：『現代日本語文法2』に記載された「目的」を参照した分類である。たとえば、「重松清さんロケハンで訪れた西城町で、役場の人から町の説明を受ける政友さん」
- ⑱ 根拠：『現代日本語文法2』に記載された「起因・根拠」の下位分類の「判断の根拠」を参照した分類である。たとえば、「三年連続減少したことが二十六日、国税庁の民間給与実態統計調査で分かった」

2.6.2. 結果と考察

検索した結果、理解できない数字や文末の「である」のような表現を除いて、新聞コーパスでは2,691件、広報紙コーパスでは4,110件、雑誌コーパスでは9,228件が検出された。これらの検出結果を18種類の用法に分類した。各サブコーパスにおけるデ格的用法の頻度、割合、コーパス全体の割合、エントロピーおよび冗長度を計算して、表3で示した。用法からみると、新聞と広報紙コーパスでは、もっとも頻度が高かった用法は「場所」であり、25%以上占めていた。雑誌コーパスでは、もっとも頻度が高かった用法は「状態」である、20%以上占めていた。3つのコーパスを通して、「場所」「状態」「道具」の頻度が高か

った。それに続いて、「方法」「原因」の頻度が高かった。一方、頻度が低い用法が「付着物」「内容物」「目的」「資格」であった。

表3 新聞、広報紙、雑誌コーパスにおける
デ格的用法の頻度、割合、エントロピーおよび冗長度

デの使用法	新聞コーパス (N=137万語)		広報紙コーパス (N=376万語)		雑誌コーパス (N=444万語)	
	頻度	割合	頻度	割合	頻度	割合
場所	795	29.54%	1043	25.38%	1834	19.75%
状態	608	22.59%	877	21.34%	2271	24.45%
道具	288	10.70%	617	15.01%	2115	22.77%
方法	269	10.00%	327	7.96%	809	8.71%
原因	152	5.65%	172	4.18%	436	4.69%
範囲	126	4.68%	223	5.43%	268	2.89%
時間	89	3.31%	86	2.09%	289	3.11%
根拠	82	3.05%	55	1.34%	44	0.47%
主語	66	2.45%	389	9.46%	278	2.99%
基準	47	1.75%	68	1.65%	178	1.92%
限界	45	1.67%	38	0.92%	86	0.93%
材料	43	1.60%	95	2.31%	330	3.55%
立場	24	0.89%	31	0.75%	168	1.81%
構成要素	21	0.78%	43	1.05%	37	0.40%
資格	20	0.74%	16	0.39%	56	0.60%
目的	11	0.41%	20	0.49%	31	0.33%
内容物	3	0.11%	2	0.05%	36	0.39%
付着物	2	0.07%	8	0.19%	22	0.24%
合計	2,691	100.00%	4,110	100.00%	9,288	100.00%
コーパス全体の割合	1.96E-03		1.09E-03		2.09E-03	
エントロピー(H)	3.09		3.12		3.06	
冗長度	10.82%		9.83%		11.49%	

注：エントロピー最大値(Hmax)は、デ格的用法が18種類のみなので、すべてのコーパス3.46(log₂11)

である。コーパス全体の割合は、指数表記である。

以上の3つのジャンルを合わせて957万語のサイズのコーパスを検索した結果、この内、（「である」や文の意味が取れない文を除外して）「名詞＋デ＋動詞」のパターンが16,089例あり、用法別の内訳を表3にまとめて示した。主語として使用されたのは、731例であった。頻度からすれば、主語の用法が多いように見えるが、割合からすれば、それぞれ新聞コーパスでは2.45%（66例）、広報紙コーパスでは9.46%（389例）、雑誌コーパ

スでは2.99% (278例) となり、いずれも10%未満である。しかし、主語より少ない用法としては、「限界」「材料」「資格」などもある。こうみると、デ格の用法の中では、主語の用法が多くはないが、あまり使われない用法よりは多い。731例の中の60例を表4にリストした(付録では、731例リストしている)。仮説1に対して、デ格主語は多くはないが、ある程度の数の使用がみられた。つまり、デ格は主語としての使用は主要な用法ではないものの、主語としてもある程度使われているという結果である。

デ格の用法の頻度パターンも情報量の尺度であるエントロピーと冗長度を使って数値化した。カラ格の用法の頻度と同様に、エントロピーが大きければ、デ格が多様な用法を持ち、小さければ、一定あるいは限られた用法しか持たないことを意味する。一方、冗長度が大きければ、一定の用法がくり返して使用され、小さければ、一定の用法ではなく、多様な用法が使われることを意味する。デ格の18種類の用法の頻度は、ジャンル別に図4から図6に示した通りである。全体的に見て、用法の頻度の分布は、3つのジャンルを通して頻度が高いのは「場所」「状態」「道具」である。『新明解国語辞典(第五版電子版)』『スーパー大辞林(電子版)』『広辞苑(第六版電子版)』では、共通に「場所」「道具」「状態」の用法が記載している。コーパスを使って用法の頻度を調べた結果、やはり、デ格のもっとも基本的用法は「場所」「道具」「状態」であった。次に、「材料」「原因」「主語」が続いており、さらに頻度の低い「目的」「資格」「付着物」「内容物」などの用法へ推移している。エントロピーと冗長度を計算した結果、表3および図4から図6に示したように、新聞コーパスにおけるデ格の用法のエントロピーは3.09で、冗長度は10.82%、広報紙コーパスにおけるデ格の用法のエントロピーは3.12で、冗長度は9.83%、雑誌コーパスにおけるデ格の用法のエントロピーは3.06で、冗長度は11.49%であった。デ格の場合にも、ジャンルと総語数が異なるにもかかわらず、3つのコーパスはエントロピーと冗長度共に類似した数値であった。ジャンルにかかわらず、特定の用法が規

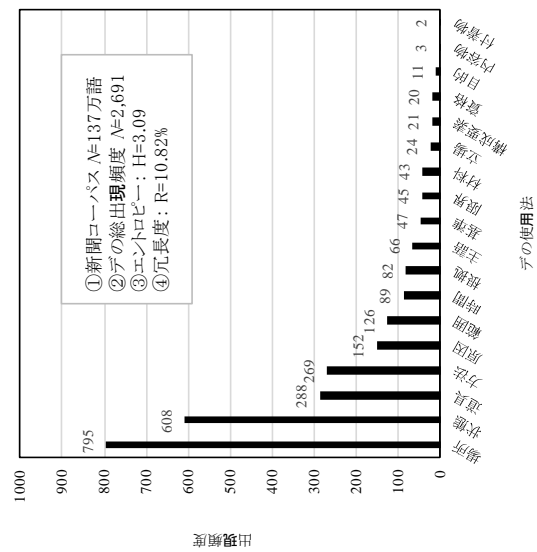


図4 新聞コーパスにおけるデ格の使用法別頻度

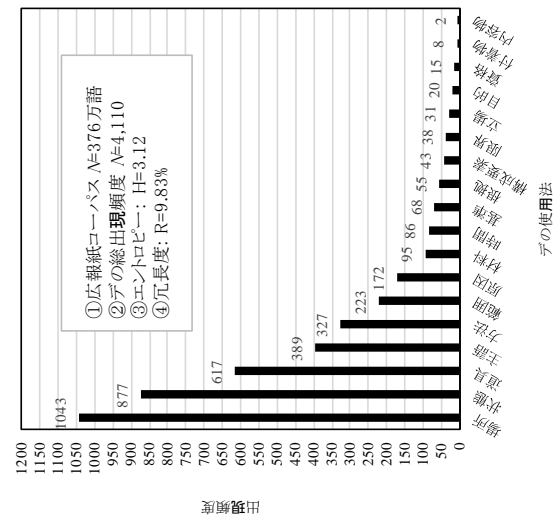


図5 広報紙コーパスにおけるデ格の使用法別頻度

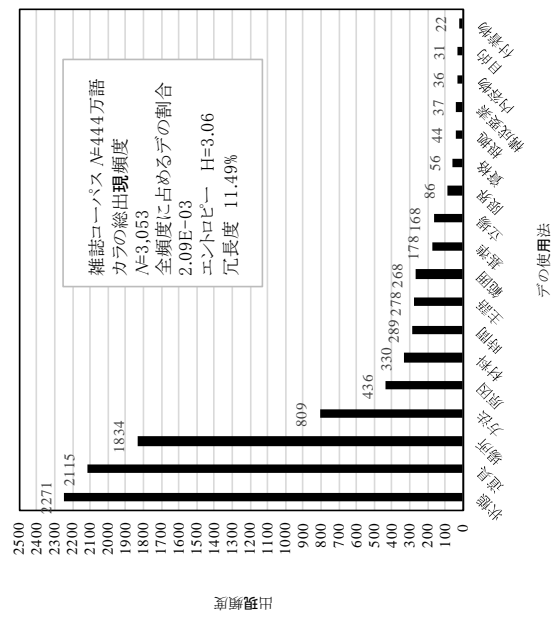


図6 雑誌コーパスにおけるデ格の使用法別頻度

則的に繰り返し使用されていることがわかる。仮説2で想定したジャンルの違いは、デ格の用法に関しても見られなかった。

表4からわかるように、デ格主語の60例の中で「半導体メーカーで」「家族で」「グループで」「地域で」「みんなで」のような例が数多くみられた。これは、『現代日本語文法 2』の「第3部 格と構文」での「事態に対処する組織としてとらえられた主体とは、複数の構成員からなるグループや、団体・組織である」という記述を裏付けている。「半導体メーカーで」「家族で」「グループで」「地域で」などのデ格主語は、1つのグループとしてまとまったある行動を行う意志を持つ主体（動作主）である。また、カラ格と同様に、「自分で」という「自分」にデ格が付いた実例が多くみられた。731の実例の中では289文あり、4割くらいを占めている。この種のデ格名詞句は動作主ではなく、状態（または条件）として考えることができるが、ガ格主語と交代できるため、主語であると考えられることも可能であろう。たとえば、「自分で作る和菓子はいいとおしく、虜になってしまいます。」が「自分が作る和菓子はいいとおしく、虜になってしまいます。」に書き換えることができ、さらに、「自分の作る和菓子はいいとおしく、虜になってしまいます。」というガ・ノ交代も可能である。そこで、本研究では、「自分で」のような主語を文処理実験の検討対象としないが、主語として分類することにした。また「自分で」に近い例として、「個人で」「自分自身で」もみられた。

表4 コーパスで見つかったデ格が主語で使われた実例（一部）

No.	デ格が主語で使われた実例	コーパスの種類
1	<u>香港の半導体メーカーで</u> つくる香港電子業協会のK・B・チャン副会長らが...	出版・新聞
2	一か所に届けられた品物を <u>グループで</u> 仕分けする作業を通じて...	出版・新聞
3	<u>北朝鮮による拉致被害者の家族で</u> つくる「家族連絡会」（■■■代表）は...	出版・新聞

4	塩野義製薬や大塚製薬など <u>二十二社</u> でつくる「タンパク質構造解析コンソーシアム」...	出版・新聞
5	二十四日までの二泊三日の赤倉温泉への旅行。 <u>家族</u> で行った思い出の地。	出版・新聞
6	<u>自分で</u> 作ったもので遊ぶのは、いつもとちょっと違うような気がします」	出版・新聞
7	初めて <u>自分で</u> 巻いてみた。	出版・新聞
8	松田さんは「安楽死」を自分の生き方を <u>自分で</u> 決める市民の自己決定の思想と結びつけている。	出版・新聞
9	張氏は核心である西安事件について「語らないという誓いを <u>自分自身</u> でたてていた」という。	出版・新聞
10	「スーツだよ。生地はいい。 <u>たぶんジム・トンプソン</u> で仕立てた。	出版・新聞
11	それは <u>みんなでやるべきだ</u> という意見が出てきたら...	出版・新聞
12	<u>親子</u> で学ぶ大地の恵み新潟大村松農場	出版・新聞
13	「... <u>みんなで</u> 楽しんでみて下さい」と飛田さんは話している。	出版・新聞
14	「こんな時代だからこそ、 <u>みんなで</u> 立ち上がる意識を持とう」と。	出版・新聞
15	賞金三十万円も <u>みんなで</u> 使います」 夫は経済学者。	出版・新聞
16	三陸沿岸の魅力 <u>親子</u> で楽しんで宮城・参加者募集	出版・新聞
17	「 <u>みんなでやるのが</u> 霞が関のおきて」と迫られ...	出版・新聞
18	<u>親子</u> で悩みました。でもチャンスが来たのが普通の子より早かったんだ...	出版・新聞
19	太鼓なら <u>親子</u> でやれそう、というものだった。	出版・新聞
20	中学生が、 <u>自分で</u> 作った浴衣を着るための着付け教室が二日...	出版・新聞
21	「認知症を学び <u>地域</u> で支えよう」	特定目的・広報紙
22	<u>有志の児童</u> でつくる「毛利台U F O, S」(会員数四十五人)	特定目的・広報紙
23	「 <u>みんな</u> でつくろう犯罪のないまち世田谷」	特定目的・広報紙
24	<u>自分で</u> 考えた柄を布に染めます。	特定目的・広報紙
25	むし鶏のグリーンサラダ、わらびマンゴーを <u>親子</u> で作る講座	特定目的・広報紙
26	<u>みんなで</u> 祝おう開湯年百五十年	特定目的・広報紙

27	市民サービス <u>グループ</u> で受け付けています。	特定目的・広報紙
28	<u>地域全体</u> で支えていくことが大切です。	特定目的・広報紙
29	防犯の基本は、「自分の身は <u>自分で</u> 守る」を心がけることといわれます。	特定目的・広報紙
30	<u>みんなで支える介護保険</u> ～介護保険利用の手続きについて、お知らせします	特定目的・広報紙
31	読書活動で、1年間に1万冊の本を読むことを目標に掲げ <u>全校</u> で取り組みました。	特定目的・広報紙
32	また、今回の大会では <u>河合町の有志</u> でつくる楽団ニューコメッツが...	特定目的・広報紙
33	町おこしに活用しようと <u>住民</u> でつくる実行委員会が主催。	特定目的・広報紙
34	巻き寿司に挑戦旭ヶ丘地区の <u>高齢者</u> やサポーターで作る水曜会が...	特定目的・広報紙
35	出会いを求める独身者からの相談に <u>ボランティア</u> で応じ...	特定目的・広報紙
36	業者登録申請を、 <u>市役所契約検査課</u> で受け付けますので...	特定目的・広報紙
37	<u>東京農工大学の学生</u> で作る「耕地の会」は、農業・農村、山の暮らしの知恵を学ぼうと...	特定目的・広報紙
38	さまざまな活動を <u>ボランティア</u> で行っています。	特定目的・広報紙
39	<u>全校</u> で取り組んでいます。	特定目的・広報紙
40	<u>和知地区北部五集落</u> でつくる地域振興組織「北部振興会」が十二月九日...	特定目的・広報紙
41	<u>チーム全体</u> で追い求める姿には、大きな期待が感じられた。	出版・雑誌
42	<u>自分で</u> 作ったあんは、本当においしいものです。	出版・雑誌
43	<u>自分で</u> 作る和菓子はいいおしく、虜になってしまいます。	出版・雑誌
44	練りきりまでもが <u>自分で</u> 作れることを知り...	出版・雑誌
45	加藤さんと渡辺さんとの <u>相方</u> で話し合いした結果、接見日が決定した。	出版・雑誌
46	古賀幹事長との <u>コンビ</u> で封じ込めるてくれるのではと建設族から期待されている。	出版・雑誌
47	自分で考え、 <u>自分で</u> 決定する力を持つことが、より大事なことになっていく。	出版・雑誌
48	正解を <u>自分で</u> つくりだす力である。	出版・雑誌
49	<u>自分で</u> 考えることのできる人物ということになる。	出版・雑誌

50	どうしても <u>自分で</u> やらないと気が済まんもんでね。	出版・雑誌
51	彼と <u>2人</u> で住んでいるアパートメントで。	出版・雑誌
52	今は一人で悩まず、 <u>二人</u> で考えるようにしています。	出版・雑誌
53	カジュアルで気どらない空間は、 <u>仲間</u> で行くのが断然楽しい。	出版・雑誌
54	<u>二人</u> で出かけたんだって？	出版・雑誌
55	今度、 <u>みんなで</u> 遊ぼう	出版・雑誌
56	<u>二人</u> で遊んでるの？	出版・雑誌
57	そんな <u>親子</u> で楽しむ、子どもの成長記録。	出版・雑誌
58	生産者が <u>自分で</u> 作ったものが売れていくおもしろさを知り...	出版・雑誌
59	撮影前なのに <u>皆</u> で酔っぱらっちゃいました（笑）。	出版・雑誌
60	恋人と <u>ふたり</u> で過ごすより、仲間とつるむのが好き...	出版・雑誌

2.7. まとめ

カラ格主語文については、基本的に移動を表す動詞でなければ、カラ格が主語を示すことができない。また1人称が主語となる場合が多いという先行研究の指摘があるが、コーパス検索の結果、主語としてのカラ格の頻度は低く、3つのサブコーパスの957万語においては、わずかに13例しか見られなかった。カラ格主語の厳しい成立条件は、頻度が低くなる原因の1つとして考えられる。

一方、デ格主語文については、1つのグループとしてのまとまった意志を持つ団体や組織がある行動を行う条件であれば、主語として扱うことが可能であるが、本研究では、深層格は動作主として扱うことができ、またガ格主語と交代できるという立場から、「自分で」も主語としてみなすことにした。コーパス検索の結果、3つのサブコーパスの957万語においては、767の例が見つかった。主語としてのデ格の頻度が基本的な用法より低

かったが、ある程度使われていると言えよう。おもしろい結果として、「自分」にカラ格とデ格がついた事例が多くみられた。また、エントロピーと冗長度からすれば、デ格がカラ格より多くの用法を持ち、より多様な用法が使われていることがわかった。

このコーパス検索の結果、カラ格主語とデ格主語の頻度は低く、また主語の以外に多様な用法がみられた。そのため、文を構成する名詞や動詞を統制した処理実験においては、ガ格主語に比べて、カラ格主語文とデ格主語文の正誤判断あるいは意味理解のための反応時間は長くなり、正答率も低くなると予想される。

第3章 文処理実験およびテスト調査

3.1. 後置詞主語と格助詞主語の構造

3.1.1. 階層的な構造と格付与

今日では、日本語は階層的構造を取るという主張が広く支持されている。しかし、かつては非階層的な構造を取ると思われる時期があった。三上は「主格も補語」というとらえ方や日本語の語順が自由であり、文頭に来るのはガ格だけでなく、ヲ格も来られるということから、早い時期に三上もおそらく日本語の核文は非階層的な構造を取ると考えていたであろう。柴谷（1978）は、主語存置を主張しているものの、主語が他の名詞節と同じように述語節に対して構造的には均等な関係を持つと考え、図1のように、日本語のガ格主語能動文の構造を描いている。また、比較的自由的な語順を持つという言語現象に基づいて、Farmer（1984）や Hale（1980, 1982, 1983）なども日本語の文が平らな構造を取ると考えた。

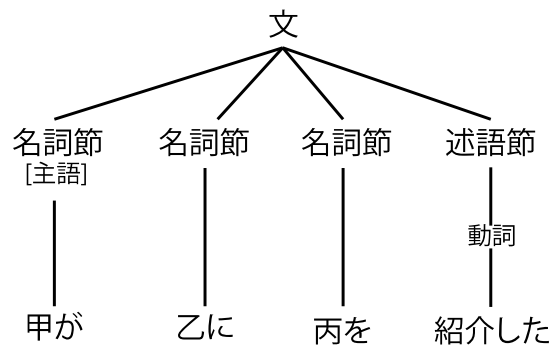


図1 平らな構造を取るガ格主語能動文（柴谷1978：195）

図1では、ガ格主語、ニ格目的語、ヲ格目的語が同じレベルにある。こういった構造を想定すると、異なる語順であっても処理上の負荷が一樣であるという仮説を立てられる。ところが、文正誤判断（Tamaoka, et. al., 2005）および視線計測（Tamaoka, et. al., 2014）を含

めた多くの心理言語学的な研究で、かき混ぜ語順が正順語順より処理負荷が大きいと報告している。こうした日本語母語話者の文処理実験の結果から、図2のように、日本語の正順語順は階層構造を持つ SOV を取るという主張 (Hoji, 1985; Miyagawa, 2010) を支持している。

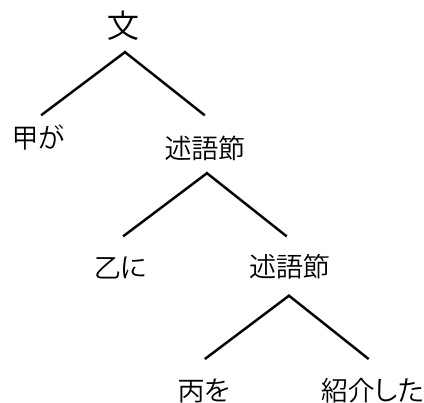


図2 階層的な構造を取るガ格主語文 (柴谷, 1978 より改正)

日本語文は階層的構造を持つということを前提にして、ミニマリストプログラムにおいて、主語は、動作主として理解される場合には、まず **vP** の指定部に生成されてから、屈折辞 **IP** の指定部に移動される。一方、対象や経験者として理解される場合には、**VP** の補部に生成されると設定している。すなわち、主語は深層格によって基本生起位置が異なる。逆に、本研究でのカラ格主語とデ格主語のように、ガ格と同じ深層格を持つが、表層格が異なる場合に、まず同じ基本位置に生起され、その後、基本生起位置に残るか、もしくは、派生位置に移動されるかどうかについては、格付与の問題に関わってくる。

ガ格主語名詞句は **I** との一致があり、**IP** の主要部からガ格を付与されるため、主語名詞句が格をもらえる位置に移動されなければならない。**vP** 指定部から **IP** の指定部への移動はかき混ぜの移動と異なり、格付与のための移動である (竹沢・Whitman, 1997)。一方、

カラ格主語名詞句とデ格主語名詞句は、それぞれカラ格とデ格から格をもらえるため、わざわざ I から格をもらう必要がない。その結果、vP の指定部に留まる（井上, 2002; Ueda, 2003）。

「私がこの件を説明する」と「私からこの件を説明する」という2つの文を例に具体的に説明する。この2つの文は、主語の表層格以外は、文の構成素はまったく同じである。この現象に対して、日本語学的には格助詞間の交代として捉えられるが、生成日本語学では、格助詞と後置詞間の交代として捉える。このような交代によって、文の生成過程および文の構造が異なってくる。以下はまず格付与の問題を説明し、次節では文の構造を取り上げる。

ガ格主語文は以下のような手続きで生成される。最初の段階では、「私」「この件」「説明する」という3つの構成素がある。次の段階では、最初に「説明する」と「この件」との間に一致が起こり、「説明する」⁷が「この件」にヲ格を付与する。次に「わたし」と屈折辞の主要部 I⁸「(sur)-u」との間に一致が起こり、I「(sur)-u」が「私」にガ格を付与し、ガ格主語能動文が出来上がる。この流れは、図3のようになる。

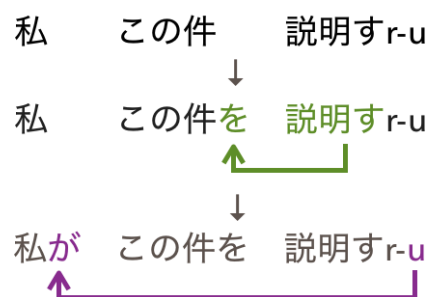


図3 ガ格主語文の格付与パターン

⁷v と V のどちらかがヲ格を付与するかは考えない。

⁸本研究では I に統一する。

一方、カラ格主語文またはデ格主語文は以下のような手続きで生成される。最初の段階では、「私」「から」「この件」「説明する」という4つの構成素がある。次の段階では、最初に「説明する」と「この件」との間で一致が起こり、「説明する」⁹が「この件」にヲ格を付与する。次に、主語名詞句が「(sur)-u」との間で一致が起こるのではなく、後置詞「から」と一致が起こることにより、「から」が「私」に格を付与し、カラ格主語能動文が出来上がる。この流れは、図4のようである。

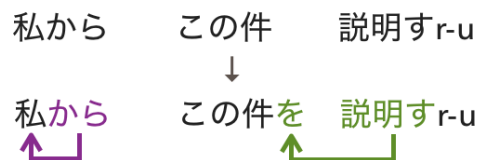


図4 カラ格主語文の格付与パターン

図3と図4からわかるように、構成素の段階で、カラ格はすでにあらわれている。しかし、ガ格はすぐにはあらわれず、IPの指定部に移動してからあらわれる。そのため、カラ格は、ガ格よりも早い段階で生成されることになる。主語を表すガ格のように、構造から格をもらい、文の構造によって生起位置が変わる格は、構造格とも呼ばれる。一方、カラ格のように、構成素の段階ですでにあらわれてきており、他の名詞句に格を与える能力がある格は、固有格とも呼ばれる（三原，2006 参照）。

⁹vとVのどちらかがヲ格を付与するかはここでは考えない。

3.1.2. 格助詞（ガ格）主語文と後置詞（カラ格・デ格）主語文の構造

前節では、格助詞または構造格および後置詞または固有格の格付与について検討した。

本節では、格付与に関連して、具体的に正順語順とかき混ぜ語順のガ格主語文および先行研究の指摘による正順語順カラ格主語文の構造について検討する。

前節で述べた内容を合わせて言えば、動作主という深層格を持つガ格主語が最初に **vP** の指定部に生成されるが、格を得るために **IP** の指定部に移動する。これは、主語上昇構文と呼ばれる。**vP** の指定部は動作主主語の基本生起位置である。**IP** の指定部は派生位置である。図5に示したように、ガ格主語が基本生起位置に生起された時点では、主語名詞句の後ろにガ格があらわれていない。派生位置である **IP** の指定部に繰り上げられてから、ガ格がつく。

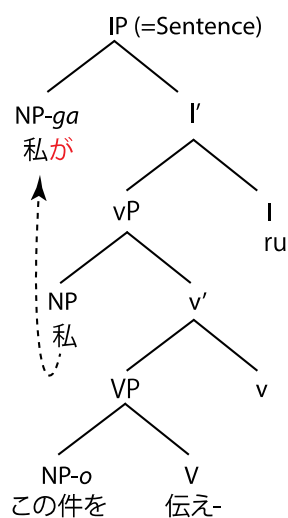


図5 ガ格主語文の構造

一方、動作主という深層格を持つカラ格主語（およびデ格主語）は、ガ格主語と同様に、基本生起位置の **vP** の指定部に生成されるが、カラ格やデ格から格をもらえるため、**IP** の指定部に移動する必要はない。結果として、ガ格主語のように、**IP** の指定部まで上昇しな

いと、井上（2002）は考えている。これについては、Ueda（2003）は、以下の（１）と（２）に示されているように、使役テスト（causativization test）を利用し、カラ格主語がvP内に留まる証拠を示している。

(1) Mary-ga [John- *ga^{OK}-ni ringo-o tabe]-sase-ta.

NP(Mary)-NOM NP(John)-NOM/-DAT NP(apple)-ACC V(eat)-CAUS-PAST

‘Mary made John eat an apple.’

(2a) VP adverb

Taro-wa [*yukkuri*to watasyi-kara Mary-ni kanozyo no byoozyoo-o

NP(Taro)-TOP Adv(deliberately) NP(I)-from NP(Mary)-to NP(her condition)-ACC

V(setumei-s)]-(s)ase-ta.

V(explain)-do-CAUS-PAST.

‘Taro made [me explain her condition to Mary deliberately].’

(2b) Sentential adverb

* Taro-wa [*saiwai* watasyi-kara Mary-ni kanozyo no byoozyoo-o

NP(Taro)-TOP Adv(fortunately) NP(I)-from NP(Mary)-to NP(her condition)-ACC

V(setumei-s)]-(s)ase-ta.

V(explain)-do-CAUS-PAST.

‘Taro made [me explain her condition to Mary fortunately].’

(Ueda 2003)

（１）の使役文においては、ガ格主語が埋め込み文の中に現れることが許されないことを示している。この場合には、主語の「John」はガ格ではなく、ニ格によってマークされ

ねばならない。他方、(2a)を通して、VP 副詞「ゆっくり」が埋め込み文の中に現れることが許されることがわかる。しかし、(2b)における文副詞「幸いに」の埋め込み文中の出現が許されない。Ueda (2003) は、ここまで議論しているが、カラ格主語の動詞句内の位置については、特定していない。しかし、本研究では、以上の Ueda (2003) の議論からさらに、カラ格主語は vP の指定部にそのまま留まっていると考えて、考察を進めていく。

しかしながら、第 1 章では、カラ格主語やデ格主語のような後置詞主語には、2 つの深層格が「競合関係」にあることを述べた。一方で、生成文法では、構造上の位置を考慮し、1 つの名詞句が 1 つの深層格しか持つことができないように規定している。異なる深層格によって、生起位置が変わり、文の構造も異なってくる。たとえば、カラ格名詞句が起点として理解されれば、動詞の項としての解釈でなくなり、構造上は付加詞 (adjunct) として位置付けられ、VP 内に生成されることになる。これに対して、動作主として理解されれば、動詞の項としての解釈になり、外項の位置に上昇することとなる。結果として、図 6 のように、動作主としてのカラ格主語は VP 内に生成され、vP の指定部に上昇すると想定したほうがより妥当である。これで、ガ格主語もカラ格主語も上昇があると考えられることができるが、格付与の問題で派生位置に移動される格助詞主語と基本生起位置に留まる後置詞主語に分けることができる。いずれにしても、カラ格主語が vP 内においてもっとも高い位置にあるため、主語の優位性が保たれ、他の vP 内の句を C 統御 (c-command) でき、また尊敬語なども誘発できる。結局、ガ格主語と同様の統語機能を持つことになる。

この 2 つの構造が本研究の根幹となる。かき混ぜ語順も図 5 の正順語順または基本語順から派生したものである。次節では、かき混ぜ語順の構造を示しながら、生成言語学における文構造の想定が、心理言語学的な研究を通してどのように反映されるのか、また、心理言語学的な実験結果がどのように文構造を検証するのかを概観する。

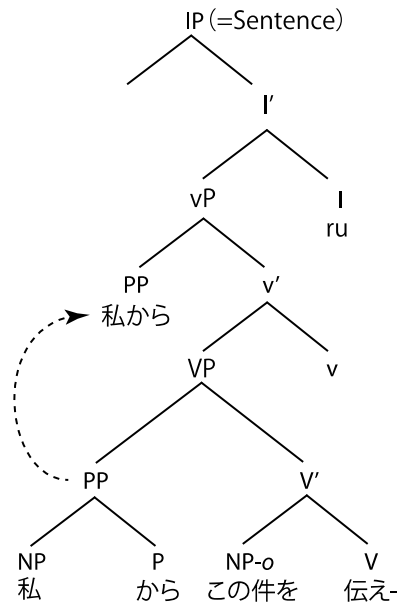


図6 カラ格主語文の構造

3.2. 心理言語学の先行研究から

第1章では深層格と表層格における対応関係の多様性に伴う日本語の主語の複雑な統語現象に対して、理論的に分析する際に深層格レベルと格レベルという2つのレベルだけで説明できる主語廃止論と、文法関係レベルを加えて3つのレベルで説明する必要があるとする主語存置論があるという対立を概観した。理論的に様々なレベルが必要だと主張したとしても、また尊敬語化・再起代名詞化テストを行うことによって主語であると判断することができたとしても、階層的な構造における主語の働き、日本語母語話者がどのようなメカニズムで主語を理解するのかなどの問題が残る。本章では、反応時間と視線計測に基づく心理言語学の実験を通して、原田の考え方を含めて、文を理解する際の主語の優位性、日本語母語話者による文理解のメカニズム、生成日本学における異なる統語構造、さらに異なる語順がどのように文を理解する際の時間や負荷に反映されるのかを検討する。

3.2.1. 主語の優位性

原田（1973）の考え方について、深層格を含めて考えると、深層格レベルは生成過程における深層構造の段階に相当し、知的意味を結び付ける。文法関係レベルは表層構造の段階に相当し、情動的意味を結びつけることになる。知的意味につながる深層格は表層格より抽象的で、形がまだ具現されない段階であるため、知的意味の原型だと言えよう。対応関係の多様性によって、日本語における知的意味は、多様な表層格で具現化されることが可能である。実際、表層格の段階では、文の生成がすでに完了している。原田（1973）は深層構造と表層構造が同時に文の意味に影響すると主張している。本研究では、文法機能の判断や情動的意味の理解は文の処理に関わる問題であり、このプロセスでは、深層格と表層格が同時に影響しないのではないかと考える。

そうすると、理論的には、文法関係レベルに到達するまでのプロセスとしては、知的意味を表す深層格を想定して、格レベルに入る。各名詞句は一致によって様々な格を付与される。最後に、文法関係レベルに入る。つまり、文を生成するプロセスでは、3つのレベルがすべて関与していることが考えられ、文を理解する際にも3つのレベルからの影響を受けることになる。これらの理論上の仮説は、どのような方法で検証するのかに対して、Tamaoka et al.（2005）の研究によって、その一端を窺うことができる。

Tamaoka et al. (2005) は、心理言語学的に日本語母語話者は深層格（thematic roles）、表層格（case particles）、文法機能（grammatical functions）の中のどれが正順語順を決める際に優位に働くかを考察している。反応時間に基づく文処理実験の刺激は、例（3）～例（7）のようにガ格主語二項動詞能動文（active sentences with transitive verbs）、ガ格主語三項動詞能動文（active sentences with ditransitive verbs）、直接受身文（passive sentences with transitive

verbs)、ニ格主語可能文 (potential sentences)、使役文 (causative sentences) という 5 種類からなる。刺激はそれぞれ正順とかき混ぜ語順の 2 種類に分けている。

- (3a) 花子が太郎を殴った。(正順語順)
- (3b) 太郎を花子が殴った。(かき混ぜ語順)
- (4a) 花子が太郎に本を返した。(正順語順)
- (4b) 本を花子が太郎に返した。(かき混ぜ語順)
- (5a) 太郎が花子に殴られた。(正順語順)
- (5b) 花子に太郎が殴られた。(かき混ぜ語順)
- (6a) 花子に英語が話せる。(正順語順)
- (6b) 英語が花子に話せる。(かき混ぜ語順)
- (7a-1) 純子が弟子にアトリエを作らせた。(正順語順)
- (7b-1) 純子がアトリエを弟子に作らせた。(かき混ぜ語順)
- (7a-2) 純子が弟子をアトリエにこもらせた。(正順語順)
- (7b-2) 純子がアトリエに弟子をこもらせた。(かき混ぜ語順)

実験の結果は以下のようである。まず、ガ格主語二項動詞能動文においては、(3a) が (3b) より有意に速く処理され、ガ格主語三項動詞能動文においても、(4a) が (4b) より有意に速く処理された。二項および三項のガ格主語文能動文の実験を通して、日本語母語話者は主語が文頭に来るのを想定することがわかる。目的語が文頭に来る場合、処理速度が落ちてしまう。

次に、被動作主がガ格で、動作主がニ格示される直接受身文において、(5a) が (5b) より速く処理された。直接受身文の実験を通して、正順語順であるかどうかを判断する際

に、深層格が優位に働いていないことがわかる。仮に優位に働くとするなら、（能力の）主体（ニ格）-対象（ガ格）という語順のほうがより迅速に処理されるはずである。

同じく、主語がニ格で示されるニ格主語可能文においては、（6a）が（6b）より速く処理された。ニ格主語可能文の実験を通して、正順語順を判断する際に、表層格の情報も優位に働いていないことがわかる。仮に優位に働くとするれば、ガ格-ニ格という語順のほうがより速く処理されるはずである。

最後に、異なる格パターンを持つ使役文において、対格動詞（accusative verbs）の場合に、（7a-1）が（7a-2）より速く処理され、与格動詞（dative verbs）の場合に、（7a-2）が（7b-2）より速く処理された。使役文の実験を通して、正順語順を判断する際に、文法機能の情報を深層格と表層格より優位に働いていることを示唆した。このことは、主語が正順語順を判断する際の優位性も裏付けている。

Tamaoka et al. (2005) を通して、少なくとも以下の2つのことが言える。1つは、日本語においては多様な語順が存在するものの、SOV 語順が正順語順である。かき混ぜ語順の処理には長い時間がかかることから、日本語母語話者は正順語順にしたがって文を理解していると考えられる。もう1つは、主語名詞句がニ格で示されても、主語として理解され、ガ格主語文と同様に、正順語順の方がかき混ぜ語順よりも迅速に処理される。このことは、主語がガ格以外の標識で示されていても、日本語母語話者はその影響を受けずに、主体という深層格を持つニ格名詞句を文の主語として、対象という深層格を持つガ格名詞句を目的語として正しく判断し、ガ格主語文と同じメカニズムでニ格主語文を理解できることを示している。

これとは対照的に、玉岡（2005）は、中国語を母語とする日本語学習者によるニ格主語可能文の文処理実験の結果から、正答率が非常に低くなることを報告している。この結果は、中国語を母語とする日本語学習者はニ格名詞句を間接目的語として、ガ格名詞句を主

語として理解される可能性を示唆する。深層格と表層格が一对一として文を理解すれば、「あの子に本当にスペイン語が話せるの？」のような文は、正しく理解できないことになる。

そこで、かき混ぜ語順がより長い反応時間が必要となる理由は何であろうか。また、かき混ぜ語順の文がどのような構造を持っており、日本語母語話者がどのようなメカニズムでかき混ぜ語順を理解しているかについて、次節では構造を示しながら、考察していきたい。

3.2.2. スクランブル効果と空所補充解析

Tamaoka et al. (2005) の実験結果と考察から、正順語順を判断する際に、文法関係が深層格と表層格より優位性を持ち、日本語母語話者はどの名詞句が文の主語であるかを確認した上で、SOV 語順文にしたがって文を理解するようであることをまとめた。心理言語学では、生成日本語学上の主張にしたがって、「花子がケーキを食べた」というガ格主語二項動詞能動文の場合、[_S NP(花子)-ga [_{VP} NP(ケーキ)-o V(食べる)-PAST]]というような構造を取ると想定する（たとえば、Kuroda, 1988; Kitagawa, 1986; 玉岡, 2005; Tamaoka, et al., 2005 など）。この構造においては、ガ格名詞句（主語）が文頭にきて、次に動詞句が続く。動詞句内は、対格によって標示されたヲ格名詞句（目的語）と、最後に主要部の動詞がくる。正順語順の日本語の文は、このような階層構造を持ち、この構造を基底構造と呼ぶ。

正順語順の構造における動詞句内にあった目的語を動詞句外に移動すると、「ケーキを花子が食べる」となり、[_S NP(ケーキ)-o [_S NP(花子)-ga [_{VP} gap_i + V(食べる)-PAST]]という目的語の句の移動を含むかき混ぜ語順（scrambled word order）となる。前節で述べたように、正順語順の文に比べて、かき混ぜ語順のほうの処理時間が有意に長くなり、処理負荷が大きいことが知られており、これはスクランブル効果（scrambling effect、かき混ぜー

正順＝スクランブル効果）と呼ばれている（玉岡 2005、Tamaoka, et al., 2005、Tamaoka et. al., 2014）。スクランブル効果は、心理言語学的には空所補充解析（gap-filling parsing）に起因するとされている。

日本語は、主語が省略される（pronoun dropping）ことの多い言語であり、「今朝、コーヒーを飲んだ」「塾に通っているよ」などの主語のない文は頻繁にみられる。「りんごを広志が食べた」というかき混ぜ語順においては、目的語が文頭に来ているため、「りんごを」とみると、日本語母語話者は基底構造にしたがって、まずガ格主語が省かれた空主語文であると想定し、次に動詞がくると予想するであろう。しかし、「りんごを」の後ろに主語の「広志が」がくると、文頭の「りんごを」が埋語（filler）であることに気づき、「広志が」の後ろに空所（gap）があるのを想定するようになり、埋語・空所の依存関係（filler-gap dependency）を確立し、動詞がくるのを待つことになるであろう。最後に「食べた」という他動詞がくると、文の理解あるいは処理が完結する（玉岡, 2005 参照）。このような文処理のモデルは、空所補充解析と呼ばれている（Crain & Forder, 1985; Frazier, 1987; Frazier & Clifton, 1989; Frazier & Flores D’Arcais, 1989; Stowe, 1986）。構造的にこの統語操作を見れば、図 7 のように、かき混ぜ語順の二項動詞能動文では、目的語がもとの VP の補部（*t* の位置）からもっとも高い位置の IP 付加位置に移動されているため、正順語順より複雑な構造を持つ。

Tamaoka et al. (2005) では、能動文、受動文、可能文、使役文のすべてで、かき混ぜ語順のほうが正順語順よりも処理時間が長くなるのが観察された。このことから、日本語母語話者は、それぞれの構文の基底構造を想定し、空所補充解析でかき混ぜ語順を理解すると考えられる。言い換えれば、文の構成素がそれぞれもとの位置にあれば（正順語順）、文を理解する時に負荷が少なく、処理時間が速くなる一方、文の構成素がもとの位置にあらわれなければ（かき混ぜ語順）、空所補充解析を誘発されることで、負荷が大きくなり、

結果的に処理時間が遅くなる。しかし、ここで1つの問題がある。それは Tamaoka et al. (2005) では各名詞句が動詞の項として解釈されている。カラ格名詞句とデ格名詞句が主語として考えられていても、後置詞の性格を考慮する上では、項ではなく、付加詞としての可能性があり、日本語母語話者による付加詞の処理メカニズムをみる必要がある。

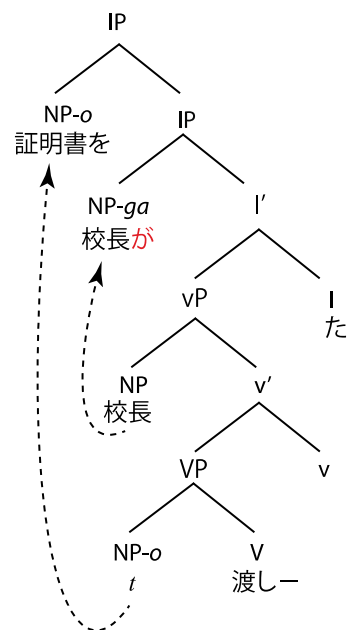


図7 かき混ぜ語順のガ格主語文

3.2.3. 付加詞の処理メカニズム

生成日本語学では、副詞と同様に後置詞句も付加詞として扱っている。後置詞句は自身で深層格を持ち、これらの深層格が修飾語として文の意味に参画できるが、動詞が求める要素（項）ではなく、情報を付け加えるだけである。そのため、構造的には、付加詞は付加位置に生成される（長谷川，1999を参照）。「校長から証明書を渡した」のような二項動詞能動文におけるカラ格名詞句は、動作主ではなく、起点として理解される場合、実際に、Koizumi (1993) でのVP副詞（Verb Phrase 副詞）に近く、動作主主語の生起位置で

あるvPの指定部まで上げられることがなく、そのままVP内に留まることが考えられる。

VP副詞は、図8のようにVP内に生起し、Vおよびその投射を修飾する。起点を表すカラ格と場所を表すデ格も同じ位置に生成されると予想する。カラ格主語文の構造を示したので、ここでは簡略にして、図8で示しておく。

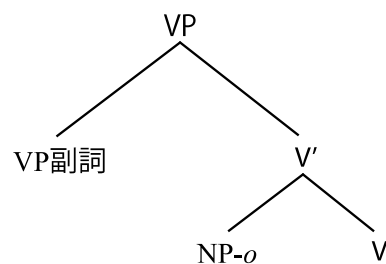


図8 VP副詞の位置

小泉・玉岡（2006）では、VP副詞を含めて、Koizumi（1993）におけるMP副詞（Modal Phrase副詞は、MP内に生起し、Mおよびその投射を修飾する）、TP副詞（Tense Phrase副詞は、TP内に生起し、Iおよびその投射を修飾する）という3種類の副詞を含めた文のASOV（AdvSOV語順、Advは副詞を指す）語順、SAOV語順、SOVA語順の反応時間を文処理実験で計測した。その結果、MP副詞については、ASOV語順がもっとも速く処理された。反応時間の順は、ASOV語順<SAOV語順<SOVA語順である。IP副詞については、ASOV語順とSAOV語順の間で有意な差が見られなかったが、SOVA語順がASOV語順とSAOV語順より反応時間が有意に長かった。VP副詞については、SAOVとSOVA語順の間で有意な差が見られなかったが、ASOV語順がASOV語順とSAOV語順より反応時間が有意に長かった。

実験の結果からみると、付加詞の中で、基本生起位置が1つしかないMP副詞のような付加詞もあれば、基本生起位置が2つあるIP副詞とVP副詞のような付加詞もある。基本

生起位置以外のところにあらわれると、空所補充解析で負荷が大きくなる。基本生起位置にあれば、空所補充解析で文を解析する必要がなく、処理負荷が大きくなることがない。そこで、理論的には、立派な周辺的な主語であるカラ格主語とデ格主語が項の側面（主語）と後置詞（付加詞）の側面を備えており、このような「競合関係」の中で、日本語母語話者がどのようにカラ格主語文とデ格主語文を理解するのか、次章から反応時間に基づく文処理実験を用いて検討する。

3.3. 日本語母語話者によるカラ格主語文の処理

3.3.1. 2つの仮説

3.3.1.1. 主語仮説

第1章では、提供・伝達行為を表す動詞およびカラ格名詞句は動作主であると同時に、動詞を表す動作の起点であれば、カラ格名詞句が文の主語として認められ、統語的には、ガ格主語と同様の現象を誘発することができるというカラ格主語の特徴を検討した。また、前章では、生成日本学的にもカラ格名詞句を主語として扱っており、vPの指定部に生成されるという構造についても検討した。他方、そもそも「起点」と「通過点」の意味を持つカラを主語として使うと、ガよりも柔らかな言い回しになり、ぼかしたような表現となるという指摘もみられる。つまり、カラ格主語を使えば、ガ格主語がもつ排他的な解釈を避けられるという語用論上の利点がある（張, 1995; 伊藤, 2001）。そこで、これらの研究に基づいて、本研究では主語仮説を立てた。

主語仮説にしたがえば、ガ格主語文と同様に、異なる語順のカラ格主語文の間でもスクランブル効果がみられると想定する。前述のように、ガ格主語文の場合、日本語母語話者は基底構造にしたがって、文を理解したり、処理したりすると想定される。そのため、日本語の正順語順の文に比べて、かき混ぜ語順のほうの処理時間が有意に長くなる。「りんごを広志が食べた」というかきませ語順の文に対して、「りんごを」の後ろに主語の

「広志が」がくるのをみる時点で、文頭の「りんごを」が埋語であることに気づく。そこで、「広志が」の後ろに空所があるのを想定し、埋語・空所の依存関係を確立することで、すなわち、空所補充解析で文を理解しているようである。

カラ格主語も同じメカニズムで処理されると思われる。「証明書を校長から渡した」というかき混ぜ語順のカラ格主語文を処理する際に、「証明書を」を見た時点では、空主語文として想定したが、目的語の後ろ「校長から」をみると、文頭の「証明書を」が埋語であることに気づく。そこで、「校長から」の後ろに空所があるのを想定し、埋語・空所の依存関係を確立する。結果として、ガ格主語文と同様に、「校長から証明書を渡した」という正順語順にしたがって、空所補充解析でカラ格主語文を理解することとなる。

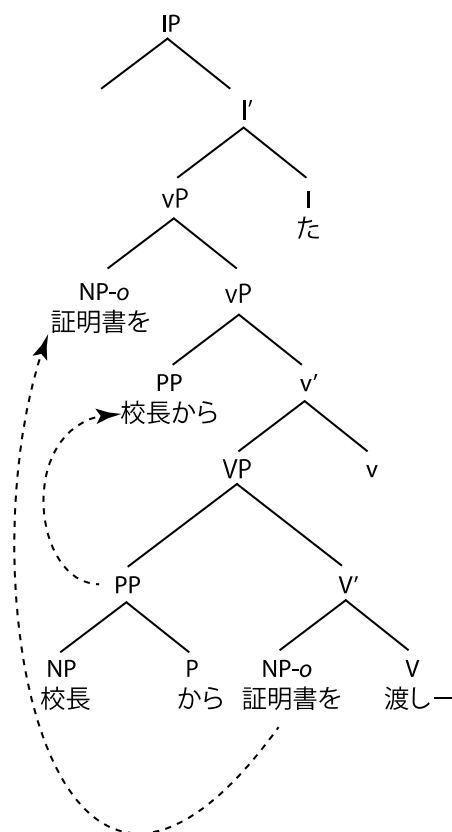


図9 かき混ぜ語順のカラ格主語文の構造

構造的に見れても、図9のように、かき混ぜ語順のカラ格主語文とかき混ぜ語順のガ格主語文に近似している。カラ格主語文の場合、目的語がVPの補部からIPの付加位置に移動されるのではなく、vPの付加位置に移動される。これは、カラ格主語の構造的位置に起因する。図7からわかるように、かき混ぜ語順のガ格主語に比べて、かき混ぜ語順のカラ格主語文における目的語の移動は実際、vP内での移動であり、IP内への移動がない。そのため、かき混ぜ語順の場合、カラ格主語文がガ格主語文より単純で、スクランブル効果がガ格主語文より小さい可能性がある。

3.3.1.2. 付加詞仮説

動作主以外に、「競合関係」にあるもう1つの深層格は起点である。前述のように、起点として解釈される場合、動詞の付加情報としてVP内に生成される。この点を考慮し、カラ格名詞句を付加詞としても考えられる。そこで、主語仮説に対して、付加詞仮説を立てた。

付加詞仮説にしたがえば、語順が異なっても、スクランブル効果が見られない。小泉・玉岡(2016)におけるVP副詞の構造のように、動詞の項として解釈されなければ、*Aj-karaOV* (*Aj-kara* はカラ格付加詞) および *OAj-karaV* 語順のカラ格付加詞を含める文の構造を簡単に示すと、(8a)と(8b)のようである。VP副詞と同様に、VP内にあるために、日本語母語話者がカラ格名詞句をVP付加詞として扱うのであれば、*Aj-karaOV* も *OAj-karaV* も正順語順となる。そのため、空所補充解析で文を理解する必要がなくなり、異なる語順の間でスクランブル効果が見られないこととなる。

(8a) [_{IP} [_{I'} [_{VP} *kootyoo-kara* [_{syoomeesyo-o} *watasi-*]] *ta*]].

(8b) [_{IP} [_{I'} [_{VP} [_{v'} *syoomeesyo-o* [_{kootyoo-kara} *watasi-*]]] *ta*]].

3.3.2. 二項動詞能動文の実験

3.3.2.1. 参加者

28 名の名古屋大学の日本語を母語とする学部生および大学院生（15 名の女性と 13 名の男性）が実験に参加した。その中に、年少者は 17 歳 11 ヶ月で、最年長者は 27 歳 11 ヶ月であった。平均年齢は 19 歳 3 ヶ月で、標準偏差は 23 ヶ月であった。

3.3.2.2. 刺激

先行研究におけるカラ格主語文の条件に沿って、カラ格主語文を作成した。ガ格名詞句とカラ格名詞句を直接に比較するために、ガ格主語文とカラ格主語文の 2 種類の二項動詞および三項動詞の能動文を刺激文として使用した（ただし、三項動詞の場合に、二格名詞句を省略した）。たとえば、「校長が証明書を渡した」のような正順語順のガ格主語文を 32 文作成し、「証明書を校長が渡した」のようなかき混ぜ語順のガ格主語文を 32 文作成した。次に、ガ格主語をカラ格主語に置き換えて、「校長から証明書を渡した」のような正順語順のカラ格主語文を 32 文作成した。さらに「証明書を校長から渡した」のようなかき混ぜ語順のカラ格主語文を 32 文作成した。これで、ガ格とカラ格の主語と正順とかき混ぜ語順という 2×2 の 4 条件の研究デザインとした。各条件が 32 文であるため、全体で 128 文である。

中国語を母語とする日本語学習者も同じ実験に参加し、またこの実験では、カラ格名詞句の判断のみを調査対象とするため、語彙の難易度を統制した。基本的に旧日本語能力試験 2 級レベルの語彙を使用した。しかし、「入試係」「成績証明書」のように 2 つの名詞によって構成される複合名詞も文の主語と目的語として使用した。「入試」は級外の名詞であるため、複合名詞全体として、2 級レベルを超えている。また、「係長」「店長」

「支援」「システム」という級外の名詞、「募金」という 1 級レベルの名詞を使用した。動詞については、「授与する」が級外であり、「要請する」「配布する」「公開する」「提示する」「仕掛ける」が 1 級レベルの動詞である。2 級以上の語彙が「システム」以外にはすべて漢語であるため、N1 に合格した中国語を母語とする日本語学習者であれば、漢字と文脈を利用して語彙の意味が分かると予想される。また、あくまでガとカラを入れ換えること、語順を変えるだけであり、刺激文の語彙はすべて同じである。そのため、語彙の難易度の違いは、すべての条件で一様に影響すると考えられる。したがって、本研究のガとカラの格および正順とかき混ぜの語順の条件は直接比較ができると想定されるので、分析結果には語彙の影響はないと想定される。

以上の 128 文の正しいガ格主語文とカラ格主語文以外に、「お金を虫が払った」のような正しくない刺激文を 32 文と「毎日コーヒーを飲む」のようなダミー文を 40 文作成した。正しい刺激文については、同じ文が 1 つの実験中に繰り返されると、2 回目からは文理解が促進され、処理時間が短くなることが知られている。そこで、カウンターバランスを取り、被験者を 4 つのグループに分け、それぞれを異なる正しい文からなる 4 つのリストに割り当てた。それぞれのリストには、正しくない刺激文とダミー文を入れて、正しい文と誤った文の数を同数にした。正しい刺激文、正しくない刺激文およびダミー文を合わせた 1 つの各リストは、104 文からなる。被験者ごとに 4 つのリストがランダムに選ばれるように設定した。

3.3.2.3. 実験の手続き

被験者 1 人ずつ、静かな条件の部屋で実験を行った。手続きは、図 10 で示したように、まずスクリーンの中央に凝視点「++++++」を提示し、600 ミリ秒後に刺激文を同じ位置にランダムに 1 文ずつ提示した。

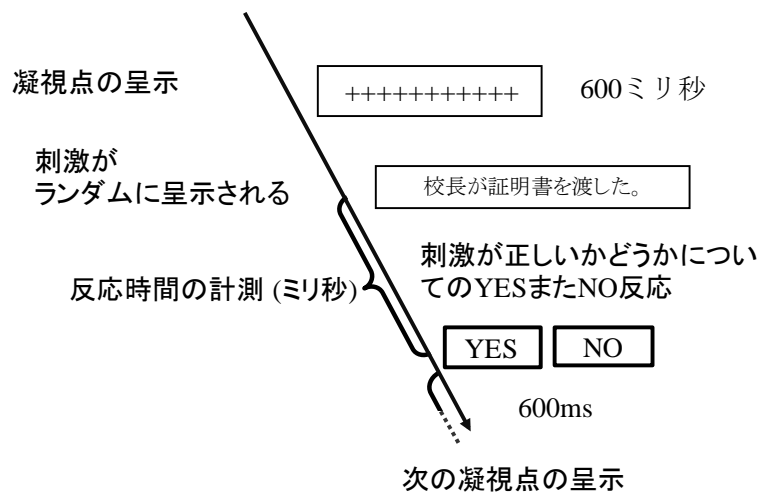


図 10 正誤判断課題の流れ

正誤判断という課題であるため、被験者にはできるだけ速く、正確に、提示された文が日本語の文として正しいかどうかを **YES**（正しい文）または **NO**（正しくない文）のボタンを押すことで判断するよう求めた。刺激文が提示されてからボタンを押すまでの時間を反応時間として測定した。本試行に入る前に、10 文からなる練習試行を行った。

3.3.2.4. 分析と結果

反応時間の分析は、各被験者の条件ごとの平均から ± 2.5 の標準偏差の値から外れた値は分析から除外し、正しく判断された正しいガ格主語文とカラ格主語文の反応時間を使用した。また、正しくない刺激文とダミー文はフィラー文であるため、分析の対象ではない。分析は R Studio のバージョン 0.98.1091 を使用し、刺激文と被験者をランダム効果とし、線形混合効果モデリング（linear mixed-effects modeling、以下 LME とのみ記す）の手法で、主語の標識がガまたはカラおよび語順が正順語順またはかき混ぜ語順の 2 つの変数を固定効果として検討した。

LME の統計解析は、特に 2008 年以降 (Baayen, Davidson & Bates 2008)、広く国際的に使用されるようになった解析法である。この分析を使うと、被験者の個人差と刺激文の違い (ランダム効果) を考慮して、研究の対象となっている変数 (固定効果) を分析することができる。本研究で言えば、日本語母語話者の個人差および実験に使用した多様な文の違いが影響すると予想されるが、それらの違いをランダム効果として解析に含んだ上で、ガ格とカラ格の主語の違いおよび正順語順とかき混ぜ語順の違いである固定効果を検討する解析法である。なお、LME では、自由度は従来の統計のような基準にはならない。また、線形の予測をたてる際に、ランダム効果の切片と傾きを考慮して、最適のモデルを作らなくてはならないが、各モデルの赤池情報量 (AIC) を分散分析で比較して、最適モデルを決める。反応時間と正答率の平均および標準偏差は表 1 に示した。

表 1 日本語母語話者による正順語順とかき混ぜ語順のガ格および
カラ格主語文の正誤判断に要した反応時間と正答率

主語標識	語順	反応時間 (ms)		正答率 (%)	
		平均	標準偏差	平均	標準偏差
ガ	SOV	1,353	385	98.2	13.3
	OS V	1,495	424	93.1	25.3
カラ	SOV	1,542	476	88.0	32.5
	OS V	1,557	441	89.3	31.0

注: N (被験者)=28.

3.3.2.5. 反応時間

反応時間の分析には lme4 パッケージの中の lmer のコマンドを利用した。LME での分析にあたり、ランダム変数の影響を検討するために 7 つのモデルを設定した上で、赤池情報

量について分散分析で比較した結果、被験者のランダム変数は切片、文刺激については傾きを設定した場合が最適なモデルであったので、このモデルで分析した(AIC=11,636.0)。

反応時間を分析した結果は表 2 に示した通りである。なお、R の LME 分析 (lmer) では、 t 分布により有意確率を計算する。まず、主語標識のガ格・カラ格について、有意であった [$t(743)=4.99, p<.001$, LME では t 値の括弧内は自由度ではなく観測回数を記す。以下、同様]。また、正順語順・かき混ぜ語順についても有意であった [$t(743)=3.96, p<.001$]。主語標識と語順という二つの主効果が有意であった。つまり、ガ格主語文がカラ格主語文より速く処理されるとともに、正順語順がかき混ぜ語順より速く処理されることとなる。これは、コーパス検索の結果と一致している。また、表 1 の反応時間の平均からわかるように、日本語母語話者は「ガ格主語の正順語順<ガ格主語のかき混ぜ語順<カラ格主語の正順語順<カラ格主語のかき混ぜ語順」の順で、処理時間が速かった。さらに、両変数の交互作用も有意であった [$t(743)=-3.16, p<.01$]。

表 2 日本語母語話者によるガ格・カラ格および正順・かき混ぜ語順の文処理に

要した反応時間についての線形混合効果モデル (LME) による分析結果

変数	推定値	標準誤差	t 値	自由度	p 値 ($> t $)
(切片)	864	124	6.99	482	0.000 ***
ガ & カラ	357	72	4.99	743	0.000 ***
正順 & かき混ぜ語順	279	70	3.96	743	0.000 ***
ガ & カラ * 正順 & かき混ぜ語順	-144	45	-3.16	743	0.002 **

注: N (被験者)=28. ** $p<.01$. *** $p<.001$.

他方、図 11 に示しているように、かき混ぜ語順のガ格主語文 (平均は 1,495ms) に比べて、正順語順のガ格主語文の反応時間 (平均は 1,353ms) は有意に短かった。一方、かき混ぜ語順 (平均 1,542ms) と正順語順のカラ格主語文の反応時間 (平均は 1,557ms) の間でス

クランブル効果が見られなかった。この結果は、主語仮説ではなく、付加詞仮説を支持する。

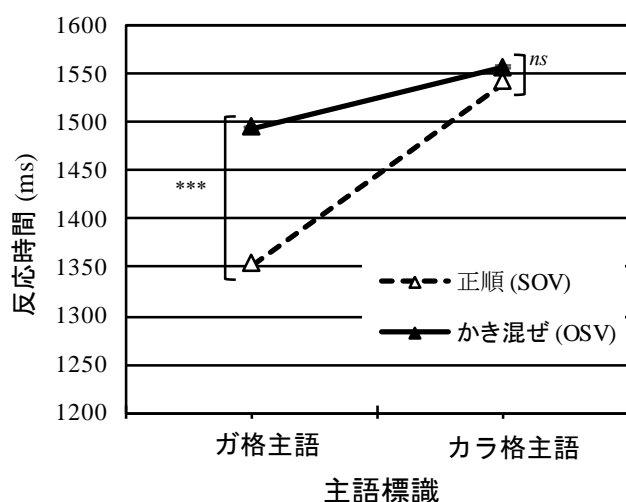


図 11 正順とかき混ぜ語順のガ格主語とカラ格主語反応時間の平均

注:*** $p < .001$. ns = 有意差なし.

3.3.2.6. 正答率

正答率の分析について、正答かどうかは0（誤答）または1（正答）のダミー変数なので、RのLME分析（glmer）の二項（binomial）で分析した。この分析では、 z 分布により有意確率が計算される。被験者と文刺激をランダム変数とし、主語標識ガ格・カラ格および正順語順・かき混ぜ語順を固定変数（独立変数）として、正答・誤答を従属変数とする分析をした。正答・誤答のランダム変数を検討するために、7つのモデルを設定した上で、赤池の情報量基準を分散分析で比較し、信頼性の最も高いモデルを選択した。その結果、文刺激のランダム変数は切片、被験者については傾きを設定したモデルが最適であった（AIC = 449.7）。結果は表3に示した通りである。

表3 日本語母語話者によるガ格とカラ格および正順とかき混ぜ語順の処理における

正答・誤答についての線形混合効果モデル (LME) による分析結果

	推定値	標準誤差	z 値	p 値 (> t)	
(切片)	9.05	2.17	4.18	0.000	***
ガ&カラ	-3.61	1.16	-3.10	0.002	**
正順&かき混ぜ語順	-2.79	1.20	-2.32	0.020	*
ガ & カラ * 正順 & かき混ぜ語順	1.55	0.66	2.34	0.019	*

注:N(被験者)=28. * $p<.05$. ** $p<.01$. *** $p<.001$.

正答率について、主語標識が有意であった $[z(867)=-3.10, p<.01]$ 。また、正順語順・かき混ぜ語順にも有意であった $[z(867)=-2.32, p<.05]$ 。交互作用も有意であった $[z(867)=2.34, p<.05]$ 。表1に示されているように、かき混ぜ語順のガ格主語文（平均は 93.1%）に比べて、正順語順のガ格主語文の正答率（平均は 98.2%）が高い。一方、かき混ぜ語順（平均は 89.3%）と正順語順のカラ格主語文の正答率（平均は 88.0%）の間で差がみられなかった。

3.3.2.7. 考察

井上（2002）と Ueda（2003）は、ガ格主語と異なり、カラ格主語が IP の指定部前繰り上げられなく、vP 内に留まると指摘している。なお動作主という深層格を持つため、「校長から証明書を渡した」のような文におけるカラ格名詞句は文の主語だと言える。この指摘に基づいて、カラ格主語という仮説を立てた。また、カラ格の後置詞的な性格を考慮した上で、カラ格名詞句が主語のように見えるにもかかわらず、実際に VP 付加詞のように処理されることも考えられ、小泉・玉岡（2016）における VP 付加詞に関する処理のメカニズムを参考にして、付加詞仮説をも立てた。

2つの仮説を検証するために、日本語母語話者を対象に、異なる主語標識と異なる語順を持つ二項動詞能動文の反応時間を計測し、比較した。その結果、ガ格主語の場合に、正

順語順がかき混ぜ語順より速く処理され、正答率も高かった。このことは、かき混ぜ語順を処理する際に、空所補充解析が誘発されることとなり、日本語母語話者はガ格名詞句を文の主語として理解されると想定できる。

しかしながら、カラ格主語文の場合、反応時間が遅くなり、正答率が落ちるものの、正順とかき混ぜ語順の間に、処理時間について差がみられなかった。この結果は、小泉・玉岡（2016）における VP 副詞と同様の結果である。つまり、VP 副詞の場合に、SAdvOV（主語・VP 副詞・目的語・動詞）も SOAdvV（主語・目的語・VP 副詞・動詞）も正順語順であるように、カラ格名詞句の場合も同様に、Aj-karaOV も OAj-karaV も正順語順であることとなる。したがって、カラ格主語が vP 内にあるのではなく、VP 内にある可能性を示した。カラ格主語の構造的位置を確認するために、IP 副詞を含めた二項動詞能動文の刺激を作って、文処理実験を行った。

3.3.3. IP 副詞を含めるカラ格主語文の実験

3.3.3.1 仮説

二項動詞能動文の文処理実験の結果、正順語順とかき混ぜ語順の間では、ガ格主語文と異なり、スクランブル効果が見られなかった。この結果は、カラ格主語が実際に VP 副詞のように、動詞の修飾語（付加情報を付け加える付加詞）として理解されるという付加詞仮説を支持した同時に、カラ格主語の生成位置が VP 内にあるという可能性を示唆する。しかし、生成日本語学的には、vP 内に留まるとしている。そこで、時を表す「明日」のような IP 副詞を利用し、カラ格主語の構造的位置を考察する。

IP 副詞を利用した小泉・玉岡（2006）の文解析実験の結果は、ASOV 語順と SAOV 語順が正順語順であるということを支持しているため、IP 副詞の生起位置は主語の前か後ろかであり、 $[_{IP} \text{ (IP 副詞) 主語 (IP 副詞) }]$ というように示すことができる。基底構造を合わ

せて考えると、ガ格の主語はIP内にあるため、(9a)と(9b)に示したように、時の副詞がガ格主語の前と後ろに生起する際に、ガ格主語も時の副詞もIPの内側にあり、ASOV語順とSAOV語順ともに正順語順になる。

(9a) [IP 明日 広報係が [VP 新製品を 発表する]] (ASOV)

(9b) [IP 広報係が 明日 [VP 新製品を 発表する]] (SAOV)

一方、カラ格主語の場合、構造的にはvP内にあると仮定すれば、(10a)と(10b)に示したように、時の副詞がカラ格主語の前に生起する際には、時の副詞がIPの内側に位置し、カラ格主語がvP内に位置することになる。時の副詞がカラ格の主語の後ろに生起する際に、時の副詞がIP内に位置するため、カラ格主語がvPの外側に移動したと考えれば、IP内に位置することになる。その結果、カラ格主語文の場合、ASOV語順は正順語順であるが、SAOV語順は移動を1つ含むかき混ぜ語順であると想定できる。

(10a) [IP 明日 [VP 広報係から [VP 新製品を発表する]]] (ASOV)

(10b) [IP 広報係から_i 明日 [VP_{ti} [VP 新製品を発表する]]] (SAOV)

そこで、ガ格主語文については、ASOV語順とSAOV語順ともに正順語順であるため、空所補充解析で文を理解する必要がなく、反応時間に違いがないと想定される。一方、カラ格主語文については、ASOV語順は正順語順であるが、SAOV語順はかき混ぜ語順であるため、空所補充解析で埋語・空所の依存関係を確立することで文を理解するために、ASOVの方がSAOVよりも迅速に処理されると想定される。これは、実験の仮説とする。カラ格主語文のSAOV語順の反応時間がASOV語順の反応時間より長いという結果(スク

ランブル効果)が得られれば、カラ格主語の基本位置はガ格の主語より深いvP内にあることが証明できる。

3.3.3.2. 被験者

42名（女性17名、男性25名）の日本語を母語とする名古屋大学の学部生と大学院生が実験に参加した。40名の被験者（2名は生年月日未記入だったので計算には含んでいない）の内、最年少者は18歳3カ月、最年長者は33歳4カ月であった。平均年齢は20歳7カ月で、標準偏差は3年7カ月であった。

3.3.3.3. 刺激

まず、「10時に校長先生が表彰状を渡しました」のようなガ格主語文を32種類作成した。それらのカラ格主語に置き換え、「10時に校長先生から表彰状を渡しました」のようなカラ格主語文を32文作成した。次に、ASOV語順をもとにして、ガ格主語とカラ格主語のSAOV語順の文を32文ずつ作成した。また、正しい否定反応のために、「歌手が普段チキンを公演しました」のような誤ったSAOV語順の文と「今度山田さんが時間割を割ります」のような誤ったASOV語順の文を32文作成した。さらに、「朝の電車で通勤します」のようなダミー文を40文作成した。刺激文は、カウンターバランスを取り、ガ格主語文のASOV語順8文とSAOV語順8文、カラ格主語文のASOV語順8文とSAOV語順8文で、32文の正しい肯定反応文と同数の32文の正しい否定反応文、さらにダミー40文で、合計104文が1つのリストとなる。4つのリストの刺激文を42名の被験者にできるだけ等分になるように割り当てた。

3.3.3.4. 実験の手続き

実験は被験者1人ずつ行った。まず、スクリーンの中央に「*****」を提示し、600ミリ秒後刺激文が同じ位置に1文ずつランダムに提示した。被験者には、でき

るだけ速く、正確に、提示された文が日本語として正しいかどうかを、レスポンスボックスの YES（正しい文）または NO（誤った文）のボタンを押すことで判断するよう求めた。刺激文が提示されてからボタンを押すまでの時間を反応時間として測定した。本試行に入る前に、10 文からなる練習試行を行った。

3.3.3.5. 結果と分析

肯定反応の ASOV 語順と SAOV 語順のガ格主語文とカラ格主語文で、正しく判断された文のみを反応時間を分析する際に使用した。正しい否定反応とダミー文はフィラー文であるため、分析の対象ではない。反応時間は、各被験者の条件ごとの平均から ± 2.5 の標準偏差のよりも外れた値を分析データから外した。分析には、IBM の SPSS 20 で文刺激と被験者をランダム効果とする LME を使って、ガ格主語・カラ格主語と ASOV 語順・SAOV 語順の 2 つの変数の効果を検討した。条件ごとの平均、標準誤差は表 4 に示した通りである。また、図 12 に 4 条件の平均を棒グラフで描き、有意な主効果と時の副詞の位置による違いの結果（有意差無し）も記載した。

表 4 日本語母語話者によるガ格・カラ格主語文の処理における
反応時間と正答率の平均

主格の標識	時の副詞の 文中での位置	反応時間 (ms)		正答率 (%)	
		平均値	標準誤差	平均値	標準誤差
ガ	Adv + NP- <i>ga</i>	1,951	130	93.45%	1.95%
	NP- <i>ga</i> + Adv	2,070	130	93.75%	1.95%
カラ	Adv + NP- <i>kara</i>	2,266	132	73.81%	1.95%
	NP- <i>kara</i> + Adv	2,306	132	73.51%	1.95%

注: N (被験者数)=42.

反応時間についての LME の分析結果、主語の句のガとカラの格に有意な主効果がみられた [$F(1, 666)=33.36, p<.001$]

。しかし、時の副詞の文中での位置の違いについては有意な主

効果が見られなかった[$F(1, 1027)=3.05, n.s.$]。両変数の相互作用も有意ではなかった[$F(1, 528)=0.65, n.s.$]。ガ格主語は、vPの外に位置すると想定されるので、(9a)と(9b)の例文に示したように、時の副詞の位置に関係なく正順語順となる。したがって、文中の時の副詞の位置によって反応時間に違いがないことが予想された。しかし、主語がカラ格で示された文でも時の副詞の位置で違いが見られなかった。これは、(10a)の正順語順に対して、(10b)がかき混ぜであるという仮説に反した結果である。そのため、ガ格と同様に、カラ格もvPの外に出ている可能性を示唆している。

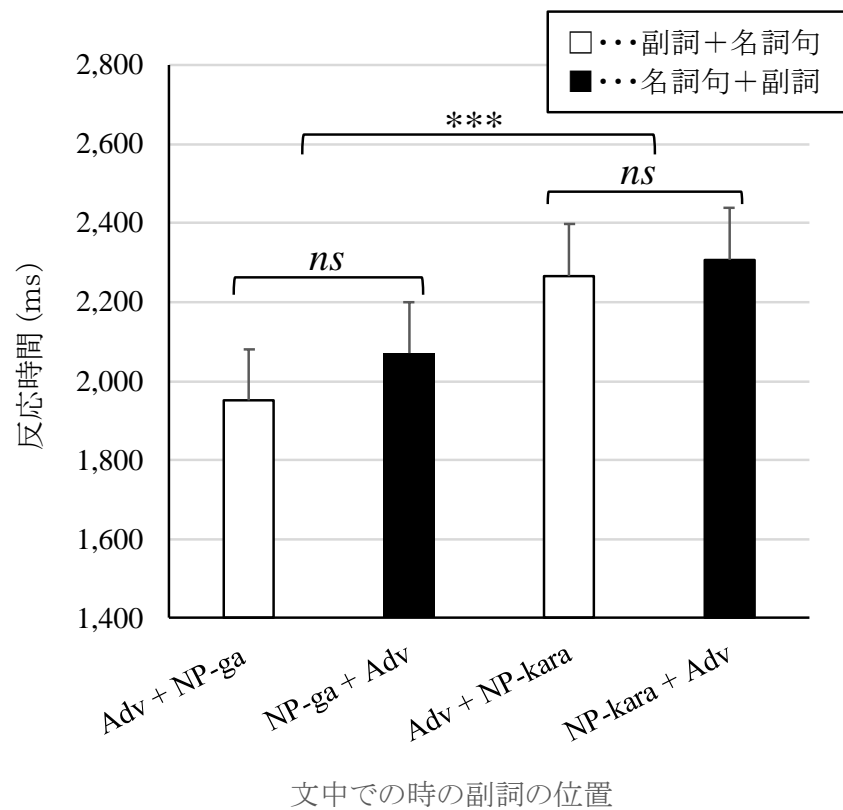


図 12 IPを含めたガ格とカラ格主語文の文処理における反応時間と正答率の平均

注: バーは標準誤差. $N(\text{被験者})=42$. *** $p<.001$. $n.s.$ (not significant).

正答率についても LME で分析した。主語標識のガ格・カラ格には有意な主効果がみられた [$F(1, 1340)=104.92, p<.001$] が、時の副詞の文中での位置の違いについては有意な主効果が見られなかった [$F(1, 1340)=0.00, n.s.$]。両変数の相互作用も有意ではなかった [$F(1, 1340)=0.02, n.s.$]。反応時間の結果と同様に、カラ格主語文の場合、文中の時の副詞の位置によって、違いが見られなかった。ガ格主語と同様に、カラ格主語が vP の外に位置する可能性が正答率からも支持された。

3.3.3.6. 考察

IP 副詞を含めたガ格主語文とカラ格主語文を本節で検討した。現代日本語では、ガ格主語は、 vP の外に移動したという考えが広く受け入れられている（たとえば、Kitagawa, 1986; Kuroda, 1988; 長谷川, 1999 など）。一方、カラ格主語のような後置詞主語は、基本生起位置に留まるという主張（Ueda, 2003）もある。そこで、ガ格主語とカラ格主語の前後に時の副詞を入れて、2（ガ格とカラ格）×2（異なる時の副詞の位置）で文処理実験を行った。分析の結果、カラ格で主語文の方がガ格主語文よりの処理時間が長かったが、時の副詞の位置では処理時間に差がなかった。また交互作用も有意ではなかった。したがって、ガ格主語と同様に、カラ格主語も IP 内に位置する可能性が高いことを示唆している。構造的に見れば、(11a) と (11b) のように、カラ格主語もガ格主語と同様に、IP の指定部まで上昇する可能性があると考えられる。

(11a) [$_{IP}$ 明日 広報係から [$_{vP}$ 新製品を発表する]] (ASOV)

(11b) [$_{IP}$ 広報係から 明日 [$_{vP}$ 新製品を発表する]] (SAOV)

3.3.3.7. 総合考察

本節では、日本語母語話者を対象に、二項動詞能動文のカラ格主語文と IP 副詞を入れた二項動詞能動文の文処理実験を行った。その結果、二項動詞能動文の場合に、カラ格主語の結果がガ格主語文と異なり、正順とかき混ぜ語順の間では、スクランブル効果が見られなかった。これは、小泉・玉岡（2006）における VP 副詞と同様の結果である。このことは、カラ格主語が VP の付加位置に生成され、動詞の付加詞として理解される可能性が高いことを示唆する。

そこで、カラ格主語の構造的位置を確認するために、IP 副詞を含めた二項動詞能動文の文処理実験を行った。時の副詞が IP 内にあるため、SAOV 語順の場合に、vP 内にあるカラ格主語が IP 内に移動するため、スクランブル効果がみられるという仮説に反して、ガ格主語文もカラ格主語文も ASOV 語順と SAOV 語順の間では、スクランブル効果が見られなかった。このことは、カラ格主語が IP 内に位置する可能性が高いことを示唆する。

この2つの実験の結果を踏まえて考えると、カラ格主語が vP の指定部というより、VP と IP の付加位置に生成されるほうがより妥当であろう。言い換えれば、カラ格名詞句を主語ではなく、付加詞として扱うと、2つの実験の結果を一貫して説明できる。カラ格名詞句が付加詞であると考えれば、より多様な位置に生成することが可能である。二項動詞能動文の場合、VP の付加位置に生成され、IP 副詞を含めた二項動詞能動文の場合、IP の付加位置に生成される。どの場合でも付加情報として理解され、スクランブル効果が見られない。

このように考えると、先行研究(張, 1995; 角田, 1991; 伊藤, 2001; 井上, 2002)で示されたように、理論上、問題なくカラ格名詞句は周辺的な主語ではあるが、心理言語学の文処理実験の結果は、付加詞仮説を支持することになり、カラ格の主語性が低いと考えられる。日本語母語話者はカラ格名詞句を主語ではなく、付加詞として理解しているという

結論である。結果的に、「競合関係」にある2つの深層格は、後置詞自身の「起点」としての解釈が動詞の項の解釈「動作主」より強く文の理解に影響するという事となる。興味深いことに、この結果は、同じ非ガ格主語文であるニ格主語文には見られなかった。ニ格主語文における主語がガ格で示されないにもかかわらず、正順とかき混ぜ語順の間ではスクランブル効果が見られ、ガ格主語文に似たメカニズムでニ格主語文を理解しているようである。ただし、ガ格と同様に、主語としてのニ格は格助詞であるため、この点においては、カラ格と異なる。このことから日本語母語話者は文を理解する際に、異なる性格（格助詞と後置詞）を持つ表層格の影響を受けていることがわかるであろう。

3.4. 中国語を母語とする日本語学習者によるカラ格主語文の処理

日本語母語話者を対象とした文処理実験の結果を検討した結果、日本語母語話者は、付加詞としてカラ格主語を理解したと結論づけた。本節では中国語を母語とする日本語学習者を対象に文処理実験を行い、結果を検討する。

第2章での「主語＋動詞」というパターンで検索した結果から見れば、主語（動作主）としてのカラの頻度が低く、カラ格が主語として使用されることはほとんどないことがわかった。また、カラ格の用法について、日本語教育では主に「理由」「起点」「順序」「根拠」「通過点」として教えられており、中級や上級に入っても「構成」などの用法を教えられている。「動作を発する主体」という用法に言及することは少ない。また、カラ格は用法によって、さまざまな表現と共に使われるため、中国語を母語とする日本語学習者にとって、カラ格主語文の理解はかなり難しいと思われる。そこで、日本語能力試験N1に合格した中国語を母語とする日本語学習者を対象に、ガ格主語文とカラ格主語文についての文処理実験を行った。

3.4.1. 中国語を母語とする日本語学習者の文処理のメカニズム

3.4.1.1. ガ格主語文の理解

日本語母語話者の場合、正順語順が脳内に規定構造として記憶されていると想定される。そして、基底構造にしたがって文を理解しており、かき混ぜ語順の場合、空所補充解析で処理すると考えられる。その証拠として、能動文、受動文、可能文、使役文のすべてでかき混ぜ語順のほうが正順語順よりも処理時間が長くなることが、文処理実験で確かめられている（Tamaoka, et al., 2005）。この読みのプロセスについては、眼球運動の実験（Tamaoka, et al., 2014）によって、正順語順の文と比べて、かき混ぜ語順の文では動詞の前のガ格の名詞句で眼球の停留時間が長くなり、処理負荷が高くなることも確認されている。また、かき混ぜ語順の文では、動詞を見てからの読み戻り頻度も高くなり、また読み戻ってからの眼球停留時間も長くなることが同実験でわかっている。

中国語を母語とする日本語学習者の日本語文の処理メカニズムについて、玉岡（2005）は、中国人日本語学習者を対象に、文の基底構造の構築に関する研究を行っている。簡単な「花子がケーキを食べた」というガ格主語二項動詞能動文の判断に要した時間の平均は3,566 ミリ秒（ms）で、正答率の平均は87.5%であったのに比べて、それらの文のかき混ぜ語順である「ケーキを花子が食べた」の文は処理時間が有意に長く、正答率が有意に低かった（処理時間の平均 $M=3,966$ ms, 正答率の平均 $M=78.0\%$ ）。これは、中国語を母語とする日本語学習者が日本語母語話者と同様に、ガ格主語能動文の基底構造を構築しており、かき混ぜの場合は、目的語が文頭に移動していることを知覚して、空所補充解析で文を理解しているからであると考えられる。

3.4.1.2. ニ格格主語文の理解

ガ格二項動詞能動文の場合、日本語学習者も日本語母語話者と同様に基底構造を構築して、かき混ぜ語順を処理すると想定される。ところが、ニ格を主語とする文処理実験（玉岡 2005）では、「花子にピアノが弾ける（だろうか）」というニ格二項動詞能動文（処理時間の平均 $M=3,405$ ms, 正答率の平均 $M=69.1\%$ ）とかき混ぜ語順の「ピアノが花子に弾ける（だろうか）」の文（処理時間の平均 $M=3,774$ ms, 正答率の平均 $M=56.3\%$ ）の間で、処理時間にも正答率にも有意な違いが観察されなかった。仮に表層格で文法機能を判断するというストラテジーを使えば、ニ格主語文に対して、目的語のガ格名詞句を主語としてみなし、主語のニ格を間接目的語としてみなすことによって、文の理解が成り立たない可能性が高い。正答率を低めた1つの原因は、中国語を母語とする日本語学習者は文法機能が表層格と一对一の関係だと思うのであろう。また、処理時間に違いがみられないので、中国語を母語とする日本語学習者は、日本語母語話者と異なり、ニ格主語文の基底構造を構築していないと考えられる。

3.4.1.3. カラ格主語文の理解に対する予測

カラ格主語文の場合、学習者がニ格主語文を理解する際と同様の問題に遭遇する可能性がある。「私から罪を謝る」のようなカラ格二項動詞能動文において、カラ格名詞句自体は「起点」を表すと同時に、動作主という深層格を表している。動詞の項として理解されれば、文の主語となる。しかし、日本語学習者は、ガ格が文の主語の後ろに付加して使用するということを初級から勉強してきているため、ニ格主語と同様にカラ格主語を文の主語としてみなさないことがありうる。また、カラ格主語文をどのくらい見聞きし、あるいは自分がカラ格主語文を使うかどうかという、いわゆる頻度効果にも個人差があると思われる。そのため、日本語学習者の場合、カラ格名詞句が文の主語であることを意識でき

るかどうか、つまり、「～から～を」というパターンにおけるカラ格名詞句の文法機能を正しく判断できるかどうか、カラ格主語文を正しく理解するのに重要である。

3.4.2. 実験

3.4.2.1. 仮説

カラ格主語文に対する日本語学習者の処理メカニズムについて2つの仮説を立てた。

第1に、中国語を母語とする日本語学習者は、カラ格主語文を正しく理解できないのではないかという仮説である。日本語学習者は、初級から主語を表す標識がガ格であることを教えられている。カラ格主語文を理解する際に、二格主語文と同様に（玉岡，2005）、表層格の影響を受けることによって文法関係が食い違い、カラ格名詞句を文の主語として見なさない可能性があり、結果として、ガ格主語文よりカラ格主語文のほうが処理速度が遅く、正答率が低くなると考えられる。

第2に、中国語を母語とする日本語学習者は、カラ格主語文の基底構造を想定していないので、正順語順の「～から～を」もかき混ぜ語順の「～を～から」も同じように処理するのではないかという仮説である。日本語母語話者は、正順語順の基底構造に基づいて、かき混ぜ語順の文を処理するので、かき混ぜ条件では処理時間が遅くなるというスクランブル効果がみられる（Tamaoka, et al., 2005 など）。カラ格主語の場合、日本語母語話者は、カラ格名詞句を付加詞として理解しているようであるから、「～から～を」と「～を～から」の間では、反応時間の差が見られなかった。上級日本語学習者も日本語母語話者に近い処理の仕方を呈することも考えられなくはない。

3.4.2.2. 被験者の選択

日本語能力試験N1に合格した30名の中国語を母語とする日本語学習者が実験に参加した。30人の内訳は、台湾の中華大学および東呉大学で日本語を学ぶ学習者が27名で、名古屋大学で日本語を学ぶ学習者が3名であった。30人の学習者（1名が生年月日未記入だったので計算には含んでいない）の内、最年少者は18歳1ヶ月で、最年長者は37歳6ヶ月であった。平均年齢は22歳8ヶ月で、標準偏差は4歳であった。

3.4.2.3. 刺激文

日本語母語話者の二項動詞能動文と同様の刺激を使った。ガ格主語とカラ格主語の2種類の主語標識および正順・かき混ぜ語順の2種類の語順の正しい刺激を128文作成し、2×2の研究デザインとした。128文以外に、「お金を虫が払った」のような正しくない刺激文を32文と「毎日コーヒーを飲む」のようなダミー文を40文作成した。正しい刺激文については、同じ文が1つの実験中に繰り返されると、2回目からは文理解が促進され、処理時間が短くなることが知られている。そこで、カウンターバランスを取り、被験者を4つのグループに分け、それぞれを異なる正しい文からなる4つのリストに割り当てた。それぞれのリストには、正しくない刺激文とダミー文を入れて、正しい文と誤った文の数を同数にした。正しい刺激文、正しくない刺激文およびダミー文を合わせた1つの各リストは、104文からなる。被験者ごとに4つのリストがランダムに選ばれるように設定した。

3.4.2.4. 実験の手続き

日本語母語話者と同様の手続きで行った。参加者1人ずつ、静かな条件の部屋で実験を行った。まずスクリーンの中央に「++++++++++」を提示し、600ミリ秒後に刺激文を同じ位置に1文ずつ提示した。被験者には、できるだけ速く、正確に、提示さ

れた文が日本語の文として正しいかどうかを YES（正しい文）または NO（正しくない文）のボタンを押すことで判断するよう求めた。刺激文が提示されてからボタンを押すまでの時間を反応時間として測定した。本試行に入る前に、10 文からなる練習試行を行った。

3.4.2.5. 結果と分析

正しく判断された正しいガ格主語文とカラ格主語文の反応時間を分析に使用した。正しくない刺激文とダミー文はフィラー文であるため、分析の対象ではない。また、反応時間については、各被験者の条件ごとの平均から ± 2.5 の標準偏差の値から外れた値は分析から除外した。分析は R Studio のバージョン 0.98.1091 を使用し、刺激文と被験者をランダム効果とし、LME を用いて、主語標識がガ格・カラ格および語順が正順・かき混ぜ語順の 2 つの変数を固定効果として検討した。反応時間の分析には lme4 パッケージの中の lmer のコマンドを利用し、正答率の分析は glmer のコマンドを利用した。学習者の個人差および実験に使用した多様な文の違いが影響するを予想し、それらの違いをランダム効果として解析に含んだ上で、ガ格とカラ格の主語の違いおよび正順語順とかき混ぜ語順の違いである固定効果を検討する。

表 5 中国語を母語とする日本語学習者による正順語順とかき混ぜ語順のガ格およびカラ格主語文の正誤判断に要した反応時間と正答率

主語の標識	語順	反応時間(ms)		正答率(%)	
		平均	標準偏差	平均	標準偏差
ガ	正順	2,723	1,839	92.2	26.8
	かき混ぜ	3,206	1,627	83.6	37.0
カラ	正順	2,868	1,926	82.7	37.8
	かき混ぜ	3,039	1,826	80.1	39.9

注: N (被験者)=30.

日本語学習者による条件ごとの平均、標準偏差は表5に示した通りである。LMEでの分析にあたり、ランダム変数の影響を検討するために7つのモデルを設定した上で、赤池情報量について分散分析で比較した結果、被験者のランダム変数は切片、文刺激については傾きを設定した場合が最適なモデルであったので、このモデルで分析した(AIC=13778.5)。

表6 中国語を母語とする日本語学習者によるガ格・カラ格および正順・かき混ぜ語順の文処理に要した反応時間についての線形混合効果モデル(LME)による分析結果

変数	推定値	標準誤差	t値	自由度	p値(> t)
(切片)	1492	552	2.70	568	0.007 **
ガ&カラ	749	329	2.28	732	0.023 *
正順&かきまぜ語順	976	331	2.95	753	0.003 **
ガ&カラ*正順&かきまぜ語順	-452	210	-2.15	735	0.032 *

注: N(被験者)=30. * $p<.05$. ** $p<.01$.

反応時間を分析した結果は表6に示した通りである。なお、RのLME分析(lmer)では、 t 分布により有意確率を計算する。まず、主語標識のガ格・カラ格について、有意であった[$t(785)=2.28, p<.05$]。また、正順・かき混ぜ語順についても有意であった[$t(785)=2.95, p<.01$]。さらに、両変数の交互作用も有意であった[$t(785)=-2.15, p<.05$]。4条件を比較した結果、すべての条件で反応時間が有意に違っていた。表5の反応時間の平均からわかるように、日本語学習者は「ガ格主語の正順語順<カラ格主語の正順語順<カラ格主語のかき混ぜ語順<ガ格主語のかき混ぜ語順」の順で、処理時間が速かった。

表7 中国語を母語とする日本語学習者によるガ格・カラ格および正順・かき混ぜ語順の処理における正答・誤答についての線形混合効果モデル (LME) による分析結果

変数	推定値	標準誤差	z値	p 値(> z)
切片	5.01	1.14	4.40	0.000 ***
ガとカラ	-1.37	0.68	-2.02	0.044 *
正順とかき混ぜ語順	-1.57	0.67	-2.36	0.018 *
ガとカラ*正順&かき混ぜ語順	0.67	0.40	1.67	0.094

注: N (被験者)=30. * $p<.05$. *** $p<.001$.

正答率については、R の LME 分析 (glmer) の二項 (binomial) で分析した。この分析では、 z 分布により有意確率が計算される。被験者と文刺激をランダム変数とし、ガ格・カラ格および正順・かき混ぜ語順を固定変数 (独立変数) として、正答・誤答を従属変数とする分析をした。正答・誤答のランダム変数を検討するために、7つのモデルを設定した上で、赤池の情報量基準を分散分析を用いて比較し、信頼性の最も高いモデルを選択した (AIC=742.0)。その結果、文刺激のランダム変数は切片、被験者については傾きを設定したモデルが最適であった。結果は表7に示した通りである。

まず、ガ格・カラ格が有意であった [$z(927)=-2.02, p<.05$]。また、正順・かき混ぜ語順にも有意であった [$z(927)=-2.36, p<.05$]。ただし、両変数の交互作用は有意ではなかったが、有意傾向を示した [$z(927)=1.67, p<.01$]。中国語を母語とする日本語学習者の場合、正順語順のほうがかき混ぜ語順より正確に判断され、またガ格主語文のほうが、カラ格主語文よりも正確であった。

3.4.2.6. 総合考察

日本語教育では、ガ格が文の主語を示す助詞であることは教えるが、カラ格で示された名詞も主語となることはほとんど教えることがない。確かに、カラ格名詞句が主語を示す

ことは稀ではあるが、日本語学習者にとっては、カラ格主語文を見聞きする機会がないわけではない。そこで、中国語を母語とする日本語学習者のカラ格主語文に対する処理のメカニズムを検討するために、N1に合格した中国語を母語とする日本語学習者を対象に、ガ格主語文とカラ格主語文の正順語順とかき混ぜ語順の文処理実験を行い、処理時間と正答率を測定した。本研究では、中国語を母語とする日本語学習者によるカラ格主語文に対する処理メカニズムについて2つの仮説を立てた。

まず、仮説1は、日本語学習者は、カラ格主語文を正しく理解できないのではないかというものであった。文処理の時間をみると、ガ格主語文よりカラ格主語文のほうが、反応時間（表1を参照）が有意に長かった。やはり、カラ格主語文のほうがガ格主語文よりも処理負荷が高いようである。また、正答率をみると、カラ格主語文の平均正答率は81.4%で、ガ格主語文の正順・かき混ぜ語順の平均正答率の87.9%よりも6.5%低く、この違いは統計的に有意であった。しかし、80%を超える正答率であったので、決して正答率が低いとは言い難い。これは、「花子にピアノが弾けるだろうか」のような二格主語の可能文で、中国語を母語とする日本語学習者が非常に低い正答率を示した（玉岡，2005）のとは異なると考えられよう。カラ格が起点として解釈されるため、「刑事から調査結果を報告した。」という文であっても、起点として解釈でき、「刑事」から「報告する」という方向性を持って理解できる。そのため、カラ格主語の頻度が低く、多様な表現といっしょに使われていても、主語であると判断するのは難しくなかったのであろう。仮説1について、予想に反して中国語を母語とする日本語学習者は、ガ格主語文よりは処理時間がかかり正答率が落ちるものの、カラ格主語文がある程度正しく理解されていると言えよう。

次に、スクランブル効果に関する仮説2であるが、ガ格主語文のスクランブル効果（かき混ぜー正順＝スクランブル効果）は483 msと大きい。しかし、カラ格主語文の場合

は171 msでしかない。ガ格主語文は、正順のSOV語順が通常の基底構造の文であり、かき混ぜのOSV語順で要求される空所補充解析の処理負荷が顕著に出たのであろう。これは、かき混ぜ語順のガ格主語文が、同じカラ格主語のかき混ぜ語順の文よりも処理時間が長かったことから推測される（交互作用が有意）。一方、カラ格主語文は、スクランブル効果が小さいものの、その効果は有意であり、やはり「～から～を」という語順を基底構造として空所補充解析が行われていると考えられる。ただ、スクランブル効果が小さいので、ガ格の場合ほど顕著に空所補充解析のメカニズムが機能しているとは言えないであろう。仮説2についても予想に反して、中国語を母語とする日本語学習者は、日本語母語話者と異なり、ガ格主語文と同様にカラ格主語文でも正順語順を基底構造とする空所補充解析を行っていることが示された。

3.4.2.7. まとめ

カラ格主語文の理解のメカニズムを検討するために、中国語を母語とする日本語能力試験N1に合格した日本語能力の高い日本語学習者を対象に、ガ格主語文とカラ格主語文に関する文処理実験を行った。ガ格で主語が標示された文の理解よりは正答率が低いものの、カラで主語が標示された文であっても正答率が80%を超えており、かなり理解が進んでいることがわかった。さらに、日本語母語話者と異なり、カラ格主語文を理解する際にもスクランブル効果がみられたため、ガ格主語文と同様に中国語を母語とする日本語学習者もSOVの基底構造を構築して、空所補充解析でかき混ぜの語順を処理していると思われる。

3.5. 日本語母語話者によるデ格主語文の処理

3.5.1. 2つの仮説

3.5.1.1. 主語仮説

デ格については、グループとしてまとまったある行動を行う複数の構成員からなる組織・団体などの場合、デ格名詞句を文の主語として認められ、統語的には、ガ格主語と同様の現象を誘発することができるというデ格主語の特徴を第1章で検討した。動作主という深層格を持つデ格主語はカラ格主語と同様に、vP の指定部に生成され、カラ格主語と同様の構造を持つと考えられる。そこで、デ格主語に対しても、主語仮説を立てられる。

主語仮説にしたがえば、ガ格主語文と同様に、異なる語順のデ格主語文の間でもスクランブル効果がみられると想定する。つまり、「訪問団を外務省で招待した」というかき混ぜ語順のデ格主語文を処理する際に、「訪問団を」を見た時点では、空主語文として想定したが、目的語の後ろ「外務省で」をみると、文頭の「訪問団を」が埋語であることに気づく。そこで、「外務省で」の後ろに空所があるのを想定し、埋語・空所の依存関係を確立する。結果として、ガ格主語文と同様に、「外務省で訪問団を招待した」という正順語順にしたがって、空所補充解析でデ格主語文を理解することとなる。

3.5.1.2. 付加詞仮説

動作主以外に、カラ格と同じように、「競合関係」にあるもう1つの深層格は場所である。場所として解釈される場合、動詞の付加情報として VP 内に生成される。この点を考慮し、カラ格名詞句を付加詞としても考えられる。そこで、主語仮説に対して、付加詞仮説を立てた。

付加詞仮説にしたがえば、語順が異なっても、スクランブル効果が見られない。VP 副詞の構造のように、動詞の項として解釈されなければ、*Aj-deOV* (*Aj-de* はデ格付加詞) および *OAj-deV* 語順のデ格付加詞を含める文の構造を簡単に示すと、(12a) と (12b) のよ

うである。VP 副詞と同様に、VP 内にあるために、日本語母語話者がカラ格名詞句を VP 付加詞として扱うのであれば、*Aj-karaOV* も *OAj-karaV* も正順語順となる。そのため、空所補充解析で文を理解する必要がなくなり、異なる語順の間でスクランブル効果が見られないことになる。

(12a) [IP [I' [VP *gaimusyo-de* [*kakkokudaihyo-o syotaisi-*]] ta]].

(12b) [IP [I' [VP [V' *kakkokudaihyo-o* [*gaimusyo-kara syotaisi-*]]] ta]].

主語としての使用頻度が高くないということがコーパス検索によって明らかにした。なお、本章では、カラ格主語と同様に二つの仮説を立て、日本語母語話者によるデ格主語文の実験結果を検討する。

3.5.2. 実験

3.5.2.1. 参加者

38 名の名古屋大学の日本語を母語とする学部生および大学院生（5 名の女性と 33 名の男性）が実験に参加した。その中に、最年少者は 18 歳 2 ヶ月で、最年長者は 24 歳 10 ヶ月であった。平均年齢は 19 歳 5 ヶ月で、標準偏差は 15 ヶ月であった。

3.5.2.2. 刺激

先行研究におけるデ格主語文の条件に沿って、デ格主語文を作成した。ガ格名詞句とデ格名詞句を直接に比較するために、ガ格主語文とデ格主語文の 2 種類の二項動詞および三項動詞の能動文を刺激文として使用した（ただし、三項動詞の場合に、二格名詞句が省略された）。たとえば、「委員会が計画を実行した」のような正順語順のガ格主語文を

32 文作成し、「計画を委員会が実行した」のようなかき混ぜ語順のデ格主語文を 32 文作成した。次に、ガ格主語をデ格主語に置き換えて、「委員会で計画を実行した」のような正順語順のデ格主語文を 32 文作成した。さらに「計画を委員会で実行した」のようなかき混ぜ語順のデ格主語文を 32 文作成した。これで、ガ格とデ格の主語と正順とかき混ぜ語順という 2×2 の 4 条件の研究デザインとした。各条件が 32 文であるため、全体で 128 文である。

以上の 128 文の正しいガ格主語文とデ格主語文以外に、「お金を虫が払った」のような正しくない刺激文を 32 文と「毎日コーヒーを飲む」のようなダミー文を 40 文作成した。正しい刺激文については、同じ文が 1 つの実験中に繰り返されると、2 回目からは文理解が促進され、処理時間が短くなることが知られている。そこで、カウンターバランスを取り、被験者を 4 つのグループに分け、それぞれを異なる正しい文からなる 4 つのリストに割り当てた。それぞれのリストには、正しくない刺激文とダミー文を入れて、正しい文と誤った文の数を同数にした。正しい刺激文、正しくない刺激文およびダミー文を合わせた 1 つの各リストは、104 文からなる。被験者ごとに 4 つのリストがランダムに選ばれるように設定した。

3.5.2.3. 実験の手続き

被験者 1 人ずつ、静かな条件の部屋で実験を行った。手続きは、図 13 で示しているように、まずスクリーンの中央に目の凝視点「++++++++」を提示し、600 ミリ秒後に刺激文を同じ位置にランダムに 1 文ずつ提示した。

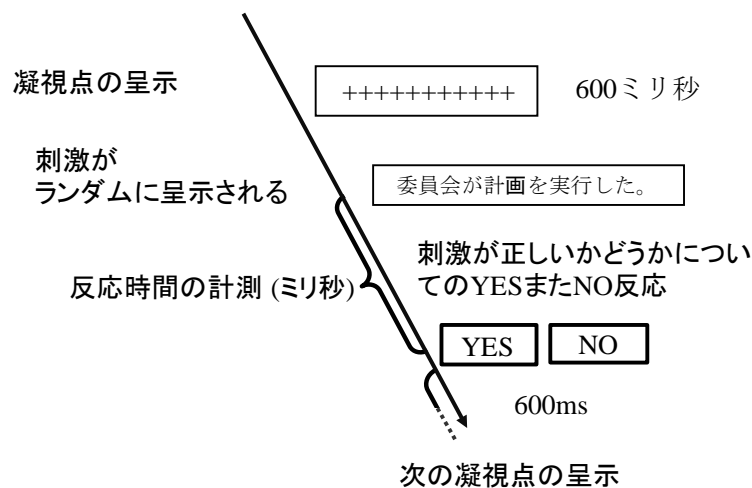


図 13 正誤判断課題の流れ

正誤判断という課題であるため、被験者にはできるだけ速く、正確に、提示された文が日本語の文として正しいかどうかを YES（正しい文）または NO（正しくない文）のボタンを押すことで判断するよう求めた。刺激文が提示されてからボタンを押すまでの時間を反応時間として測定した。本試行に入る前に、10 文からなる練習試行を行った。

3.5.2.4. 分析と結果

反応時間の分析は、各被験者の条件ごとの平均から ± 2.5 の標準偏差の値から外れた値は分析から除外し、正しく判断された正しいガ格主語文とカラ格主語文の反応時間を使用した。また、正しくない刺激文とダミー文はフィラー文であるため、分析の対象ではない。分析は R Studio のバージョン 0.99.903 を使用し、刺激文と被験者をランダム効果とし、LME の手法で、主語の標識のガ格・デ格および語順の正順・かき混ぜ語順の 2 つの変数を固定効果として検討した。反応時間と正答率の平均および標準偏差は表 8 に示されている。

表 8 日本語母語話者による正順語順とかき混ぜ語順のガ格およびデ格主語文の

正誤判断に要した反応時間と正答率

主語標識	語順	反応時間 (ms)		正答率 (%)	
		平均	標準偏差	平均	標準偏差
ガ	正順	1150	363	94.4	23.1
	かき混ぜ	1308	394	93.2	25.2
デ	正順	1175	387	96.6	18.2
	かき混ぜ	1287	392	95.9	19.8

注: N (被験者)=38.

3.5.2.5. 反応時間

反応時間の分析には lme4 パッケージの中の lmer のコマンドを利用した。LME で分析する際に、ランダム変数の影響を検討するために 7 つのモデルを設定した上で、赤池情報量について分散分析で比較した結果、被験者のランダム変数は切片、文刺激については傾きを設定した場合が最適なモデルであったので、このモデルで分析した(AIC=16,322.4)。

反応時間を分析した結果は表 9 に示した通りである。まず、主語標識のガ格・デ格について、有意ではなかった[$t(1127)=1.11, ns$]。このことは、主語標識の違いによって反応時間

表 9 日本語母語話者によるガ格・デ格および正順・かき混ぜ語順の文処理に

要した反応時間についての線形混合効果モデル (LME) による分析結果

	推定値	標準誤差	自由度	t 値	p 値(> t)	
(切片)	932	101	954	9.24	0.000	***
ガ&デ	66	59	1060	1.11	0.265	
正順&かき混ぜ語順	203	60	1060	3.40	0.001	***
ガ&デ * 正順&かき混ぜ語順	-43	38	1060	-1.14	0.255	

注: N (被験者)=38. *** $p<.001$.

に有意な差がないことを示し、日本語母語話者がデ格名詞句を文の主語として理解した可能性があると示唆している。また、正順・かき混ぜ語順については、有意であった [$t(1127)=3.40, p<.001$]。語順だけが有意であるということは、主語標識と関係なく、正順語順かかき混ぜ語順かが反応時間に影響することを意味する。表 8 の反応時間の平均からわかるように、正順語順がかき混ぜ語順より速く処理され、日本語母語話者は「ガ格主語の正順語順<デ格主語の正順語順<デ格主語のかき混ぜ語順語順<ガ格主語のかき混ぜ語順語順」の順で、処理時間が速かった。さらに、両変数の交互作用も有意ではなかった [$t(1127)=-1.14, ns$]。

なお、かき混ぜ語順のガ格主語文（平均は 1,308ms）に比べて、正順語順のガ格主語文の反応時間（平均は 1,150ms）は有意に短かった。かき混ぜ語順（平均 1,287ms）と正順語順のデ格主語文の反応時間（平均は 1,175ms）の間でもスクランブル効果がみられた。ガ格主語文よりスクランブル効果が小さいが、有意であった。

3.5.2.6. 正答率

正答率の分析について、正答かどうかは 0（誤答）または 1（正答）のダミー変数なので、R の LME 分析（glmer）の二項（binomial）で分析した。この分析では、 z 分布により有意確率が計算される。被験者と文刺激をランダム変数とし、主語標識のガ格・デ格および語順の正順・かき混ぜ語順を固定変数（独立変数）として、正答・誤答を従属変数とする分析をした。正答・誤答のランダム変数を検討するために、7つのモデルを設定した上で、赤池の情報量基準を分散分析を用いて比較し、信頼性の最も高いモデルを選択した。その結果、文刺激のランダム変数は切片、被験者については傾きを設定したモデルが最適であった（AIC=457.5）。結果は表 10 に示した通りである。

表 10 日本語母語話者によるガ格とデ格および正順とかき混ぜ語順の処理における

正答・誤答についての線形混合効果モデル (LME) による分析結果

	推定値	標準誤差	z 値	p 値(> z)
(切片)	2.87	1.36	2.11	0.035 *
ガ&デ	0.50	0.92	0.55	0.583
正順&かき混ぜ語順	-0.22	0.83	-0.27	0.789
ガ&デ * 正順&かき混ぜ語順	0.03	0.57	0.05	0.957

注:N(被験者)=38.

正答率について、主語標識が有意ではなかった $[z(1186)=-0.55, ns]$ 。正順語順またはかき混ぜ語順にも有意ではなかった $[z(1186)=-0.27, ns]$ 。交互作用も有意ではなかった $[z(1186)=0.05, ns]$ 。また、異なる語順の間では、ガ格主語文とカラ格主語文と共に、有意な差が見られなかった。

3.5.2.7. 総合考察

カラ格主語と同様に、主語として扱うデ格名詞句は、IPの指定部前繰り上げられず、vP内に留まると指摘している。なお動作主という深層格を持つため、「外務省で訪問団を招待した」のような文におけるデ格名詞句は文の主語だと言える。この指摘に基づいて、カラ格主語という仮説を立てた。また、デ格の後置詞的な性格を考慮した上で、デ格名詞句が主語のように見えるにもかかわらず、実際に VP 付加詞のように処理されることも考えられ、小泉・玉岡（2016）における VP 付加詞に関する処理のメカニズムを参考にして、付加詞仮説をも立てた。

2つの仮説を検証するために、日本語母語話者を対象に、異なる主語標識と異なる語順を持つ二項動詞能動文の反応時間を計測し、比較した。その結果、ガ格主語の場合に、正順語順がかき混ぜ語順より速く処理され、正答率も高かった。このことは、かき混ぜ語順

を処理する際に、空所補充解析が誘発されることとなり、日本語母語話者はガ格名詞句を文の主語として理解されると想定できる。

デ格主語文の場合にもガ格主語文と同様の結果が得られ、主語仮説が支持された。これは、デ格主語文を処理する際に、空所補充解析が誘発され、日本語母語話者がデ格名詞句を主語として理解する可能性を示唆する同時に、構造的には、デ格主語が **vP** 内にある可能性を示している。つまり、デ格主語文は、主語が **vP** の指定部に位置し、**VP** 内に目的語と動詞があるという構造を取る。すでに述べたように、かき混ぜ語順のガ格主語文の場合、目的語が **IP** の付加位置に移動されるのに対して、かき混ぜ語順のデ格主語文の場合、目的語が **vP** の付加位置に移動されるため、より単純な構造を取ることとなる。その結果、正順とかき混ぜ語順のデ格主語文の間でのスクランブル効果（112 ミリ秒）があったが、正順とかき混ぜ語順のガ格主語文の間でのスクランブル効果（158 ミリ秒）より小さい。

ガ格主語を基準として考えると、本研究の心理言語学の文処理実験の結果は、デ格名詞句は周辺的な主語であるという主張(角田, 1991 など)を裏付けていると言えよう。さらに、デ格主語は、カラ格主語と異なり、より強い主語性を持っていると言えよう。つまり、日本語母語話者がこれらの文を理解する際には、異なる特性（格助詞と後置詞）を持つ表層格の影響を受けており、後置詞主語には、階層性が存在すると考えられよう。カラ格のような主語性の弱い主語が付加詞として理解される後置詞主語がある一方、デ格のようなより主語性の強い主語も存在する。

3.6. 中国語を母語とする日本語学習者によるデ格主語文の処理

日本語母語話者を対象とした文処理実験の結果を検討した結果、日本語母語話者は、ガ格主語文と同じメカニズムでデ格主語文を理解したと結論づけた。本節では中国語を母語とする日本語学習者を対象に文処理実験を行い、結果を検討する。

第2章での「主語＋動詞」というパターンで検索した結果から見れば、主語（動作主）としてのデの頻度は多くないが、ある程度使われていた。実際、例文の中では、「機能またはヒト免疫不全ウイルスによる免疫の機能に障害があるとして国で定める人…」や「地域で考え、取り組まなければならない問題がたくさんあります」のような新聞やニュースで見聞きすることのできるデ格主語文がみられた。しかし、デ格の用法は種類が多く、多様な動詞や表現と共に使われる。日本語教育では主に「（動作を行う）場所」「道具」「方法（または手段）」「根拠」として教えられており、中級や上級に入っても「主語」的な用法（動作・状態の主体）に言及することは少ない。これらのことを踏まえて考えると、日本語学習者の場合、デ格主語文の方がカラ格主語よりも理解が難しいと予想される。そこで、日本語能力試験 N1 に合格した中国語を母語とする日本語学習者を対象に、ガ格主語文とデ格主語文についての文処理実験を行った。

3.6.1. 実験

3.6.1.1. 仮説

デ格主語文に対する中国語を母語とする日本語学習者の処理メカニズムについて2つの仮説を立てた。

第1に、日本語学習者は、デ格主語文を正しく理解できないのではないかという仮説である。日本語学習者は、初級から主語を表す標識がガ格であることを教えられているが、非ガ格主語文に対する理解ができないというわけではない。カラ格主語文に対する理解は

その証拠の1つである。しかし、デ格はカラ格より多様な用法を持つため、デ格主語文に対する理解も難しくなると考えられ、デ格主語文を理解する際に、表層格の影響を受けることによって文法関係が食い違い、カラ格名詞句を文の主語としてみなさない可能性がある。結果として、ガ格主語文よりデ格主語文のほうが処理速度が遅く、正答率が低くなると考えられる。

第2に、日本語学習者は、デ格主語文の基底構造を想定していないので、正順語順の「～で～を」もかき混ぜ語順の「～を～で」も同じように処理するのではないかという仮説である。デ格主語の場合、日本語母語話者には、デ格名詞句を主語として理解しているようであり、「～で～を」と「～を～で」の間では、反応時間に有意な違いがみられた。上級日本語学習者も日本語母語話者に近い処理の仕方を呈すると予想される。

3.6.1.2. 参加者

32 名の名古屋大学の中国語を母語とする大学院生および大学院研究生（25 名の女性と 7 名の男性）が実験に参加した。参加者は全員で日本語能力試験 N1 または旧日本語能力試験 1 級に合格している。平均滞日時間は 33 ヶ月であり、標準偏差は 22 ヶ月であった。最年少者は 18 歳 2 ヶ月で、最年長者は 24 歳 10 ヶ月であった。平均年齢は 25 歳 5 ヶ月で、標準偏差は 22 ヶ月であった。

3.6.1.3. 刺激文

日本語母語話者と同様の刺激と実験デザインであった。ガ格主語文とデ格主語文の 2 種類の二項動詞の能動文を刺激文として使用した。32 文の正順語順のガ格主語文、32 文のかき混ぜ語順のガ格主語文および 32 文の正順語順のデ格主語文、32 文のかき混ぜ語順

のデ格主語文からなる 2×2 の 4 条件の研究デザインであった。各条件が 32 文であるため、全体で 128 文である。

以上の 128 文の正しいガ格主語文とデ格主語文以外に、「お金を虫が払った」のような正しくない刺激文を 32 文と「毎日コーヒーを飲む」のようなダミー文を 40 文作成した。正しい刺激文については、同じ文が 1 つの実験中に繰り返されると、2 回目からは文理解が促進され、処理時間が短くなることが知られている。そこで、カウンターバランスを取り、被験者を 4 つのグループに分け、それぞれを異なる正しい文からなる 4 つのリストに割り当てた。それぞれのリストには、正しくない刺激文とダミー文を入れて、正しい文と誤った文の数を同数にした。正しい刺激文、正しくない刺激文およびダミー文を合わせた 1 つの各リストは、104 文からなる。被験者ごとに 4 つのリストがランダムに選ばれるように設定した。

3.6.1.4. 実験の手続き

日本語母語話者と同様の手続きで行った。参加者 1 人ずつ、静かな条件の部屋で実験を行った。まずスクリーンの中央に「++++++」を提示し、600 ミリ秒後に刺激文を同じ位置に 1 文ずつ提示した。被験者には、できるだけ速く、正確に、提示された文が日本語の文として正しいかどうかを YES（正しい文）または NO（正しくない文）のボタンを押すことで判断するよう求めた。刺激文が提示されてからボタンを押すまでの時間を反応時間として測定した。本試行に入る前に、10 文からなる練習試行を行った。

3.6.1.5. 結果と分析

反応時間については、各被験者の条件ごとの平均から ± 2.5 の標準偏差の値から外れた値は分析から除外した。分析は R Studio のバージョン 0.99.903 を使用し、刺激文と被験者

をランダム効果とし、LME を用いて、主語標識がガまたはデおよび語順が正順語順またはかき混ぜ語順の 2 つの変数を固定効果として検討した。反応時間の分析には lme4 パッケージの中の lmer のコマンドを利用し、正答率の分析は glmer のコマンドを利用した。学習者の個人差および実験に使用した多様な文の違いが影響するを予想し、それらの違いをランダム効果として解析に含んだ上で、ガ格とデ格の主語の違いおよび正順語順とかき混ぜ語順の違いである固定効果を検討するした。反応時間と正答率の平均および標準偏差は表 11 に示されている。

表 11 中国語を母語とする日本語学習者による正順語順とかき混ぜ語順の
ガ格およびデ格主語文の正誤判断に要した反応時間と正答率

主語標識	語順	反応時間 (ms)		正答率 (%)	
		平均	標準偏差	平均	標準偏差
ガ	正順	2528	1156	92.6	26.3
	かき混ぜ	2909	1236	82.0	38.5
デ	正順	2592	1276	75.0	43.4
	かき混ぜ	3073	1375	71.9	45.0

注: N (被験者)=32.

3. 6. 1. 6. 反応時間

反応時間を分析した結果 (AIC=13423.7) は表 12 に示した通りである。まず、主語標識のガ格・デ格について、有意ではなかった [$t(802)=0.43, ns$]。また、正順語順またはかき混ぜ語順については有意であった [$t(802)=1.99, p<.05$]。両変数の交互作用も有意ではなかった [$t(802)=0.24, ns$]。反応時間について、中国語を母語とする日本語学習者は日本語母語話者と同じ結果となっており、「ガ格主語の正順語順<デ格主語の正順語順<デ格主語のかき混ぜ語順<ガ格主語のかき混ぜ語順」の順で、処理時間が速かった。

なお、かき混ぜ語順のガ格主語文（平均は 2,909ms）に比べて、正順語順のガ格主語文の反応時間（平均は 2,528ms）は有意に短かった。デ格主語文も同様に、かき混ぜ語順（平均は 3,037ms）と正順語順の反応時間（平均は 2,592ms）の間にスクランブル効果がみられた。

表 12 中国語を母語とする日本語学習者によるガ格とデ格および正順とかき混ぜ語順の文処理に要した反応時間についての線形混合効果モデル（LME）による分析結果

	推定値	標準誤差	自由度	<i>t</i> 値	<i>p</i> 値(> <i>t</i>)
(切片)	2064	356	643	5.81	0.000
ガ&デ	92	211	742	0.43	0.664
正順&かき混ぜ語順	413	208	741	1.99	0.047
ガ&デ * 正順&かき混ぜ語順	33	135	741	0.24	0.810

注: *N*(被験者)=32. *** $p < .05$.

3.6.1.7. 正答率

正答率については、R の LME 分析（glmer）の二項（binomial）で、被験者と文刺激をランダム変数とし、ガとカラの格および正順語順とかき混ぜ語順を固定変数（独立変数）として、正答・誤答を従属変数とする分析をした（AIC=846.0）。結果は表 13 に示した通りである。

主語標識が有意であった [$z(1024)=-3.29, p<.01$]。また、正順語順またはかき混ぜ語順にも有意であった [$z(1024)=-2.99, p<.01$]。さらに、両変数の交互作用も有意であった [$z(1024)=2.07, p<.05$]。中国語を母語とする日本語学習者の場合、ガ格主語の正順語順のほうがかき混ぜ語順より正確に判断され、またガ格主語文のほうが、デ格主語文よりも正確であった。

表 13 中国語を母語とする日本語学習者によるガ格・デ格および正順・かき混ぜ語順

の処理における正答・誤答についての線形混合効果モデル (LME) による分析結果

	推定値	標準誤差	z 値	p 値 (> z)	
(切片)	6.52	1.17	5.59	0.000	***
ガ&デ	-2.22	0.68	-3.29	0.001	**
正順&かき混ぜ語順	-1.99	0.66	-2.99	0.003	**
ガ&デ * 正順&かき混ぜ語順	0.81	0.39	2.07	0.038	*

注: N(被験者)=32. * $p<.05$. ** $p<.01$. *** $p<.001$.

3.6.2. 総合考察

日本語教育では、デ格で標示された名詞が主語になることは、ほとんど教えることがない。デ格名詞句が主語を示すことは稀ではあるが、日本語学習者にとっては、とりわけ、日本に住む日本語学習者にとっては、新聞やニュースでデ格主語文を見聞きする機会が多いと思われる。そこで、中国語を母語とする日本語学習者のデ格主語文に対する処理のメカニズムを検討するために、N1または1級に合格し、日本の大学院に通っている中国語を母語とする日本語学習者を対象に、ガ格主語文とデ格主語文の正順語順とかき混ぜ語順の文処理実験を行い、処理時間と正答率を測定した。中国語を母語とする日本語学習者によるカラ格主語文に対する処理メカニズムについて2つの仮説を立てた。

まず、仮説1は、日本語学習者は、デ格主語文を正しく理解できないのではないかというものであった。正答率をみると、デ格主語文の平均正答率は73.5%で、ガ格主語文の正順・かき混ぜ語順の平均正答率の87.3%よりも13.8%低く、この違いは統計的に有意であった。また、カラ格主語文の平均正答率の81.4%より7.9%低くなっている。このことから、やはり、日本語学習者にとってはデ格主語文の理解がより難しいようである。しかし、この正答率は、二格主語文の62.7%の正答率（玉岡，2005）より高い。正答率の低い理由として考えられるのは、デ格の多様な用法であり、日本語学習者は、文を通して「～で～

を」におけるデ格名詞句がどの用法に当たるかを判断する可能性が高いため、馴染みのない用法であれば、正しくない文として判断しやすくなると考えられる。しかしながら、仮説1については、予想に反して、中国語を母語とする日本語学習者は、ある程度、デ格主語文を正しく理解できると言えよう。

次に、スクランブル効果に関する仮説2である。ガ格主語文のスクランブル効果は381msと大きかった。しかし、デ格主語文の場合は、さらに大きく、481msの差があり、カラ格主語文の171msと比べると、対照的である。ガ格主語文に照らして、SOV語順が通常の基底構造の文であり、かき混ぜのOSV語順で要求される空所補充解析の処理負荷が顕著にみられた。デ格主語文も同様であり、スクランブル効果がガ格主語文より大きい。このことは、やはり日本語学習者が「～で～を」語順を基底構造として空所補充解析を行ったことを示唆している。仮説2についても予想に反して、中国語を母語とする日本語学習者は日本語母語話者と同様に、正順語順を基底構造とする空所補充解析を行うことでデ格主語文を処理することが示された。

3.7. 中国語を母語とする日本語学習者による主語標識の理解に対する文法的諸要因

本章の第4節と第6節では、中国語を母語とする日本語学習者によるオンライン文処理実験について検討した。結果からみると、上級日本語学習者によるカラ格主語文とデ格主語文の処理は、日本語母語話者に近いメカニズムを示した。また、正答率をみると、中国語を母語とする日本語学習者の理解度について、ガ格主語文<カラ格主語文<デ格主語文<ニ格主語文という順番で正答率が高かった（玉岡，2005；穆・玉岡，2016；本章の第4節と第6節）。

そこで、本節では、中国語を母語とする日本語学習者のみを対象に、カラ格主語文、デ格主語文、ニ格主語文といった「非ガ格主語文」およびガ格主語からなる主語に関する文

法テストを作った。また、「非ガ格主語文」とは別に、学習者の一般的な文法知識を測るための文法テストも作成した。この2つのテストの結果を構造方程式モデリングで分析し、日本語学習者の文法知識がどれほど「非ガ格主語文」の理解に貢献するかを検討した。

3.7.1. 日本語における「非ガ格主語文」

日本語では、格が助詞によって明示される。日本語の主語を表す際には、ガ格が斜格より優位性を持っている。日本語教育においても、初級からガ格が主語を示すことを教えている。ところが、以下の例文の(13)から(15)で示しているように、斜格も主語を示すことができる。

- (13) あなたから皆さんに連絡しておいてください。
- (14) 委員会で規約を決めた。
- (15) 私にできることがあれば、おっしゃってください。

上の例文では、主語がそれぞれ(13)カラ格、(14)デ格、(15)ニ格で示されている。これらは、ガ格が他の格に代用されるという意味で「主格代用」(三上, 1970)と言われる。あるいは、ガ格だけが主語を示すわけではないという意味で「格のゆらぎ」(仁田, 1995)とも言えよう。さらに、格助詞のガ格と後置詞(postposition)と考えられるカラ格とデ格の入れ替えという意味での格の交替(井上, 2002 など)として捉えられている。ガ格が純粋に主語を示すということに比べて、「非ガ格主語文」には、カラ格、デ格、ニ格のそれぞれに持つニュアンスが付加される。こうしたニュアンスが付加されるには、文が成立するための一定の条件を満たさなくてはならない。

テストの検討に入る前に、記述的にカラ格主語文、デ格主語文、ニ格主語可能文の成立条件についてまとめる。次に、テスト調査によって中国語を母語とする日本語学習者の文法知識を測定した。そして、どのような文法知識の下位カテゴリーが、ガ格およびカラ格、デ格、ニ格からなる「非ガ格主語文」の理解に有意に貢献するかを、因果関係を検討することのできる SEM の統計手法を用いて検討した。

3.7.2. テスト調査の概要

3.7.2.1. 参加者

中国広東省広州市にある広東培正学院に在籍する 77 人の学部生が文法知識と主語標識のテストに参加した。最年少者は 19 歳 5 ヶ月で、最年長者は 24 歳 6 ヶ月であった（生年月日の記入の無かった 2 名を除いた計算）。平均年齢は 21 歳 9 ヶ月であり、標準偏差は 10 ヶ月であった。参加者は日本語を専攻しており、2 年生が 1 名（ $n=1$ ）、3 年生が 76 名（ $n=76$ ）であった。

3.7.2.2. テストの下位カテゴリーと問題例

文法テストでは、2 種類のテストを独自に作成して実施した。第 1 に、日本語学習者の文法能力を測るために、4 つの下位カテゴリーからなる文法知識テストを行った。各下位カテゴリーが 9 問ずつで構成され、全体で 36 問（ 4×9 ）である。第 2 に、異なる主語標識に対する理解を測る主語標識テストである。4 つの下位カテゴリーからなり、各カテゴリーが 12 問ずつで、合計 48 問（ 4×12 ）である。問題は、ある文にあてはまる適切な表現を四者からチェックをつけて選ぶ形式である。2 種類のテストを合わせた 84 問を、同じタイプの問題が連続して現れないようにランダムに並べて、テスト問題を作成した。

文法知識テストの難易度は、旧日本語能力試験の出題基準を参照して、4級レベルから1級レベルまでに広く跨っている。助詞および活用の問題は基本的に4級レベルであったが、結合にあたる問題は3問あり、1問は4級レベル、ほか2問は3級レベルであった。9問の述部表現の問題のうち、テンス・アスペクトに関する問題（3問）は4級から2級、ヴォイスを問うもの（2問）は3級と1級、モダリティ（4問）は4級から1級レベル各1問ずつであった。これにより、多様な日本語の能力を持つ学習者を測定できると考えられる。

3.7.2.3. 文法知識に関するテスト

主語の標識との関係を考慮し、文法知識を測定するテストは、助詞、述部表現、活用・結合、敬語という4つの下位カテゴリーからなる。

第1の下位カテゴリーとして、基本的な助詞の理解がどの程度備わっているのかを測定するため、助詞を設定した。助詞は付加される前後の語だけをみるだけでは適切な助詞が選べるわけではなく、文全体を見渡し、文がどのような項構造を成しているかが理解できなければ、正しい助詞を導くことができない。そのため、助詞はその機能の理解だけではなく、主格や与格がどれにあたるのかといったような文構造を解析する能力にも関わる項目であると言える。助詞に関するテストは「日曜日は、久しぶりに会った友人と楽しい時間（ ）過ごした」、「和美は書類のミス（ ）気付いて、すぐに修正した」のような文に対して、（ ）の括弧内に適切な助詞を入れる問題である。「は、で、が、を」、「を、が、に、で」のような4つの選択肢から適切なものを1つ選ぶことを求める。動詞の「過ごす」はヲ格を取り、「気付く」はニ格を取るため、設問例の正解はそれぞれ「を」と「に」である。

第2の下位カテゴリーは述部表現である。述部表現は文全体の理解、すなわち文法知識に関わり、主語の標識と無関係ではない。たとえば、ヴォイスは動詞とともに文末に現れるが、どのような言語形式であれば、主語の視点・視座を適切に表しうるのか、主語とヴォイス形式の間で対応関係に関する文解析が行われているはずである。そのため、この下位項目も主格に関わる文法知識として捉えており、述部全体の意味の理解に関係した能力を測定するものである。述部表現テストは「誰から借りたか全く覚えていないので、返したくても（ ）」、「慎重に考えよう。この件は、安易に（ ）」のような問題で、「返そうともしない、返すほかない、返し方がない、返すわけにはいかない」、「決めるべきことではない、決めないべきことだ、決めることではないべきだ、決めなければいけないべきことだ」のような4つの選択肢の中から1つ選ぶことを求めた。前者は、「返したくても」の前項から、後項には「返したくても、返せない」が想定される。「返そうともしない」と「返すわけにはいかない」は、返す気がないので、誤りである。「返すほかない」は、返したくないという気持ちが入る。正解は返す方法がないという意味で、「返し方がない」となる。また、後者は、当為を表す「べきだ」の否定形に「ことだ」が複合的に組み合わさった文末形式を問う問題であり、正答は「決めるべきことではない」である。

第3の下位カテゴリーは、活用・結合の理解である。可能を表す二格主語文において、助詞を正しく選択するには、動詞が可能形であることに着目しなくてはならない。動詞が可能形であると判定するには、動詞の活用の知識が備わっているということが大前提となる。カラ格主語文でも、提供・伝達行為を表す動詞が要求され、主語が動詞の起点を表すということから、必然的に授受など視点の関わる受身形や使役形の形態素変化に関する知識が求められることが予想され、これも文全体の構造理解という点に深く関わる項目として設定した。活用・結合テストは「田中さんに何度電話をかけても（ ）」について

ては、「つながらないでした、つながらなかった、つながらなかった、つながりませんでした」から正解を選ぶ問題である。これは未然形の過去形は「なかった」であるため、「つながらなかった」が正解である。また「この仕事はあなたが思うほど（ ）」については、「楽くない、楽じゃない、楽にじゃない、楽なじゃない」から選ぶ問題である。これは、「楽だ」がナ形容詞であるため、正しい否定形は「楽じゃない」が正解となる。

第4の下位カテゴリーは敬語である。英語の主語は動詞と単複・時制の一致 (agreement) がある。しかし、日本語の主語には動詞との一致がない。ところが、敬語の場合には、主語の名詞によって動詞が変化し、主語（および目的語も）動詞との一致がみられる (Miyagawa 2010)。たとえば、同じ動詞「来る」を使うとしても、主語が目上（例：社長）であれば、「社長がいらっしゃる」とし、目下であれば「後輩が伺う」とし、主語によって動詞に制約が生じる。主語との一致という観点から、敬語の理解は主格と深く関わるものとして、下位項目に設定した。敬語テストは「当機はまもなく離陸（ ）。シートベルトをお締め下さい」、「（ ）は、こちらに置いてください」のような問題では「されます、ございます、なさいます、いたします」、「お荷物、ご荷物、貴荷物、本荷物」という4つの選択肢の中から1つ選ぶことを求める。前者は、まず「当機」という語から、航空機の機内アナウンスであり、サービスを受ける乗客に向けられた発話であることを理解し、発話主体者である客室乗務員が、この文脈において「離陸する」という語をどう選択すべきであるかを問う問題である。「される」「なさる」は「する」の尊敬語であり、客室乗務員は、自身らの帰属する飛行機が離陸するという行動を謙譲語で示すべきであるため、乗客に対してふさわしいとはいえない。したがって、正解は乗客に対する謙譲の表現となる「いたす」である。また、「ござる」は「ある」および「～だ」の丁寧語であり、「離陸（する）」という動詞に対して、品詞上接続不可で

ある。後者の問題は、「荷物」は和語であるため、「ご」を付加することはできず、「貴」や「本」のような接頭辞も取れない。正解は「お荷物」である。

3.7.2.4. 主語標識に関するテスト

主語標識の理解は、4つの下位カテゴリからなる。第1に、ガ格で主語が示された文の理解を測定するガ格主語テストである。たとえば、「部長（ ）パリの会議に出席することになりそうです」のような問題では「へ、より、の、が」という4つの選択肢の中から適切なものを1つ選ぶことを求める。問題例は能動文で、主語が「が」によって示される。

第2に、カラ格で主語が示された文の理解を測るカラ格主語テストである。たとえば、「もう二度としないように、私（ ）注意しておきます」のような問題では「へ、を、まで、から」の4つの選択肢の中から適切なものを1つ選ぶことを求める。「私」は動詞「注意する」の起点であり、「私から」の担う「意味役割」は「動作主」であるため、問題例の主語はカラ格によって示され、正解は「から」である。

第3に、デ格で主語が示された文の理解を測るデ格主語テストである。たとえば、「田中さんと鈴木さん（ ）この問題を解決しました」のような問題では「から、で、まで、に」という4つの選択肢から適切なものを1つ選ぶことを求める。「田中さんと鈴木さん」は複数性を持つため、設問例の主語はデ格で示すことができ、正解は「で」である。

第4に、ニ格で主語が示された可能文に関する理解を測るニ格主語テストである。たとえば、「中山さん（ ）バイオリンが弾けるなんて、信じられない」のような問題では「を、に、から、で」という4つの選択肢の中から最適なものを1つ選ぶことを求める。動詞の「弾く」が可能形の「弾ける」となっているため、可能文であると判断して、主語がニ格で示されることを理解しなくてはならない。問題例の正解は「に」である。

3.7.3. SEMの潜在および観測変数

SEM は変数間の理論的な関係性を仮定し、モデルとして描き、それが妥当であるかどうかを検証するための統計的分析手法である（今野, 2012 参照）。本研究では、文法知識と「非ガ格主語文」の理解の因果関係を検討する上で、テストで測定した観測変数（observed variable）とそれらから構成される概念的に想定された潜在変数（latent variable）からなる。まず、本調査で使用した2つのテストである文法知識と主語標識の理解を潜在変数として設定した。文法知識は、前述のように助詞、述部表現、活用・結合、敬語の4つの下位カテゴリーからなり、それぞれが観測変数である。同様に、主語標識の理解は、ガ格主語文、カラ格主語文、デ格主語文、ニ格主語可能文という4つの下位カテゴリーで構成され、それぞれが観測変数である。テストの平均、標準偏差、相関係数、信頼性は表14で示した。

表14に示したように、日本語学習者数77名で、文法知識の36問のテスト問題については、クロンバック信頼性係数は0.72で、高い信頼性を示した。また、同日本語学習者77名の主語標識の理解の48問のテスト問題についても、クロンバック信頼性係数が0.84となり、非常に高い信頼性を持つテストであることが示された。両テスト共に、高い信頼度が確保されており、SEMの観測変数およびそれらから構成される潜在変数の因果関係を考察するのに適していると言えよう。

表14の4つの主語文の平均をみると、ガ格主語文（ $M=9.13$ ）がもっとも高く、「非ガ格主語文」のニ格主語可能文（ $M=6.09$ ）とカラ格主語文（ $M=6.04$ ）はやや低く、さらにデ格主語文（ $M=5.78$ ）はもっとも低い点数であった。4つの主語標識の文が、難易度において完全に統制されているわけではないが、4つの主語の標識の理解を比較するために、反復のある一元配置の分散分析を行った。その結果、有意な主効果がみられた [$F(3, 228)=75.17, p<.001, \mu_p^2=.50$]。単純対比の結果、ガ格主語文がもっとも得点が高く、他の主

表 14 観測変数の平均、標準偏差および変数間の相関係数

観測変数	1	2	3	4	5	6	7	8
主語標識 ($\alpha=.84$)								
1 ガ格主語	-							
2 カラ格主語	.53 **	-						
3 デ格主語	.53 **	.51 **	-					
4 ニ格主語	.58 **	.48 **	.50 **	-				
文法知識 ($\alpha=.72$)								
5 助詞	.57 **	.29 **	.42 **	.47 **	-			
6 述部表現	.44 **	.35 **	.53 **	.46 **	.37 **	-		
7 活用結合	.43 **	.45 **	.40 **	.37 **	.33 **	.45 **	-	
8 敬語	.30 **	.40 **	.34 **	.40 **	.36 **	.36 **	.37 **	-
平均	9.13	6.04	5.78	6.09	5.52	3.82	5.36	3.61
標準偏差	2.15	2.62	1.88	2.42	1.74	1.65	1.99	1.49

注: N (参加者)=77. ** $p<.01$. 主語標識のテストは各下位カテゴリーで 12 問の 12 点満点で、文法知識は各下位カテゴリーで 9 問の 9 満点である。

語の標識であるカラ格、デ格、ニ格には違いが見られなかった。つまり、ニ格主語可能文ばかりでなく、「非ガ格主語文」全体に対して、学習者の理解がガ格主語文ほど進んでいないことが示唆された。ガ格主語文は初級レベルから学んでいるものの、カラ格、デ格、ニ格で主語が示される文は、日本語教育の現場ではほとんど扱わない。そのため、中国語を母語とする日本語学習者は、ガ格以外の助詞で主語を示すことになじみがなく、またカラ、デ、ニの助詞は多様な用法を持つため、主語としての使用が理解し難いのであろう。そこで、6 節ではこれらの主語標識の理解がどのような文法知識に支えられて促進されるのかを SEM による因果関係の解析で検討する。

3.7.4. 分析と結果

3.7.2.節で述べた潜在変数を使って学習者の文法知識が「非ガ格主語文」の理解を予測するかどうかを検証するために、SPSS AMOS 22.0 J で SEM を用いて、潜在変数間の因果関係を分析した。SEM の分析結果は図 14 の通りである。

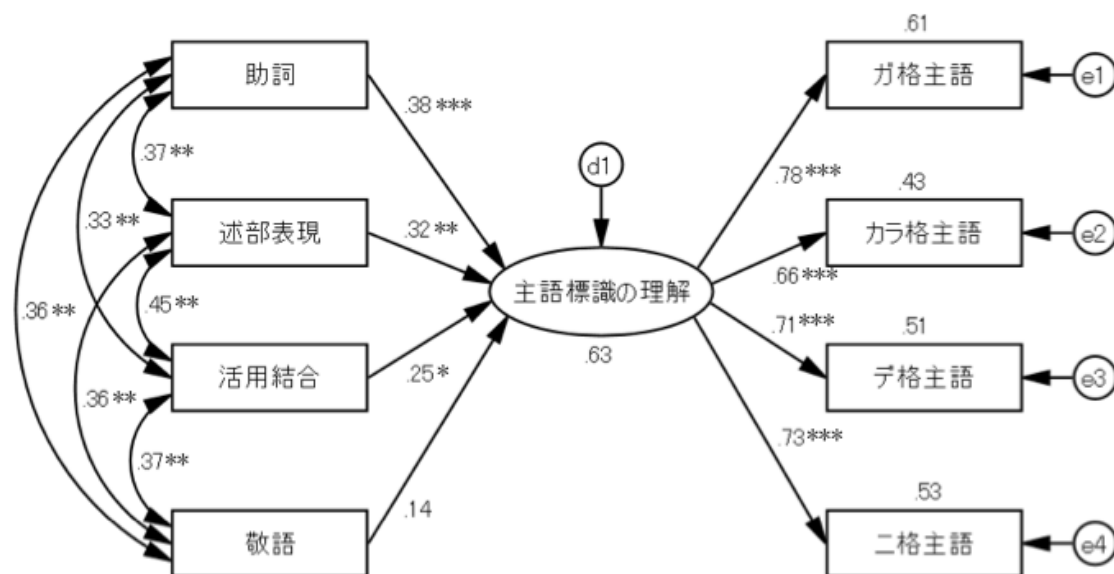


図 14 SEM による文法知識と主語標識の理解との因果関係

注: $N=77, \chi^2(14)=16.77, ns, GFI=.95, AGFI=.87, CFI=.99, RMSEA=.05$.

文法知識の 4 つの下位カテゴリーが主語標識の理解に貢献するというモデルが、本研究で得たデータと適合しているかどうかを検討する。まず、カイ二乗検定が有意であれば、モデルとデータが異なることを示し、有意ではない場合は、よく適合していることを示す。カイ二乗検定は有意ではなかったため、適合度が高いことが示された [$N=77, \chi^2(14)=16.774, p=.268, ns$]. また、GFI (goodness of fit index) および CFI (comparative fit index) は、0.95 以上であること、AGFI (adjusted goodness of fit index) は、0.90 以上である場合によく適合していると判断される。AGFI は、やや低く 0.87 であるが、他の 2 つの指標が、GFI=.95 およ

び CFI=.99 で、適合度は非常に高いと判断できる。さらに、RMSEA (root mean square error of approximation) は、0.05 以下であることが求められるが、本研究では RMSEA=.05 で、よく適合していると考えられる。以上の適合度指標の結果から、本研究のモデルとデータがよく適合していると判断することができる。

主語標識の理解の潜在変数は、4 つの観測変数から構成される。図 1 の SEM では確認的因子分析となる。それぞれの下位カテゴリーが高い因子負荷量を示した。具体的には、ガ格主語が 0.78 ($p<.001$)、カラ格主語が 0.66 ($p<.001$)、デ格主語が 0.71 ($p<.001$)、ニ格主語が 0.73 ($p<.001$) であった。これらの 4 つの観測変数は、適切に主語標識の理解を構成している要素であると言える。

本研究の主要な目的は、主語標識の理解を文法知識の 4 つの変数で予測することである。まず、表 1 に示したように、文法知識の 4 つの観測変数間には有意な相関があるため、モデルでも相関関係を想定した。助詞と述部表現 ($r=.37, p<.01$)、助詞と活用・結合 ($r=.33, p<.01$)、助詞と敬語 ($r=.36, p<.01$)、述部表現と活用・結合 ($r=.45, p<.01$)、述部表現と敬語 ($r=.36, p<.01$)、活用・結合と敬語 ($r=.37, p<.01$) で、すべて有意であった。文法知識の 4 つの観測変数で主語標識の理解を予測した結果、助詞 ($\beta=0.38, p<.001$)、述部表現 ($\beta=0.32, p<.01$) および活用・結合が ($\beta=0.25, p<.05$) 主語標識を有意に予測していた。しかし、敬語は有意に予測しなかった ($\beta=0.14, ns$)。したがって、中国語を母語とする日本語学習者の文法知識の中で、助詞、述部表現および活用・結合が、主語標識の理解を有意に促進する変数であることが明らかになった。

3.7.5. 考察

日本語学習者の文法知識が、カラ格、デ格、およびニ格主語可能文からなる「非ガ格主語文」とガ格主語文に対する理解を促進することを、SEM の統計手法を使って解析した。

その結果、文法知識として仮定した助詞、述部表現、活用・結合、敬語の4つの変数の主語標識の理解に対する貢献度は一様ではなく、助詞、述部表現および活用・結合が有意な予測変数となった。

主語標識の理解に第1に貢献したのは助詞であった。本研究は、異なる4種類の助詞による主語標識についての理解であるため、日本語学習者が助詞一般を適切に理解していることが、主語標識の理解を促進するというのは納得できる結果である。とりわけ、主語がカラ格、デ格、ニ格で示される「非ガ格主語文」の理解が、助詞一般の理解とこれらの助詞が主語を示す成立条件を適切に認識しているかどうか、主語標識の理解に重要であると思われる。

第2に貢献したのは述部表現である。主語は述部との結びつきが強く、とりわけ、「非ガ格主語文」の成立条件や許容度も述部表現に深く関わっている。たとえば、カラ格主語文は移動動詞を要求するだけでなく、動詞に「てください」「ておく」「てあげる」のような補足形式をつけた「褒めてあげる」のほうが、文の許容度が上がる（張, 1995; 伊藤, 2001 参照）。ニ格主語可能文も動詞の可能形を要求する以外、述部に「らしい」「と思わない」のような表現を加えた「太郎に3ヶ国語が話せると思わない」のほうがより自然な文になる。ガ格主語文が述部表現に対する要求は、カラ格主語文とニ格主語可能文ほど厳しくないが、述部を見ないと、やはり最終的に適切かどうかの判断ができない。そのため、主語標識を正しく理解するために、述部表現に対する理解も必要だと考えられる。

第3に貢献したのは、活用・結合である。たとえば、ニ格主語文では、動詞が可能形の $-(rar)e$ を取る。また、カラ格主語の場合は、「てください」「ておく」「てあげる」といった動詞のテ形を取る。このように、動詞の活用およびその意味を正しく理解していなくては、主語を理解することができない。動詞の活用・結合についての理解は、主語標識の理解を促進することがうかがえる。

予測変数として設定した敬語は主語標識の理解に貢献しなかった。すでに述べたように、敬語は主語と動詞の間に一致があり、主語によって動詞が変化する。しかしながら、本研究では、敬語は主語標識の理解を促進しなかった。もともと日本語では、敬語など特殊な条件でしか主語と動詞の一致がみられない。また、敬語テストでも 9 点満点中で平均が 3.61 点で、40.1%の正答率という低さで、学習者の敬語の習熟度は非常に低かったことを踏まえて、学習者は主語と動詞の一致を強く意識していないのではないかと推測される。

中国語の場合、表面上主語の標識がほとんど見られないため、中国語を母語とする日本語学習者にとって、通常の用法から逸脱するような助詞の使用については、習得が難しいことが考えられる。予想通り、今回のテスト調査によって、ガ格主語文では平均得点が高いが、「非ガ格主語文」では低いということがわかった。さらに、この傾向は中国語日本語母語話者の日本語能力のレベルによって一様ではないと予想される。従来の決まった用法だけでなく、例外的な主語の格標識をどのように中国語を母語とする日本語学習者に教えるかを考える必要がある。

中国語の特徴を含めて考えれば、異なる言語を母語とする日本語学習者であれば、異なる結果になる可能性がある。たとえば、韓国語を母語とする日本語学習者であれば、日本語と同様に母語に多様な助詞が存在するため、中国語を母語とする日本語学習者よりも「非ガ格主語文」がより良く理解でき、予測する文法知識の下位カテゴリーも異なるかもしれない。また、英語にも日本語のような助詞を持たないため、英語を母語とする日本語学習者は、中国語を母語とする日本語学習者と類似の結果が得られるかもしれない。今後、韓国語や英語を母語とする日本語学習者を対象に調査を行うことで、日本語の「非ガ格主語文」に対する理解について、母語の異なる学習者間で比較することができよう。

終 章 まとめおよび今後の課題

日本語では、格が助詞によって明示される。日本語の主語を表す際に、ガ格は斜格よりも優位性を持つが、「私から注意事項を連絡しておきます」や「外務省で訪問団を招待しました」のよう斜格で主語を示す場合が多い。このような現象は、日本語における深層格と表層格における対応関係の多様性に起因すると考えられる。このような多様性によって、日本語においては、ある名詞句が同じ深層格を持っていたとしても、多様な表層格であらわれることが許される。これまでの研究では、ニ格だけでなく、カラ格とデ格でも主語を示すことができ、ガ格主語（プロトタイプ的な主語）と同様に、動作主や主体の深層格を持ち、尊敬語などのような統語現象を誘発できるという主張がみられる（たとえば、角田，1991）。

このような言語現象に関して、先行研究では、「格の交代」（井上，2002）「格のゆらぎ」（仁田，1995）などとして捉えている。しかし、格自体に意味が含まれるかどうか、脱落できるかどうかという側面から考えると、これらの格の特徴が一様ではない。生成日本文学では、ガ格とニ格を格助詞、カラ格とデ格を後置詞としている。格助詞と後置詞がそれぞれに持つ深層格が異なるため、異なる位置に生成され、異なる統語構造を有することになる。本研究では、動詞句内主語仮説に基づいて、それぞれガ格主語文の統語構造とカラ格・デ格主語文の統語構造を想定し、日本語母語話者と中国語を母語とする日本語学習者のカラ格主語文とデ格主語文の処理（または理解）のメカニズムを心理言語学の文処理実験で考察した。さらに、中国語を母語とする日本語学習者の場合、どのような文法知識がカラ格・デ格・ニ格主語文の理解に貢献するのかも検討した。

文処理実験と文法テストの検討に入る前に、『中納言』に収録される新聞・広報紙・雑誌という3つの下位コーパスを使用し、主語としてのカラ格とデ格の頻度を調べた。3つのコーパスは957万語であり、「主語＋動詞」というパターンで検索し、4,887例のカラ

格の実例が出た。その中に、主語（動作主）を表すカラ格が12件であった。また、同パターンで検索し、9,228件のデ格主語の実例が見つかった。その中に、主語（動作主）を表すデ格が767件あった。なお、ジャンル間のエントロピーと冗長度については、大きな差はみられなかった。本研究で調べた結果は、国立国語研究所（1997）の報告と一致している。つまり、主語（動作主）としてのカラ格の頻度が低く、あまり主語を示さない。一方、主語（動作主）としてのデ格の頻度が典型的な使い方に比べて低いが、ある程度使われる。この結果から、頻度によって、カラ格主語文とデ格主語文の反応時間がガ格主語文より長く、正答率もガ格主語文より低いことが予想される。また、エントロピーと冗長度という2つ指標から見れば、カラ格は用法がデ格より少なく、一定的な用法が繰り返して使用されるという傾向がある。一方、デ格は用法が多い上に、カラ格よりも多様な用法で使われる傾向がある。このことから、中国語を母語とする日本語学習者の場合、デ格主語文のほうがカラ格主語文よりも理解が難しいと予想される。実際、文処理実験の結果は、この2つの予想を裏付けている。

文処理実験については、カラ格とデ格の後置詞的性格を考慮し、主語仮説（動詞の項としての解釈）と付加詞仮説（後置詞自身の解釈）という2つの仮説を立てた。先行研究におけるカラ格主語文とデ格主語文の成立条件にしたがって、カラ格とデ格二項動詞能動文の刺激を作り、文正誤判断課題で実験を行った。その結果、日本語母語話者の場合、ガ格主語文の正順とかき混ぜ語順の間でスクランブル効果がみられた。しかし、カラ格主語文の正順とかき混ぜ語順の間にはスクランブル効果はみられなかった。さらに、IP副詞を含めたカラ格二項動詞能動文の場合でも、予想されたスクランブル効果がみられなかった。この結果から、日本語母語話者は、カラ格名詞句を主語というより付加詞として理解していると考え、カラ格主語の主語性が低いと結論づけた。つまり、カラ格名詞句は、vPの指定部に生成されるのではなく、付加位置に生成されるという結論である。

一方、カラ格主語文と異なり、デ格主語文では、ガ格主語文と同様に、正順語順とかき混ぜ語順の間でスクランブル効果がみられた。デ格主語文のスクランブル効果は、ガ格主語文より小さい。これは、デ格主語が **vP** の指定部にあり、かき混ぜ語順の場合、目的語が **vP** の付加位置に移動するため、**IP** 内に出ることがないことに起因すると考えられる。そこで、かき混ぜ語順のデ格主語文の統語構造は、かき混ぜ語順のガ格主語文より単純であるとする。日本語母語話者は、デ格名詞句を主語として処理していると考え、デ格主語の主語性が強いと結論づけた。

中国語を母語とする日本語学習者の場合、カラ格主語とデ格主語の難易度などを考慮し、カラ格主語文とデ格主語文の理解が難しいという仮説および正順語順を想定できないために語順の違いによるスクランブル効果があらわれないという仮説を立てた。日本語母語話者に課したのと同じ文処理実験の結果、仮説 1 について、カラ格主語文とデ格主語文の平均正答率がそれぞれ 80% と 70% 以上であり、玉岡（2005）での二格主語文の平均正答率より高い結果が得られた。日本語教育においては、カラ格とデ格が主語を示すことができることに言及しないことが多いが、日本語能力試験 1 級または N1 に合格した上級日本語学習者であれば、カラ格とデ格主語文をある程度理解できることがわかった。また、実験の正答率は、カラ格主語文 < デ格主語文 < 二格主語文という順に、理解が進んでいることを示唆した。しかし、文法テストの非ガ格主語文の平均を一元配置分散分析で比べた結果、非ガ格主語文の間には有意な違いがなく、非ガ格主語文とガ格主語文の間には違いがみられた。やはり、もっとも理解しやすいのは、ガ格主語文であることがわかる。

仮説 2 について、異なる語順のカラ格主語文とデ格主語文では、ガ格主語と同様にスクランブル効果が観察された。このことは、中国語を母語とする日本語学習者は、「～カラ～ヲ～動詞」と「～デ～ヲ～動詞」が正順語順であると想定しながら、文を処理したことを示唆している。日本語教育では、初級の段階から日本語は SOV 語順であることを教え

ている。そのため、本研究の文処理実験に参加した中国語を母語とする日本語学習者も SOV 語順が正順語順ということを強く意識すると考えられる。そうすると、日本語の目的語が動詞の前に来ることと、ヲ格で示されることが想定できる。かき混ぜ語順の場合、文頭に目的語が来るので、それをみた時点で、すでに正順語順ではないということに気づくはずである。次に、カラ格主語とデ格主語を読んで、最後に動詞をみて、目的語のものの位置が動詞の前であるということがわかる。このようなメカニズムは、文処理の負荷を大きくし、結果的にスクランブル効果が顕著に観察されると考えられる。

本研究では、コーパス検索および反応時間パラダイムに基づく文処理実験でカラ格主語文とデ格主語文の理解を考察した。しかし、研究方法には、限界があり、本研究で結論を踏まえて、再考する点が5つある。これらは、今後の課題としたい。

第1点は、超大規模コーパス（たとえば、『毎日新聞』の10年分以上）を使い、「主語＋目的語＋動詞」のパターンで検索し、カラ格主語とデ格主語の実例がどのような様相を呈するのかを検討する。

第2点は、前述のように、文理解に要する反応時間は、刺激文がコンピュータの画面上に提示されてから参加者が正誤判断をして、ボタンを押すまでの時間を測ることができる。しかし、文の構成素である各句の初回注視継続時間（first fixation duration）、総注視時間（total fixation time）、注視頻度（frequency of fixation）、逆行頻度（frequency of regression）などを具体的に考察することができない。そこで、視線計測の手法を使ってガ格主語文を基準として、カラ格主語文とデ格主語文の処理メカニズムを再検討する。そのために、ガ格主語の正順とかき混ぜ語順、カラ格主語文の正順とかき混ぜ語順、デ格主語文の正順とかき混ぜ語順におけるガ格主語、カラ格主語、デ格主語の注目継続時間（fixation duration）や逆行頻度を比較する。

第3点は、尊敬語を取るカラ格主語文とデ格主語文を検討しなければならない。角田(1991)が指摘しているように、主語であれば、尊敬語を誘発することが可能である。カラ格主語も「校長から証明書をお渡しになった」のように、動詞の尊敬語を誘発することができる。さらに、Miyagawa (2010)は、敬語の場合、主語と動詞の間に一致があるということを指摘している。そのため、敬語形を取る動詞のカラ格・デ格主語文の場合に、スクランブル効果があらわれるかどうかを考察する必要がある。また、デ格主語の構造的位置を考察するため、カラ格と同様に、IP副詞を含めたデ格主語文の文処理実験を行う予定である。

第4点は、コーパス検索の結果を分類する際に、深層格は動作主であるかどうか、ガ格主語との交代が許されるのかを基準としているため、「自分で」「みんなで」「親子で」「地域で」などのような先行研究では指摘されていないデ格を主語として分類した。これらのデ格はそれぞれ「状態」（または「条件」）「範囲」として捉えることができる。そこで、今後、これらのデ格名詞句の主語性を考察することを通して、より緻密にデ格主語を分類し、その階層性を明らかにすることを目指す。

第5点は、本研究では、中国語を母語とする日本語学習者のみを対象に文処理実験と文法テストを行った。今後、他の言語を母語とする日本語学習者を対象に、文処理実験と文法テストを行うことで、母語の違いによる文理解への影響を考察する必要がある。

参考文献

- Baayen, R. H., Davidson, D. J., & Bates, D. M. (2008). Mixed-effects modeling with crossed random effects for subjects and items. *Journal of Memory and Language*, 59, 390-412.
- Baayen, R. H. (2008) *Analyzing Linguistic Data A practical introduction to statistics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 穆欣 (2014) 「日本語・韓国語・中国語・英語の無主格文について—川端康成『伊豆の踊子』『雪国』の原文と翻訳文を検討材料として—」『山口国文』37, 90-80.
- 穆欣・玉岡賀津雄 (2016) 「中国語を母語とする日本語学習者によるカラ格主語文の処理メカニズム」『小出記念日本語教育研究会論文集』24, 69-83.
- Crain, S., & Forder, J. D. (1985). How can grammars help parsers? In D. R. Dowty, L. Karttunen & A. M. Zwicky (Eds.), *Natural language parsing* (pp. 94-128). Cambridge: Cambridge University Press.
- 張麟声 (1995) 「ガとカラー能動文における動作主を表す用法—」宮島達夫・仁田義雄 (編) 『日本語類義表現の文法 (上) 単文編』 (pp. 43-52), くろしお出版
- 張仙峰・葉文玲 (2006) 「当前閱讀研究中眼動指標述評」『心理与行為研究 (Studies of Psychology and Behavior) 』4 (3), 236-240.
- Den, Y., & Inoue, M. (1997). Disambiguation with verb-predictability: Evidence from Japanese garden-path phenomena. *Proceedings of the Nineteenth Annual Conference on the Cognitive Science Society*, 179-184.
- Farmer, A. (1984). *Modularity in syntax: A study of Japanese and English*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Frazier, L. (1987). Syntactic processing: Evidence from Dutch. *Natural Language and linguistic Theory*, 5, 519-559.
- Frazier, L., & Clifton, C, Jr. (1989). Identifying gaps in English sentences. *Language and Cognitive Processes*, 4, 93-126.

- Frazier, L., & Flores D'Arcais, G. B. (1989). Filler driven parsing: A study of gap filling in Dutch. *Journal of Memory and Language*, 28, 331–344.
- Fukui, N. (1986). *A theory of category projection and its applications*. Doctoral dissertation submitted to MIT, Cambridge, MA.
- 杉浦正利・山下淳子（2011）「アイトラッキングを使った言語処理過程の研究」藤村逸子・滝沢直弘編『言語研究の技法 データの収集と分析』ひつじ書房
- Hale, K. (1980). Remarks on Japanese phrase structure: Comments on the papers on Japanese syntax. *MIT Working Papers in Linguistics*, 2, 185–203.
- Hale, K. (1982). Preliminary remarks on configurationality. *North East Linguistic Society*, 12, 86–96.
- Hale, K. (1983). Warlpiri and the grammar of non-configurational language. *Natural Language and Linguistic Theory*, 1, 5–47.
- 原田信一（1973）「日本語の主語をめぐって」『月刊言語』2, 82–90.
- 長谷川信子（1999）『生成日本語学入門』大修館書店
- 何元建（2011）『現代漢語生成語法』北京大学出版社
- 伊藤健人（2001）「主語名詞句におけるガとカラの交替について」『明海日本語』6, 45–63.
- Inoue, M., & Den, Y. (1999). In uence of verb-predictability on ambiguity resolution in Japanese. *Proceedings of the Second International Conference on Cognitive Science and the Sixteenth Annual Meeting of the Japanese Cognitive Science Society Joint Conference*, 499–502.
- 井上和子（1976）「変形生成文法と日本語 上 統語構造を中心に」大修館書店
- 井上和子（2002）「能動文、受動文、二重目的語構文と『から』」『Scientific Approaches to Language (神田外語大学)』1, 49–76.

- 今野勝幸 (2012) 「構造方程式モデリング-モデル構築の再検討-」 『外国語教育メディア学会 (LET) 関西支部メソドロジー研究部会 2012 年度報告論集』 68-74.
- Kitagawa, Y. (1986). *Subjects in Japanese and English*. Doctoral dissertation submitted to the University of Massachusetts, Amherst, USA.
- 北原保雄 (1981) 『日本語の世界 6 - 日本語の文法 -』 中央公論社
- Kuroda, S.-Y. (1988). Whether we agree or not. *Linguisticae Investigationes*, 12, 1-47.
- 久野暉 (1973) 『日本文法研究』 大修館書店
- 黒田成幸 (2005) 『日本語からみた生成文法』 岩波書店
- 草野清民 (1978) 『日本の言語学第 3 巻』 大修館書店
- 小池清治 (1987) 『大学生のための日本文法』 有精堂出版
- Koizumi, M. (1993). Modal phrase and adjuncts. In P. M. Clancy (Ed.), *Japanese/Korean Linguistics 2*, 409-428. Stanford, CA: CSLI (Center for the Study of Language and Information).
- 小泉政利・立石浩一 (2001) 『文の構造』 研究社
- 小泉政利・玉岡賀津雄 (2006) 「文解析実験による日本語副詞類の正順語順の判定」
『認知科学』 13(3), 392-403.
- Koizumi, M., & Tamaoka, K. (2010). Psycholinguistic evidence for the VP-internal subject position in Japanese. *Linguistic Inquiry*, 41, 663-680.
- 国立国語研究所 (1997) 『日本語における表層格と深層格の対応関係』 国立国語研究所.
- Mazuka, R., Itoh, K., & Kondo, T. (2002). Cost of scrambling in Japanese sentence processing. In M. Nakayama (Ed.), *Sentence processing in East-Asian languages* (pp. 131-166). Stanford, CA: CSLI (Center for the Study of Language and Information).
- Miyagawa, S. (2010). *Why agree? why move?: Unifying agreement-based and discourse configurational languages*. Cambridge MA: MIT Press.

- Miyamoto, E., & Takahashi, S. (2002). The processing of wh-phrases and interrogative complementizers
In Japanese. In N. Akatuka & S. Strauss (Eds.), *Japanese/Korean linguistics*, 10, 62–75.
Stanford, CA: CSLI (Center for the Study of Language and Information).
- Miyaoka, Y., & Tamaoka, K. (2005). An investigation of the right-hand head rule applied to Japanese
affixes, *Glottometrics*, 10, 45-54.
- 三上章 (1970) 『文法小論集』 くろしお出版
- 三上章 (1972a) 『現代語法序説 シンタクスの試み』 くろしお出版 (復刊)
- 三上章 (1972b) 『続・現代語法序説 主語廃止論』 くろしお出版 (復刊)
- 三原健一・平岩健 (2006) 『新日本語の統語構造 ミニマリストプログラムとその応用』
松柏社
- 三原健一 (2008) 『構造から見る日本語文法』 開拓社
- 難波えみ・玉岡賀津雄 (2016) 「様態と結果の副詞的表現と動詞の共起パターンに関する
エントロピーと冗長度を指標にした検討」 『計量国語学』 30(4), 195-209.
- 丹羽哲也 (2004) 「主語と題目語」 尾上圭介編『朝倉日本語講座 6 文法 II』 朝倉書店
- 仁田義雄 (1995) 「格のゆらぎ」 『言語』 24(11), 20-27.
- 日本語記述文法研究会 (2009) 『現代日本語文法 2』 くろしお出版
- 大槻文彦 (1897) 『広日本文典』 勉誠社より復刻
- 尾上圭介 (2004) 「主語と述語をめぐる文法」 尾上圭介編『朝倉日本語講座 6 文法 II』
朝倉書店
- Tamaoka, K. Lim, H., & Sakai, H. (2004). Entropy and redundancy of Japanese lexical and syntactic
compound verbs. *Journal of Quantitative Linguistics*, 11(3), 233-250.

- Tamaoka, K., Sakai, H., Kawahara, J., Miyaoka, Y., Lim, H., & Koizumi, M. (2005). Priority information used for the processing of Japanese sentences: Thematic roles, case particles or grammatical functions? *Journal of Psycholinguistic Research*, 34(3), 281-332.
- Tamaoka, K., Asano, M., Miyaoka, Y., & Yokosawa, K. (2014). Pre-and post-head processing for single- and double-scrambled sentences of a head-final language as measured by the eye tracking method. *Journal of Psycholinguistic Research*, 43, 167-185.
- 玉岡賀津雄・宮岡弥生・林炫情（2003）「エントロピーと冗長度で表現の多様性と規則性を表す試み-韓国語系日本語学習者の敬語表現を例に-」『日本語科学』14, 98-112.
- 玉岡賀津雄（2005）「中国語を母語とする日本語学習者による正順・かき混ぜ語順の能動文と可能文の理解」『日本語文法』5(2), 92-109.
- 玉岡賀津雄・木山幸子・宮岡弥生（2011）「新聞と小説のコーパスにおけるオノマトペと動詞の共起パターン」『言語研究』139, 57-83.
- 竹沢幸一・John Whitman 著, 中右実編（1997）『日英語比較選書 9 格と語順と統語構造』研究社
- 角田太作（1991）『世界の言語と日本語 言語類型論から見た日本語』くろしお出版
- Stowe, L. (1986). Parsing wh-constructions: Evidence for on-line gap location. *Language and Cognitive Processes*, 1, 227-245.
- Shannon, C. E. (1948). A mathematical theory of communication. *Bell System Technical Journal*, 27, 379-423 (Part I) and 623-656 (Part II).
- 佐貫繁（2010）「日本語の与格主語構文の分析-日本語の主語特性と多重照合理論-」『明海日本語』15, 41-51.
- 柴谷方良（1978）『日本語の分析-生成文法の方法-』大修館書店

- Ura, H. (1995). Checking theory and dative subject constructions in Japanese and Korean. *Journal of East Asian Linguistics*, 8(3), 223-254.
- Ueda, Y. (2003). Subject positions and derivational scope calculation in minimalist syntax: A phase-based approach. *Scientific Approach to Language (Kanda University of International Studies)*, 2, 189-215.
- Yamashita, H. (1997). The effects of word-order and case marking information on the processing of Japanese. *Journal of Psycholinguistic Research*, 26, 163–188.

付録

資料Ⅰ コーパス調査によるデ格主語文

実例	デ格主語文	コーパスの種類
1	香港の半導体メーカーでつくる香港電子業協会のK・B・チャン副会長らが...	出版・新聞
2	一か所に届けられた品物をグループで仕分けする作業を通じて...	出版・新聞
3	北朝鮮による拉致被害者の家族でつくる「家族連絡会」(■■■代表)は...	出版・新聞
4	塩野義製薬や大塚製薬など二十二社でつくる「タンパク質構造解析...	出版・新聞
5	「...自分で作ったもので遊ぶのは、いつもとちょっと違うような気がします」	出版・新聞
6	初めて自分で巻いてみた。	出版・新聞
7	「安楽死」を自分の生き方を自分で決める市民の自己決定の思想と結びつけている。	出版・新聞
8	「語らないという誓いを自分自身でたてていた」という。	出版・新聞
9	「スーツだよ。生地はいい。たぶんジム・トンプソンで仕立てた。	出版・新聞
10	こうした中、全国の若手司法書士でつくる全国青年司法書士協議会...	出版・新聞
11	十六団体でつくる「憲法守れ・有事法制の発動を許すな！広島共同センター」...	出版・新聞
12	十一の市民グループでつくる「有事立法はイケン（違憲）！広島県市民連絡会」...	出版・新聞
13	「全員で誓い合った通りになった」と興奮気味に話した。	出版・新聞
14	アジア、オセアニア各国から集まった8人の選手で競った。	出版・新聞
15	「みんなで助け合いながら、子育てのできる世の中になってほしい」と呼びかけた。	出版・新聞

- 16 昔のように自分が作ったものを自分で売るとな喜びは 出版・新聞
薄れてしまった。
- 17 「金融庁から受けた説明を当方でまとめた」とするコメ 出版・新聞
ントを発表し...
- 18 自分で決めようとするのではなく、チームメートを信頼 出版・新聞
する。
- 19 道北全域の自治体や経済団体でつくる留萌港フェリー就 出版・新聞
航促進道北連合会...
- 20 「伝統の灯」を地域で守っていこう、と宮古上布の継承 出版・新聞
について...
- 21 おやつをご自身で作ることもできる。 出版・新聞
- 22 豊田加茂合併協議会、佐屋町、佐織町、立田村、八開村 出版・新聞
でつくる海部西部... 協議会
- 23 「自分の安全は自分で守ろう地域の安全は地域自らで守 出版・新聞
ろう」
- 24 「自分の安全は自分で守ろう地域の安全は地域自らで守 出版・新聞
ろう」
- 25 みずほフィナンシャルグループで作る、みずほ教育福祉 出版・新聞
財団（東京）がこのほど...
- 26 自分で働いて情報をゲットする、これが「プル」。 出版・新聞
- 27 要するに、自分で働くか、待っているかという違いを示 出版・新聞
す言葉なのだ。
- 28 来年度から一学級を複数教員で教えるチーム・ティーチ 出版・新聞
ングの中で活用していく。
- 29 小学生で自分でやりたくてやっている子は少なく、全国 出版・新聞
大会に行きたいなど動機が...
- 30 「今回の賞はチームでもらったと思っている...」 出版・新聞
- 31 暗い中、家族で探し回りましたが発見できませんでした 出版・新聞
た。
- 32 2月十七日の理事会で決める。 出版・新聞
- 33 栽培していたのは市職員でつくる屋上緑化友の会のメン 出版・新聞
バーら。

- 34 宮城県と関係二十市町でつくる「みやぎ沿岸県土軸形成推進協議会」は、小学生の親子... 出版・新聞
- 35 東広島市と賀茂郡五町でつくる賀茂広域行政組合は四月一日から、事業系ごみの処分... 出版・新聞
- 36 自分で書き換えよう。透明感のある歌声のエンヤのCDをかけながら... 出版・新聞
- 37 「...これからもクラブの決定は会員でやっていく」などと、これまでの主張を繰り返した。 出版・新聞
- 38 イラク再建を国際社会全体で取り組む契機にしたい意向が働く。 出版・新聞
- 39 政権全体で取り組む決意を示した。 出版・新聞
- 40 汁気の多い料理はできあがりを自分で見極める2目盛り以上の材料を入れない3何度か... 出版・新聞
- 41 地域で守る住民ら“安心隊”を発足パトロールや声かけ行う 出版・新聞
- 42 住民でつくる大原地域環境美化推進協議会（佐竹和男会長）が毎年三月と九月... 出版・新聞
- 43 「...自分で作っても、同じような結論になった」と話しているという。 出版・新聞
- 44 辛夷やレンギョウや水仙などひなが自分で植えたものも少なくなかった。 出版・新聞
- 45 精華大通沿いに立つマンションの住民でつくる。 出版・新聞
- 46 谷選手は「大会後にふたりで話し合う。今はそっとしておいてほしい」と... 出版・新聞
- 47 セーフガードや対抗措置は、WTOで定めた手続きに沿った各国の駆け引きで... 出版・新聞
- 48 リクルートグループで買い取る方向で調整に入った。 出版・新聞
- 49 法律の専門家や教員でつくる同委員会が法的視点、実効面などを検証する。 出版・新聞
- 50 この後、「みんなで守ろう交通安全」と声をそろえ、運動をアピールした。 出版・新聞
- 51 「自分の畑は自分で守る。警察には頼らない」と約二千平方メートルを守り抜く覚悟。 出版・新聞

52	まず、自分の健康は <u>自分で</u> 守るという固い決意を持たなければならぬ。	出版・新聞
53	負いきれない貧困や病気、失業、高齢化といったリスクを、 <u>社会全体</u> で支え合う仕組みだ。	出版・新聞
54	<u>上川管内鷹栖町と農家約四百戸</u> でつくる同町中山間事業推進協議会（原直会長）は...	出版・新聞
55	同障害を抱える <u>本人や家族</u> でつくる、脳外傷友の会コロポックル（札幌）は...	出版・新聞
56	「人生で悩んでいる時期があつて、それを <u>自分で</u> 乗り越えてきた。」	出版・新聞
57	<u>地元の約百五十世帯</u> でつくる往還町自治会長に就任。	出版・新聞
58	<u>同じ境遇の人々</u> でつくる家族会「あかつき会」に入り、癒やされた。	出版・新聞
59	<u>学校と、地域</u> でつくる同事業実行委員会が連携しビオトープ委員会をつくり...	出版・新聞
60	通勤の電車内だったり、 <u>家族</u> で食べに行ったラーメン店にいたことも。	出版・新聞
61	定期点検の時期が来れば車が <u>自分で</u> 教えてくれる、まさに女性五百人の意見が...	出版・新聞
62	<u>自分で</u> 乗り込んで行きはりました。	出版・新聞
63	出演は、 <u>島津亜矢、森進一、田川寿美、氷川きよし、堀内孝雄</u> ほかでおくる。	出版・新聞
64	貧しい人々の救済に生涯をささげた「マザー・テレサ」にならって、 <u>自分で</u> 付けたそう。	出版・新聞
65	表現方法を模索するのを、 <u>みんな</u> で認め合おう。	出版・新聞
66	卒業証書 <u>自分で</u> 作ろう 中央区北の工房のまち	出版・新聞
67	「認知症を学び <u>地域</u> で支えよう」	特定目的・広報紙
68	「認知症の人と家族を <u>地域</u> で支えよう」	特定目的・広報紙
69	「 <u>みんな</u> でつくろう犯罪のないまち世田谷」	特定目的・広報紙

70	<u>自分で</u> 考えた柄を布に染めます。	特定目的・広報紙
71	わらびマンゴーを <u>親子で</u> 作る講座	特定目的・広報紙
72	<u>みんなで</u> 祝おう開湯年百五十年	特定目的・広報紙
73	<u>市民サービスグループで</u> 受け付けています。	特定目的・広報紙
74	<u>地域全体で</u> 支えていくことが大切です。	特定目的・広報紙
75	防犯の基本は、「自分の身は <u>自分で</u> 守る」を心がけることといわれます。	特定目的・広報紙
76	<u>みんなで</u> 支える介護保険～介護保険利用の手続きについて、お知らせします。	特定目的・広報紙
77	そのような不安や負担を <u>社会で</u> 支えあうのが介護保険です。	特定目的・広報紙
78	お米を <u>自分で</u> 育てて食べてみませんか。	特定目的・広報紙
79	戦争のない平和な社会の実現を <u>みんなで</u> 考えましょう。	特定目的・広報紙
80	<u>みんなで</u> つくろう犯罪のないまち世田谷	特定目的・広報紙
81	【 <u>みんなで</u> 集まればうちエコ！】	特定目的・広報紙
82	<u>自分で</u> できる肩こり、頭痛に効くツボを教えます。	特定目的・広報紙
83	<u>みんなで</u> 守る安全で安心なまちづくり	特定目的・広報紙
84	<u>みんなで</u> 守る安全で安心なまちづくり	特定目的・広報紙
85	<u>地域で</u> 支えあって 災害に備える 災害はいつ発生するかわかりません。	特定目的・広報紙
86	「家族で話し合っ合言葉を決めておくなどの対策をしておくことが大切」	特定目的・広報紙
87	<u>有志の児童で</u> つくる「毛利台U F O, S」(会員数四十五人)	特定目的・広報紙

88	「前に踏み出す力」「考え抜く力」「 <u>チームで働く力</u> 」を唱えています。	特定目的・広報紙
89	自分の身は <u>自分で</u> 守るという意識を持って、積極的に周囲の人とコミュニケーションをとる...	特定目的・広報紙
90	緊急課題の基礎知識 i n 塩田公民館 <u>自分で</u> 考えるための情報は、自分で手に入れる時代です。	特定目的・広報紙
91	皆さんの医療を国民 <u>みんな</u> で支える制度です。	特定目的・広報紙
92	<u>国民みんな</u> で支えるとは？	特定目的・広報紙
93	「青少年 <u>地域</u> で守ろう育てよう」	特定目的・広報紙
94	規則正しい食生活を、 <u>家族みんな</u> で心がけましょう。	特定目的・広報紙
95	地域のために地域の人 <u>みんな</u> で支える地区総合型スポーツクラブに、是非ご参加ください。	特定目的・広報紙
96	税額計算などを <u>自分で</u> 行う必要がありませんので、大変便利です。	特定目的・広報紙
97	確定申告書は <u>自分で</u> 書いて郵送でどうぞ！	特定目的・広報紙
98	(二十代女性)・ <u>地域全体</u> で取り組むことで大きな成果が得られると思う。	特定目的・広報紙
99	第1回演奏会～ <u>みんな</u> で楽しむお琴～	特定目的・広報紙
100	<u>みんな</u> で止めよう地球温暖化電気カーペットは最低限の広さで...	特定目的・広報紙
101	「地域の子どもは <u>地域</u> で育てる」	特定目的・広報紙
102	<u>みんな</u> で守るみんなのまち！	特定目的・広報紙
103	《 <u>みんな</u> で取り組むべきこと》	特定目的・広報紙
104	「 <u>自分で</u> 守り、つくる」を実践	特定目的・広報紙
105	「自分の健康は <u>自分で</u> 守り、つくる」	特定目的・広報紙

106	きれいな川をみんなで守る「霧島市天降川等河川環境保全条例」が4月1日から施行	特定目的・広報紙
107	「... <u>みんなで守って</u> いきたいです」と話していました。	特定目的・広報紙
108	読書活動で、1年間に1万冊の本を読むことを目標に掲げ <u>全校で</u> 取り組みました。	特定目的・広報紙
109	<u>みんなで</u> 読もう1万冊	特定目的・広報紙
110	新鮮ないちごを <u>自分で</u> 摘み取ることができるのが観光農園。	特定目的・広報紙
111	子どもの新しい生活への希望や夢について <u>家族みんなで</u> 話し合ひましょう。	特定目的・広報紙
112	地域の子どもは <u>地域で</u> 育てる環境づくりを進めましょう。	特定目的・広報紙
113	「 <u>みんなで</u> 創ろう犯罪のない”ふるさと手稲“」宣言に基づく取り組みを支援します。	特定目的・広報紙
114	確定申告書は <u>自分で</u> 書いてお早めに	特定目的・広報紙
115	食育を学校・園で実践する <u>自分で</u> 作って	特定目的・広報紙
116	<u>地域で</u> 見守る■■■■通信員	特定目的・広報紙
117	【 <u>親子で</u> 作ってあそぼう…2歳児～就学前対象】	特定目的・広報紙
118	一万八千九十二世帯 <u>みんなで</u> 広げよう！！	特定目的・広報紙
119	元気に学校に通う子どもたちを <u>地域のみんなで</u> 守りたい	特定目的・広報紙
120	人は、夢を実現するために、何が必要になるのかを、 <u>みんなで</u> 話し合ってみました。	特定目的・広報紙
121	やさしい気持ちを <u>みんなで</u> 持つことが大切—障がい者や高齢者の疑似体験に参加して...	特定目的・広報紙
122	何十年後、 <u>みんなで</u> 集まったら、プロのオーケストラ？	特定目的・広報紙
123	～ <u>みんなで</u> 考えよう 環境にやさしいくらし～	特定目的・広報紙

124	医療を <u>国民全体</u> で支える仕組みになっています。	特定目的・広報紙
125	高齢者の医療を <u>皆</u> で支える仕組みになっています。	特定目的・広報紙
126	土砂災害防止月間 <u>みんな</u> で防ごう土砂災害	特定目的・広報紙
127	<u>自分で</u> 作った物を身に付けると心が弾みますね。	特定目的・広報紙
128	私は、常々、 <u>地域</u> で考えて地域で解決するのが自治の基本である、と考えています。	特定目的・広報紙
129	ヨガや健康体操、 <u>親子</u> で楽しめる親子体操など「健康」をテーマと...	特定目的・広報紙
130	健康を手に入れるために <u>自分で</u> できることに取り組んでください。	特定目的・広報紙
131	6月十日（火）～十二日（木）のうち <u>家族</u> で決めた	特定目的・広報紙
132	<u>みんな</u> で取り組む 地球温暖化防止国民的プロジェクト	特定目的・広報紙
133	会場まで <u>自分で</u> 通える二十五人。	特定目的・広報紙
134	「地域のことは <u>地域</u> で決めて実行する」ための区民会議第二期が始まります。	特定目的・広報紙
135	<u>地域</u> で取り組むきっかけとして、お気軽にご利用ください。	特定目的・広報紙
136	「いま、まちの中で何がバリアーになっているのかを <u>みんな</u> で確かめたらどうか」。	特定目的・広報紙
137	また、今回の大会では <u>河合町の有志</u> でつくる楽団ニューコメッツが...	特定目的・広報紙
138	町おこしに活用しようと <u>住民</u> でつくる実行委員会が主催。	特定目的・広報紙
139	巻き寿司に挑戦旭ヶ丘地区の <u>高齢者やサポーター</u> で作る水曜会が...	特定目的・広報紙
140	紙すき教室 <u>自分で</u> 作ったエコはがき、だれに送ろうかな	特定目的・広報紙
141	昨年1年間の所得と税額を正しく計算し、 <u>自分で</u> 書いて早めに提出してください。	特定目的・広報紙

142	<u>自分で</u> 打ったそばを、その場で試食できます。	特定目的・広報紙
143	「地域の安全は <u>地域で</u> 守る」	特定目的・広報紙
144	懐かしい思い出の歌を <u>みんなで</u> 歌おう	特定目的・広報紙
145	<u>みんなで</u> 止めよう地球温暖化	特定目的・広報紙
146	<u>自分で</u> 食べることの楽しさ食への関心を養う	特定目的・広報紙
147	業者登録申請を、 <u>市役所契約検査課</u> で受け付けますので...	特定目的・広報紙
148	<u>自分で</u> 作った野菜だと、野菜嫌いな子どもでもおいしく食べられるといいます。	特定目的・広報紙
149	出会いを求める独身者からの相談に <u>ボランティア</u> で応じ...	特定目的・広報紙
150	各都道府県選抜チームで争う「第十六回 J O C ジュニアオリンピックカップハンドボール大会」	特定目的・広報紙
151	「生活の基本を大切に、自分のことは <u>自分</u> でする」という精神を大事にしながら...	特定目的・広報紙
152	このまちを <u>みんなで</u> 創っていききたい鹿児島県内で初めてのマニフェスト検証大会	特定目的・広報紙
153	<u>町全体</u> で取り組めば大きな効果が得られるはず。	特定目的・広報紙
154	<u>東京農工大学の学生</u> で作る「耕地の会」は、農業・農村、山の暮らしの知恵を学ぼうと...	特定目的・広報紙
155	K O F U C I T Y 甲府市自治基本条例 <u>みんなで</u> 進めるまちづくり	特定目的・広報紙
156	災害に備えて家族で、 <u>地域で</u> 話し合ってみることから始まるものなのです。	特定目的・広報紙
157	「自分の健康は <u>自分</u> で守る」という意識づけからも若干の負担をいただくほうが...	特定目的・広報紙
158	さまざまな活動を <u>ボランティア</u> で行っています。	特定目的・広報紙
159	<u>地域で</u> 支える子育て講演会	特定目的・広報紙

160	「...地域の環境は <u>地域</u> で守りたいですね」と意気込みを話してくれました。	特定目的・広報紙
161	<u>みんなで</u> 守ろう「三ない運動」 1 政治家は有権者に寄附を贈らない！	特定目的・広報紙
162	～ <u>みんなで</u> つくろう安全・安心のまち郡山～	特定目的・広報紙
163	<u>みんなで</u> 減らそう！	特定目的・広報紙
164	～ <u>みんなで</u> 減らそうCO2展～	特定目的・広報紙
165	活動的な生活を目指して・身の回りの事は <u>自分で</u> しましょう	特定目的・広報紙
166	大豆を育て、豆腐やみそを <u>自分で</u> 作ってみませんか。	特定目的・広報紙
167	<u>皆で</u> 知ろう税の大事さ	特定目的・広報紙
168	「認知症高齢者を <u>地域</u> でささえるために」講師	特定目的・広報紙
169	<u>みんなで</u> つくる健康のまち所沢！	特定目的・広報紙
170	いのちを守るために、 <u>みんなで</u> つながりあっていこう	特定目的・広報紙
171	自殺に追い込まれていくいのちを、 <u>みんなで</u> つながりながら守っていこう	特定目的・広報紙
172	「必要であるならば <u>市</u> で行うべきか？民間に任せてもいいのではないか？」	特定目的・広報紙
173	イベントなど7事業 <u>みんなで</u> 守る安全で安心なまちづくり	特定目的・広報紙
174	家庭を <u>地域</u> で支える区内の未就学児（0～5歳）のうち、約半数は家庭...	特定目的・広報紙
175	<u>みんなで</u> 守る安全で安心なまちづくり	特定目的・広報紙
176	月曜に <u>みんなで</u> うたいましょう	特定目的・広報紙
177	災害から <u>地域</u> で守る高齢者 障害者 名簿に登録を市は、災害時に自力で...	特定目的・広報紙

178	<u>地域</u> で助け合って避難支援体制を作ります。	特定目的・広報紙
179	独立行政法人平和祈念事業 <u>特別基金</u> で受け付けています。	特定目的・広報紙
180	点検も <u>自分</u> で行うことができます。	特定目的・広報紙
181	<u>全校</u> で取り組んでいます。	特定目的・広報紙
182	【スローガン】「 <u>みんな</u> でつくろう安心の街」	特定目的・広報紙
183	<u>家族</u> で守る我が家の防犯ルールを決めましょう。	特定目的・広報紙
184	ゴミは、 <u>各自</u> で持ち帰ってください。	特定目的・広報紙
185	「環境文化の創造～ひとりではじめ、 <u>みんな</u> で進める環境づくり～」をテーマに...	特定目的・広報紙
186	子どもたちが、心身ともに豊かに成長できるように、 <u>地域全体</u> で支えましょう。	特定目的・広報紙
187	消防団の <u>OB</u> でつくっている組織もあります。	特定目的・広報紙
188	災害発生時の対処を <u>家族</u> で話し合ったり、非常持ち出し袋を用意したりして...	特定目的・広報紙
189	職場の <u>同僚</u> でつくったチームなど計四十七チーム、約二百八十人が参加し...	特定目的・広報紙
190	<u>和知地区北部五集落</u> でつくる地域振興組織「北部振興会」が十二月九日...	特定目的・広報紙
191	現在、 <u>堺区役所職員</u> で取り組んでいるC S市民満足度運動として...	特定目的・広報紙
192	「 <u>灘区みんな</u> でつくる共生社会」展示会の実施	特定目的・広報紙
193	提案自体は住民側から、内容のハード面は <u>行政側</u> で行ったが...	特定目的・広報紙
194	<u>みんな</u> で防ごう 土砂災害毎年6月は「土砂災害防止月間」	特定目的・広報紙
195	ゴミ収集場所は、 <u>各地区</u> で話し合って決めていただいており...	特定目的・広報紙

196	その維持管理も <u>各地区</u> で行っていただいています。	特定目的・広報紙
197	自然保護には <u>会社全体</u> で取り組んでいます。	特定目的・広報紙
198	夫を亡くした長女のかたを <u>みんなで</u> 慰めようと湯治場に 来たのが初めてだった...	特定目的・広報紙
199	<u>親子</u> で作るデコデン小物日時 7月三十日(水) 午前十 時～正午。	特定目的・広報紙
200	なお、 <u>自分で</u> できない場合は、造園業者や害虫駆除業者 などにご相談ください。	特定目的・広報紙
201	その後、実際によくまわるように、 <u>自分で</u> 考えた風車を 作ってみました。	特定目的・広報紙
202	また、 <u>自分で</u> 作った風車を家に持ち帰り...	特定目的・広報紙
203	小中学校は、 <u>各学校</u> で取りまとめます。	特定目的・広報紙
204	小中学校は、 <u>各学校</u> で取りまとめます。	特定目的・広報紙
205	これは、 <u>市</u> で行っているさまざまな行政サービスの取り 組み方や...	特定目的・広報紙
206	道路や河川、公園、広場など <u>みんなで</u> 使う場所をきれい にするには...	特定目的・広報紙
207	介護を <u>社会全体</u> で支え合う制度として定着するとともに...	特定目的・広報紙
208	駆除する場合は次の方法を参考に、注意して <u>各自</u> で行っ てください。	特定目的・広報紙
209	家族みんなの生活を <u>社会全体</u> で守ります。	特定目的・広報紙
210	個別接種医療機関に予約し、 <u>保護者同伴</u> で受けてくださ い。	特定目的・広報紙
211	K O F U C I T Y 甲府市自治基本条例 <u>みんなで</u> 進める まちづくり	特定目的・広報紙
212	<u>3世代</u> でふれあう休日を楽しんでいました	特定目的・広報紙
213	<u>農協女性部</u> の有志でできた、J A 東郷さわやかさんとい うグループがあります。	特定目的・広報紙

214	<u>みんなで</u> 話し合って、互いに理解を深めましょう。	特定目的・広報紙
215	市内に在住か在勤、通学している人が、 <u>十人以上で</u> つくる団体	特定目的・広報紙
216	子どもはまちの宝物、 <u>みんなで</u> 見守っていきましょう	特定目的・広報紙
217	<u>みんなで</u> 支える制度に見直しを	特定目的・広報紙
218	健やかに成長し自立できるよう、 <u>社会全体で</u> 見守っていきましょう。	特定目的・広報紙
219	未来を担う子どもたちを <u>みんなで</u> 見守るために声かけで人と人とのつながりを...	特定目的・広報紙
220	中学生で「勉強する時間を <u>自分で</u> 決めて実行する」	特定目的・広報紙
221	<u>親子で</u> つくる水鉄砲と竹とんぼ	特定目的・広報紙
222	「子育てを <u>地域全体で</u> 支える仕組み」を作ろうとするものです。	特定目的・広報紙
223	スイートポテトを作って <u>みんなで</u> いただきました。	特定目的・広報紙
224	サークル「はっち」では、体にハンディをもった <u>仲間</u> で集まってものづくりをしています。	特定目的・広報紙
225	「 <u>自分で</u> 落としたごみは自分で拾う」という簡単なことでなくなります。	特定目的・広報紙
226	あらかじめ家庭での役割分担や決まりごとを <u>家族で</u> 話し合っておきましょう。	特定目的・広報紙
227	参加者は体調を整え、健康管理は <u>各自で</u> 行ってください。	特定目的・広報紙
228	体調管理は <u>各自で</u> 行ってください。	特定目的・広報紙
229	また、同協会は、「地域の子どもは <u>地域で</u> 守り育てる」をスローガンに掲げ...	特定目的・広報紙
230	確定申告、個人事業税、市・府民税申告のご案内—申告書は <u>自分で</u> 書いてお早め	特定目的・広報紙
231	膝や腰を痛めることが無いよう自分にあったものを <u>自分で</u> 選ぶ必要があります。	特定目的・広報紙

232	飲食店の水道設備に関しては、 <u>当方</u> で行います。	特定目的・広報紙
233	皆さんが暮らしているまちをより住みよいものにするために、 <u>地域</u> で支え合う一員として...	特定目的・広報紙
234	農村環境を <u>地域</u> で守ろう	特定目的・広報紙
235	「 <u>自分</u> でつくろう朝ごはん」学校に行く前に、手軽な朝食をつくろう！	特定目的・広報紙
236	相手の指定した電話にかける前に、番号を <u>自分</u> で調べる。	特定目的・広報紙
237	<u>自分</u> でする勉強といえば、プロの対局の棋譜を見て、自分で並べ直して考える	特定目的・広報紙
238	プロの対局の棋譜を見て、 <u>自分</u> で並べ直して考えると...	特定目的・広報紙
239	<u>各自</u> で切り離し名前を確かめてから、投票所へ持参してください。	特定目的・広報紙
240	災害に強いまちづくりに <u>みんな</u> で取り組むため、地域の防災訓練に積極的に参加しましょう。	特定目的・広報紙
241	「 <u>みんな</u> で作って食べるのが楽しかった」など好評です。	特定目的・広報紙
242	<u>ご自身</u> でやせていると感じていて...	特定目的・広報紙
243	また、少子・高齢社会を <u>地域</u> で支え合うため、協働によるまちづくりを進めました。	特定目的・広報紙
244	またその1カ月後 <u>4年生全体</u> で合わせました。	特定目的・広報紙
245	3年前から <u>1年生全員</u> で取り組んでいます。	特定目的・広報紙
246	機能またはヒト免疫不全ウイルスによる免疫の機能に障害があるとして <u>国</u> で定める人...	特定目的・広報紙
247	<u>市</u> で行う集合注射の日程表が、今月号の広報紙に折り込まれています。	特定目的・広報紙
248	ヨモギは5月に味工房で使う一年分を会員 <u>みんな</u> で摘み採って冷凍保存。	特定目的・広報紙
249	ごみは <u>各自</u> で持ち帰っていただくようお願いします。	特定目的・広報紙

250	平時から「 <u>自分で</u> できること」	特定目的・広報紙
251	平時から「自分でできること」「 <u>家族で</u> できること」	特定目的・広報紙
252	自助＝ <u>自分で</u> できることは自分で片付け、補修、自宅の建て替え...	特定目的・広報紙
253	家庭 学校 <u>地域で</u> つなげよう！	特定目的・広報紙
254	<u>地域で</u> 考え、取り組まなければならない問題がたくさんあります。	特定目的・広報紙
255	あおばな講座 <u>親子で</u> 作ろう	特定目的・広報紙
256	認知症について学び、 <u>地域で</u> 支え合い、安心して暮らせるまちづくりを考えてみませんか。	特定目的・広報紙
257	<u>それらの人</u> でつくるおおむね5人以上のグループなど...	特定目的・広報紙
258	<u>みんなで</u> 支えあうまちづくり	特定目的・広報紙
259	<u>みんなで</u> 支え合おう介護保険料の納付を！	特定目的・広報紙
260	<u>地域で</u> 支え合うことの大切さを学ぶ地域リハビリテーションセミナー	特定目的・広報紙
261	「... <u>自分自身で</u> できる食育プランを考えてみましょう」と保健所健康課の■■■■さん。	特定目的・広報紙
262	親子工作教室「 <u>親子で</u> 作る風船スライムとスライム時計」	特定目的・広報紙
263	<u>みんなで</u> 作り上げる「竹燈夜」を楽しみましょう！	特定目的・広報紙
264	国民健康保険・後期高齢者医療制度（長寿医療制度）は <u>みんなで</u> 支えあう制度です。	特定目的・広報紙
265	<u>加入者自身で</u> 積み立てていく「積み立て方式」で、財政上安定した制度です。	特定目的・広報紙
266	申告書は <u>ご自分で</u> 書いて、できるだけ郵送等で税務署へ提出してください。	特定目的・広報紙
267	生き物が生きていける環境を <u>みんなで</u> 守ろう山田区環境保全	特定目的・広報紙

268	<u>みんなで</u> 広げよう心の輪ボランティア活動を紹介する「ボランティアフェスタなかがわ二千八」	特定目的・広報紙
269	複式学級とは、 <u>国</u> で定める学級編成基準に照らして、児童生徒が少ないために...	特定目的・広報紙
270	シルバー人材センター事業の基本理念自主 <u>自分で</u> 考える自立 <u>自分で</u> 行動する共働	特定目的・広報紙
271	市債の状況 <u>市</u> で行う各種事業は、納めていただいた税金や、国・県からの補助金など...	特定目的・広報紙
272	一みんなのまちを <u>みんな</u> でつくろうー	特定目的・広報紙
273	A <u>自分で</u> 作った紙袋も使えます。	特定目的・広報紙
274	<u>みんなで</u> 作った景観マップ	特定目的・広報紙
275	<u>みんなで</u> 選んだよりすぐりの景観を紹介	特定目的・広報紙
276	今まで以上に温暖化防止のために <u>家族全員</u> で取り組んでいく必要があると感じました。	特定目的・広報紙
277	「わが家のエコアイデア」を考え <u>家族</u> で取り組むようになったということです。	特定目的・広報紙
278	自宅周辺の危険箇所、避難場所や避難する道順について <u>家族</u> で話し合しましょう。	特定目的・広報紙
279	秋には、 <u>自分で</u> 咲かせたコスモスの花摘みができます。	特定目的・広報紙
280	表具、運搬、展示をすべて <u>自分自身</u> で行っています。	特定目的・広報紙
281	具体的な保険料の額は <u>広域連合</u> で定めます（保険料試算表参照）。	特定目的・広報紙
282	皆さんの防犯活動を支援したり、高齢者を地域 <u>みんな</u> で見守る取組をお手伝いしたりし...	特定目的・広報紙
283	<u>みんなで</u> 取組むリサイクルリサイクル率3年連続全国1位	特定目的・広報紙
284	1年生も、それぞれ <u>自分で</u> やっています。	特定目的・広報紙
285	幼時より袴の紐は <u>自分で</u> 結ばせ、冬でも薄着に裸足の生活で柔弱無気力に陥らないように...	特定目的・広報紙

286	<u>みんなで取り組む省エネルギー</u> いま、始めなければ…	特定目的・広報紙
287	そして、 <u>自分で</u> 考える力、判断できる力を養ってほしい と思っています。	特定目的・広報紙
288	親ができない事は <u>自分で</u> やってきたので自立にもつなが ったと思います。	特定目的・広報紙
289	「自分の身は <u>自分で</u> 守る」という危機意識は大切です が…	特定目的・広報紙
290	問題は困難を <u>自分で</u> 乗り越える力を身につけるチャンス です。	特定目的・広報紙
291	以下の対策を家庭や <u>地域で</u> 心がけ、放火火災を撲滅しま しょう。	特定目的・広報紙
292	～ <u>みんなで</u> つくる伊勢のまち～	特定目的・広報紙
293	わたしたちは、「 <u>みんなで</u> 助け合って、豊かで自立した 生活を続けていけるように…」と願い…	特定目的・広報紙
294	参加者たちは、 <u>みんなで</u> 作ったクッキーを食べながら…	特定目的・広報紙
295	1本の苗木を <u>家族で</u> 植えました。	特定目的・広報紙
296	<u>丹波地区全体で</u> 行うことを決定し、二十日から監視活動 が行われていました。	特定目的・広報紙
297	<u>役員で</u> 話し合って懇談会のあり方を見直していったので す。	特定目的・広報紙
298	環境というものを地域の <u>みんなで</u> つくっていかないとい けない…	特定目的・広報紙
299	Q <u>自分で</u> 作った紙袋でミックスペーパーを出せるの？	特定目的・広報紙
300	美しい坊勢の海を <u>親子で</u> 守って行ってね。	特定目的・広報紙
301	それぞれの <u>地域で</u> 抱える課題等について市民の皆さんと 話し合いました。	特定目的・広報紙
302	パスポートの申請受付・交付を <u>市民課で</u> 行います。	特定目的・広報紙
303	「…いつもスーパーで買っていた豆腐よりも <u>自分で</u> つく った豆腐は味が濃くておいしい」	特定目的・広報紙

304	<u>十一団体</u> でつくる「ミャンマーサイクロン、中国・四川大地震災害救援募金活動実行委員会」	特定目的・広報紙
305	側面には遠野高二年の■■■■さんの標語「 <u>みんなで</u> 守ろう　きれいな遠野」	特定目的・広報紙
306	「...米沢が誇るすばらしいシンボルとして、 <u>地区全体</u> で守っていきたい」	特定目的・広報紙
307	<u>みんなで</u> 支える老人保健制度～	特定目的・広報紙
308	平成二十年度は <u>みんなで</u> 出したアイデアを実現するために...	特定目的・広報紙
309	思わぬトラブルに巻き込まれないように、自分の大事な情報は <u>自分で</u> 守りましょう	特定目的・広報紙
310	門出を <u>みんなで</u> 祝いました	特定目的・広報紙
311	<u>地域</u> で見守り支え合いセミナー誰もが気軽に助け上手・助けられ上手に	特定目的・広報紙
312	区役所がより身近な <u>地域</u> で取り組める介護予防の事業案を企画。	特定目的・広報紙
313	この教室では、水中歩行の基本や、今後も <u>自分で</u> 楽しめるメニューを、2回に分けて体験します。	特定目的・広報紙
314	食中毒予防キャンペーン～ <u>みんなで</u> 防ごう！	特定目的・広報紙
315	<u>親子</u> でふれあいながら楽しく体を動かしましょう	特定目的・広報紙
316	<u>自分で</u> 作ったオリジナルたこを空に上げてみよう！	特定目的・広報紙
317	<u>みんなで</u> つくる景観計画	特定目的・広報紙
318	大芝の湯松の緑を <u>みんなで</u> 守ろう～松くい虫前線接近中～	特定目的・広報紙
319	展示作業および二十三日（日）午後6時～9時の撤収作業を <u>自分で</u> 行ってください	特定目的・広報紙
320	高齢者が、自分の健康は <u>自分で</u> 守り、いつまでも介護を必要とせず...	特定目的・広報紙
321	いざというときに対応できるよう、あらかじめ <u>家族</u> で話し合っておきましょう。	特定目的・広報紙

322	観光客の皆さんに楽しんでもらうために、 <u>みんなで</u> できることを一緒に考えませんか。	特定目的・広報紙
323	<u>自分で</u> 作った草履は一層気持ちよいことでしょうね。	特定目的・広報紙
324	「さらに高齢化が進むこれからは、地域を <u>みんなで</u> 助け合いながら守っていくことが大切です。	特定目的・広報紙
325	「 <u>みんなで</u> 進めるまちづくり」の巻広報推進員が...	特定目的・広報紙
326	三才では、 <u>自分で</u> 食べることができ、四才になると半分以上のことができるようになって...	特定目的・広報紙
327	五才では、ほとんど <u>自分で</u> できていました。	特定目的・広報紙
328	<u>青年部と窯元7社</u> で取り組みました。	特定目的・広報紙
329	第3回のオープニングを飾る特別企画 <u>みんなで</u> つくろう！	特定目的・広報紙
330	「アートおみこし」参加無料こどもフェスティバルのシンボルを <u>みんなで</u> 作ろう！	特定目的・広報紙
331	<u>個人</u> でできるごみ減量についてもっと考えてみませんか。	特定目的・広報紙
332	大きなツリーを <u>自分で</u> 飾り付けてみませんか。	特定目的・広報紙
333	<u>親子</u> で作るミニマイコンカー製作講習会	特定目的・広報紙
334	<u>市</u> で行っている仕事が、条例の趣旨から外れていないかを点検するんだ	特定目的・広報紙
335	毎日の <u>自分で</u> 行う歯磨きで落ちない歯の汚れ（バイオフィルム）...	特定目的・広報紙
336	新治運動公園の一般利用はスポーツ <u>振興課</u> で受け付けます。	特定目的・広報紙
337	朝の読書活動に <u>全校生徒</u> で取り組むなど、静と動のメリハリで心を鍛え...	特定目的・広報紙
338	<u>地域</u> で抱える課題を自ら解決していく体制・仕組みを整えながら、連帯と活力躍進する...	特定目的・広報紙
339	入場券は、 <u>壬生中央公民館、稲葉・南犬飼出張所、町施設振興公社</u> で取扱います。	特定目的・広報紙

340	介護保険制度は、家族の介護負担を <u>社会全体</u> で支え合う仕組みです。	特定目的・広報紙
341	宝物の1冊を <u>自分</u> で作ってみませんか。	特定目的・広報紙
342	介護保険制度は、介護を必要とする方を <u>社会全体</u> で支える仕組みです。	特定目的・広報紙
343	区は、子育てを <u>地域</u> で支える仕組みをつくるため...	特定目的・広報紙
344	～ <u>みんなで</u> 育てよう心も体もすこやかな児童・生徒～	特定目的・広報紙
345	<u>地球</u> で輝こう清瀬市民活動センター■講演会	特定目的・広報紙
346	～ <u>みんなで</u> つくろう安全で快適な道路～	特定目的・広報紙
347	<u>みんなで</u> 選ぼう！ “せやサイ君キャラクター”【投票期間】8月1日～三十一日	特定目的・広報紙
348	水中歩行の基本と受講後に <u>自分</u> で楽しみながらできるメニューを2回に分けてお教えします。	特定目的・広報紙
349	<u>自分</u> で切り取ると無効になります。	特定目的・広報紙
350	<u>みんな</u> でうたおう 時9月十三日（土）十：00～	特定目的・広報紙
351	着物を <u>自分</u> で着てみませんか。	特定目的・広報紙
352	市・県民税、所得税の申告は <u>自分</u> で書いてお早めに！！	特定目的・広報紙
353	「 <u>能登の経済塾</u> で培う人と環境ビジネス」	特定目的・広報紙
354	関するお問い合わせ及び申込書の配布は、 <u>親子</u> で楽しむ	特定目的・広報紙
355	広大な芝生広場や遊戯広場も設備してありますので <u>家族</u> で楽しめます。	特定目的・広報紙
356	「なくそう非行・ <u>地域</u> で育む青少年」をスローガンに...	特定目的・広報紙
357	内容 <u>自分</u> で捕まえたエサで魚釣りなど持ち物	特定目的・広報紙

358	～食べたいものを <u>自分で</u> 作る第1歩～	特定目的・広報紙
359	食べたいものや好きなものを <u>自分で</u> 作り、食べる楽しさを見つけましょう。	特定目的・広報紙
360	子育て中の親子などの孤立や閉じこもりを防ぎ、身近な <u>地域</u> で支え合うなど...	特定目的・広報紙
361	水澄む川を <u>みんな</u> でつくろう 内川・土居川まつり	特定目的・広報紙
362	「元気で活力あるまち、天理」を目指し、市民 <u>みんな</u> で創り上げる「天理な祭り」。	特定目的・広報紙
363	認知症を学び <u>地域</u> で支えましょう 県長寿社会課	特定目的・広報紙
364	本市の成人式は <u>新成人</u> でつくる実行委員会が、企画・立案から当日の運営まで担当しています。	特定目的・広報紙
365	市役所市民課または東郷町地域自治センター <u>住民生活課</u> で受け付けています。	特定目的・広報紙
366	「 <u>みんな</u> で育もう、地域の宝！」	特定目的・広報紙
367	「自分の身は <u>自分で</u> 守る」という意識をしっかりと持ち、大雨の時の注意・早めの避難をする	特定目的・広報紙
368	～地域の子どもを <u>みんな</u> で育てよう～	特定目的・広報紙
369	自分で落としたごみは <u>自分で</u> 拾う	特定目的・広報紙
370	<u>みんな</u> でつくる「社会を明るくする運動」	特定目的・広報紙
371	入場券は、 <u>壬生中央公民館、稲葉・南犬飼出張所、町施設振興公社</u> で取り扱います。	特定目的・広報紙
372	<u>実行委員会</u> で定める特別規則を守れる市内のチーム。	特定目的・広報紙
373	災害時には <u>地域</u> で助け合い、支え合うことだと思っています。	特定目的・広報紙
374	<u>みんな</u> で作ろうクリスマスケーキ：十二月十一日（木）午後1時三十分。	特定目的・広報紙
375	<u>G三十</u> でつくろう環境にやさしいまちづくり	特定目的・広報紙

376	<u>みんなで使おう</u> という多摩川プランを作るなど、さまざまな事業を進めています。	特定目的・広報紙
377	第3回区民会議 <u>地域</u> で取り組む環境対策	特定目的・広報紙
378	テーマは前回に引き続き「 <u>地域</u> で取り組む環境対策」。	特定目的・広報紙
379	募集する課題と事業のテーマは、地域の安全、 <u>地域</u> で取り組む子ども・子育て支援などです。	特定目的・広報紙
380	<u>地域</u> で取り組みやすい課題が何かを話し合い、協力して安全活動を行うことは...	特定目的・広報紙
381	安心・安全で元気なまちをつくるため、市民 <u>みんな</u> で取り組みましょう。	特定目的・広報紙
382	<u>みんな</u> でつくる、自然環境と共生する元気なまち	特定目的・広報紙
383	平成二十二年度の制定を目指して自治基本条例フォーラム～ <u>みんな</u> で語る自治基本条例～	特定目的・広報紙
384	障害のある人への心のバリアフリーが根付き、 <u>地域</u> で支え合えたらと願っています。	特定目的・広報紙
385	演題 「精神障害のある人を <u>地域</u> で支える」講師	特定目的・広報紙
386	<u>みんな</u> で広めよう！ ふるさとの輪ひとりひとりの思いやりが大きな子育て支援につながります。	特定目的・広報紙
387	「自分の命は <u>自分</u> で守る」ということが基本なのです。	特定目的・広報紙
388	そして、自分の命は <u>自分</u> で守るということを基本に考えてほしいのです。	特定目的・広報紙
389	地域の人たちが、 <u>みんな</u> でやろうと思うことをしていくのが大切です。	特定目的・広報紙
390	そして、困ったときは、 <u>みんな</u> で助け合えるような人間関係を作っておくことが大事なことです。	特定目的・広報紙
391	号◆特集／ <u>みんな</u> で取り組もう シティプロモーション！	特定目的・広報紙
392	内容 正月飾りのしめ縄を <u>自分</u> で作って楽しめます	特定目的・広報紙
393	<u>みんな</u> で守ろうみどり豊かなまち・地球	特定目的・広報紙

394	V o l . 1 <u>みんなで守ろう地球環境！</u>	特定目的・広報紙
395	内容 <u>親子で守ろう「歯の健康」</u>	特定目的・広報紙
396	平成十九年に <u>県</u> で行っている感染症流行予測調査で...	特定目的・広報紙
397	<u>みんなで</u> つくり上げる災害に強いまち～私たちの暮らしやまちを守るために～	特定目的・広報紙
398	これは、大原上田区の <u>区民の方</u> で作る「昭和会」の皆さんが...	特定目的・広報紙
399	お神酒や赤飯を持ち帰り、 <u>家族全員</u> でいただいて無病息災を祈ります。	特定目的・広報紙
400	<u>みんなで防ごう</u> 食中毒家庭でできる食中毒予防入門 6つのポイント 1 食品を購入する	特定目的・広報紙
401	そして、達成できた喜びを家族 <u>みんなで</u> 分かち合えるように...	特定目的・広報紙
402	手助けをしながら、 <u>自分で</u> 考えさせるようにしよう	特定目的・広報紙
403	小さな進歩も見落とさずほめよう <u>家庭・地域</u> で育てよう	特定目的・広報紙
404	母国語でのあいさつの披露やブラジルのサンバを <u>全員で</u> 踊りだすと...	特定目的・広報紙
405	世界に一つしかない作品を <u>親子</u> で作りませんか？	特定目的・広報紙
406	現在、 <u>広島地方裁判所尾道支部</u> で取り扱っている次の事件について...	特定目的・広報紙
407	4月から <u>尾道支部</u> で取り扱わなくなる民事執行事件	特定目的・広報紙
408	内容＝講演「 <u>みんなで広げよう大FUROSHIKI</u> 」 (講師＝元環境大臣・■■■■氏)	特定目的・広報紙
409	国民年金第3号被保険者といい、保険料を <u>個人</u> で納める必要はありませんし...	特定目的・広報紙
410	2日にあった歓迎式では、 <u>市民</u> でつくるプロ野球日向キヤンプ誘致活動の会などが...	特定目的・広報紙
411	「自分の健康は <u>自分で</u> 守る」は社会人のマナーです。	特定目的・広報紙

412	<u>みんなで始めよう</u> 1人、1日、1kg CO ₂ 削減運動	特定目的・広報紙
413	市民生活や消費生活に関する相談も随時、 <u>市民サービスグループ</u> で受け付けています。	特定目的・広報紙
414	「 <u>みんなで止めよう</u> 温暖化チーム・マイナス6%」のホームページ...をご覧ください。	特定目的・広報紙
415	<u>皆で話す</u> 「私の生活改善目標」	特定目的・広報紙
416	介護保険制度は、介護を <u>社会全体</u> で支えあうために創設された制度で...	特定目的・広報紙
417	生きがい <u>を世代で支える</u> 年金制度国民年金お問い合わせ市民課国民年金係	特定目的・広報紙
418	多様な個性を受け入れ、 <u>地域で支え合う</u> 温かい心をはぐくみ...	特定目的・広報紙
419	領収書・印鑑等を持参のうえ、町保険環境課 <u>国保医療係</u> で行います。	特定目的・広報紙
420	2カ月間を特別滞納整理期間として <u>市役所全体</u> で取り組みます。	特定目的・広報紙
421	<u>みんなで築こう</u> “さいたまの伝統と文化”	特定目的・広報紙
422	これまで保健福祉局高齢障害部 <u>保険年金課</u> で行っていた国民健康保険業務...	特定目的・広報紙
423	世代間パソコン体験「 <u>自分で撮った写真でカレンダー</u> を作ろう」	特定目的・広報紙
424	けがをしないように <u>みんなで</u> 見守りながら楽しんでいます。	特定目的・広報紙
425	職人から学ぶ講座 【 <u>親子で作る</u> 】各コース親子5組三十人	特定目的・広報紙
426	5子育て相談／育児相談・ <u>皆で</u> 話しませんか	特定目的・広報紙
427	〔抽選〕 <u>みんなで</u> 取り組む 地球にいいこと	特定目的・広報紙
428	第二、三回の区民会議での議論「 <u>地域で</u> 取り組む環境対策」を受け...	特定目的・広報紙
429	世界が認める安心・安全なまちへ <u>みんなで</u> つくるセーフコミュニティ	特定目的・広報紙

430	セーフコミュニティは、結果ではなく、 <u>みんなで</u> 取り組む過程が大切。	特定目的・広報紙
431	Q <u>個人</u> でできる取り組みもあるの？	特定目的・広報紙
432	困っている人がいたら手助けしたり、 <u>個人</u> でできることはたくさんあります	特定目的・広報紙
433	特集 <u>みんなで</u> つくった音楽劇光る汗と涙	特定目的・広報紙
434	委員からは、「住み慣れた地域で <u>みんなで</u> 暮らせる南区づくり事業に...	特定目的・広報紙
435	シンポジウム「 <u>みんなで</u> 減らしますレジ袋」	特定目的・広報紙
436	<u>消費者・事業者・行政</u> で話し合うシンポジウムを開催します。	特定目的・広報紙
437	シンポジウム「 <u>みんなで</u> 減らしますレジ袋」講師	特定目的・広報紙
438	<u>みんなで</u> つくる博物館の展示足羽山自然大図鑑～調査研究編～	特定目的・広報紙
439	第5回 <u>みんなで</u> 作ろう！！手作り絵本制作会	特定目的・広報紙
440	できることを <u>みんなで</u> 持ち寄ってみんなで世界にひとつの絵本を作しましょう。	特定目的・広報紙
441	<u>給食委員会</u> で調べた子どもたちの一番苦手な野菜のピーマンでこの取り組みをしました。	特定目的・広報紙
442	「自分の命は <u>自分で</u> 守る」「自分たちの地域は <u>みんなで</u> 守る」という考えのもと...	特定目的・広報紙
443	「自分の命は <u>自分で</u> 守る」「自分たちの地域は <u>みんなで</u> 守る」という考えのもと...	特定目的・広報紙
444	<u>地域</u> で話し合いましょう	特定目的・広報紙
445	<u>地域</u> で育つ地域の子供～区民の皆さんとの協働による住みよいまちづくり～	特定目的・広報紙
446	「 <u>地域</u> で育つ地域の子ども推進事業」の活動についてご紹介します。	特定目的・広報紙
447	基本理念「住民 <u>みんなで</u> つくる あたらしい時代の やさしくあたたかい 品格あるまちづくり」	特定目的・広報紙

448	<u>自分で</u> きづこう健康ライフ事業うたごえ喫茶「コーラス」	特定目的・広報紙
449	■■さんは大変お元気で、身の回りのことは <u>自分で</u> されておられるそうです。	特定目的・広報紙
450	地域包括支援センターの運営については、 <u>国で</u> 定められた予算の範囲内で...	特定目的・広報紙
451	「第六十五回尾道みなと祭」を、市民 <u>みんなで</u> 盛り上げていきましょう。	特定目的・広報紙
452	内容= <u>地域で</u> 支える認知症予防とネットワークについて	特定目的・広報紙
453	これからも <u>みんなで</u> 住み良いまちを築いていきます。	特定目的・広報紙
454	市長のほか、 <u>市民で</u> つくる「セントポール・長崎姉妹都市委員会」のメンバーら十一人。	特定目的・広報紙
455	市民企画講座「コーチング講座 <u>自分で</u> 作る理想の“私”」悩みなどを客観的に認め...	特定目的・広報紙
456	速く効果的な攻撃を仕掛けられるか、をチーム <u>全体で</u> 追い求める姿には...	出版・雑誌
457	<u>自分で</u> 作ったあんは、本当においしいものです。	出版・雑誌
458	たとえ形がふぞろいでも、 <u>自分で</u> 作る和菓子はいとおしく、虜になってしまいます。	出版・雑誌
459	職人の世界と思い込んでいましたので、練りきりまでもが <u>自分で</u> 作れることを知り...	出版・雑誌
460	渡辺さんとの仔細連絡を希望した—そして加藤さんと渡辺さんとの <u>相方で</u> 話し合いした結果...	出版・雑誌
461	亀井政調会長を、古賀幹事長との <u>コンビで</u> 封じ込めるてくれるのではと...	出版・雑誌
462	これからは、 <u>自分で</u> 考え、自分で決定する力を持つことが...	出版・雑誌
463	しかし、これから求められるのは、正解を <u>自分で</u> 作り出す力である。	出版・雑誌
464	受験エリートではなく、自分の足で立ち、 <u>自分で</u> 考えることのできる人物ということになる。	出版・雑誌
465	大切なところは、どうしても <u>自分で</u> やらないと気が済まんもんでね。	出版・雑誌

- 466 豆乳を温めながら自分でつくる“くみ湯葉”も楽しいっばい！ 出版・雑誌
- 467 十川を一軍に上げてしかも十九日の試合でいきなりスタメンで使った。 出版・雑誌
- 468 親子でできる「言葉のトレーニングの方法」をイラストで紹介。 出版・雑誌
- 469 お持ち帰りコラム簡単足真道みんなで揉めば、さらに健康増進！ 出版・雑誌
- 470 日本の農業・食料を今後どうしていくのか、国民全体で考えなければなりません。 出版・雑誌
- 471 わたしもメンバーの一人でした管内の専業農家の有志でつくる会でお話をうかがう機会が... 出版・雑誌
- 472 だからこそ、自分自身で見極めていくしかない。 出版・雑誌
- 473 意図的にグループで崩していくという戦いをしなければいけません。 出版・雑誌
- 474 デザインは自分で考える。 出版・雑誌
- 475 生地も自分で選んだ。 出版・雑誌
- 476 自分で選んでみたらどうもパツとしない…。 出版・雑誌
- 477 一たるみに関して、自分でできるケアはありますか。 出版・雑誌
- 478 料金の徴収をメルマガスタンド側でやってくれるので... 出版・雑誌
- 479 もちろん、自分で読むために買っている数も尋常ではないはずだ。 出版・雑誌
- 480 「...月だいたい二十万円ぐらいの稼ぎが個人でできる限界だと思います」と平野氏。 出版・雑誌
- 481 「ハウスメーカーで建てた」お宅拝見！ 出版・雑誌
- 482 柄は自分で取り付ける。 出版・雑誌
- 483 河合 ええ。だからちょっと誰かが頭を出すと、みんなで叩いたり、足を引っ張ったり。 出版・雑誌

- 484 自分で合わせたからといってピッタリだという保証はない。 出版・雑誌
- 485 「あのギター、自分で作ったんだって」 出版・雑誌
- 486 もう一度演技を自分でしなきゃいけないのに、演技はしたくない。 出版・雑誌
- 487 兄姉、姉妹で競って食べていたものが、淋しさから競う相手もなく食が進まなく... 出版・雑誌
- 488 「オワはなんだか小顔になったねって、みんなで言ってみました。 出版・雑誌
- 489 高校までは手許に置くが、その後は自分で生きろと、ポーンと追払うんです。 出版・雑誌
- 490 大学に行こうが軍人になろうが、自分で決めさせ、家から追い出すんです。 出版・雑誌
- 491 子供は父母の両方で育てる。 出版・雑誌
- 492 純の作は、いわゆる短唱と自分で書いている。 出版・雑誌
- 493 三つのポストを三行で分け合う人事構想は固まっていた。 出版・雑誌
- 494 本山雅志（二十二）、中村俊輔（二十三）、名波、三浦で争うことになる。 出版・雑誌
- 495 特別勘定と呼ばれる投資信託を自分で選んで保険料を運用します。 出版・雑誌
- 496 夕食につくったあり合わせでも自分でつくるとおいしいしランチタイムが有効に使えます 出版・雑誌
- 497 それを2、3社で分け合っても高が知れている。 出版・雑誌
- 498 同社には「フロントランナー制度」という自分でやりたい事業を提案する制度があり... 出版・雑誌
- 499 こういうやり方があるのではないかと自分で考えてやっているうちに... 出版・雑誌
- 500 LANの規格をI S Oで定めるようになった。 出版・雑誌
- 501 自分で書くようになったのは、デビュー後に、ラジオ番組でリスナーが作ったラブ... 出版・雑誌

- 502 金づちなどで自分で砕くか、市販の粒炭を利用しても。 出版・雑誌
- 503 そりゃあ、自分で慰めるときもありますよ。 出版・雑誌
- 504 自分でするとき、特定の誰かを思い浮かべることはないので... 出版・雑誌
- 505 これが効果抜群なのはわかっているけど、なかなか自分で作ることはいできない。 出版・雑誌
- 506 昔アメリカの印刷所で使われていた木型を自分で貼ったそう。ゲストにも好評（上）。 出版・雑誌
- 507 「式や披露宴は、若い人で決めればいいわ。でも、秋には挙げてよ」 出版・雑誌
- 508 黒い厚紙を使って、自分で使いやすい罫の太さの罫プレートは何種類かつくってみました。 出版・雑誌
- 509 「ジロウ。あした、行こうよ。あしたみんなで行ってみようよ」 出版・雑誌
- 510 そのころは、もうなんでもかんでも自分でしなきゃいけないって思ってた... 出版・雑誌
- 511 からだの「痛い」を自分で治そう。 出版・雑誌
- 512 食事を自分で作ったチキンスープだけにして、からだを温めながら休めます。 出版・雑誌
- 513 自分のからだは自分で治す。 出版・雑誌
- 514 老後の暮らし方を元気なうちに自分で決める任意後見制度の活用法弁... 出版・雑誌
- 515 二人は、夫婦で築いた財産は夫婦が望む老後の暮らしのために使おうと心に決め... 出版・雑誌
- 516 判断能力のあるうちに将来の後見人を自分で選ぶ任意後見制度に対して... 出版・雑誌
- 517 『ちがうわ、これは自分で買ったものよ...』 出版・雑誌
- 518 『もともとはレッドフォード自身が自分で演じようとした役だから...』 出版・雑誌
- 519 我孫子の無農薬野菜を自分で穫りに行くとか。 出版・雑誌

- 520 みんなで寄せ集めたフードやお金がなくなれば... 出版・雑誌
- 521 取りあえず当方で立て替えた。 出版・雑誌
- 522 サラダこぼれ話究極の野菜は自分で作る？ 出版・雑誌
- 523 現在では、簡単なメンテナンスは志賀さん自身で行っている。 出版・雑誌
- 524 自分で仕上げたクルマを手放した理由とは？ 出版・雑誌
- 525 二十万円で買って、自分で直し、最後の下取り価格が百万円にまでなりましたね。 出版・雑誌
- 526 クルマを自分でつくりたく、使い込まれたエルカミーノをさらにモデファイしました。 出版・雑誌
- 527 心を開放し、みんなで歌い合うことのすばらしさを感じる。 出版・雑誌
- 528 学習のアイディアⅡ みんなで見合って、聴き合って歌おう 出版・雑誌
- 529 現在は部員 9 名で頑張る歯学部や女子部員が 6 名もいる芸術学部。 出版・雑誌
- 530 内装を自分で決めたりして。 出版・雑誌
- 531 知識を得て、実施体験して、自分で感じる。 出版・雑誌
- 532 「ならば！」と、こだわりの食材を選んで自分でつくる... 出版・雑誌
- 533 夫婦でつくった財産は、妻の貢献度に応じて夫婦間で割合を決める。 出版・雑誌
- 534 それに、市で捕らえた男の訊問に携わった中衛府も背後に操る者が居るとは... 出版・雑誌
- 535 自分で作るのが一番好みに合う。 出版・雑誌
- 536 Q 4 そのようなリスクを防ぐために、自分でできることはありますか？ 出版・雑誌
- 537 自分で辞めたのかクビになったかは不明。 出版・雑誌

- 538 ハートや動物などいろいろなデザインのパーツを自分で組み合わせるもの。 出版・雑誌
- 539 帰国後はおばあちゃん、お母さんにも贈り、親子3代でつけているそうです。 出版・雑誌
- 540 先手で荒らしてから三十三へ消すほうが効率がよいと思ったのです。 出版・雑誌
- 541 教室には、みんなで決めたルール（学級通信の左側下段）を模造紙に書いて貼ってある。 出版・雑誌
- 542 親子3代で通っているお店。 出版・雑誌
- 543 近著に『家族で選ぶインターナショナルスクールガイド』（講談社）。 出版・雑誌
- 544 餃子の皮って本当は自分でつくるもんなんだと、私はこのとき初めて知ったのである。 出版・雑誌
- 545 ピアスの常識Q&A Q ピアスの穴を、自分であけても大丈夫？ 出版・雑誌
- 546 どうしても自分であけたい場合は、市販されているピアッサーを使うのが安全。 出版・雑誌
- 547 「...それなら、よっしゃ自分でやるか、となった」 出版・雑誌
- 548 若いうちから自分で貯めておかなくちゃいけない。 出版・雑誌
- 549 簡単に言ってしまうと自分で殖やせる老後用貯金ってところ。 出版・雑誌
- 550 「電気代とか水道代を自分で払うようになったこと、っていうのもあるけど...
- 551 「自分で聞けばいいじゃないか」 出版・雑誌
- 552 練習する時間は自分で作るもの 出版・雑誌
- 553 送られてくるキットの接続やパソコンの設定が自分でできれば派遣工事は必要ない。 出版・雑誌
- 554 接続や設定が自分でできれば派遣工事は必要ない。 出版・雑誌
- 555 希望すれば自分で漕ぐ体験も可能で、5 m進むことができたなら免状が貰える。 出版・雑誌

- 556 「...人間として等身大の自分で生きる大切さを僕はこの
本で学んだのです」 出版・雑誌
- 557 白いほうは自分で買ったもの、赤いほうはお父さんから... 出版・雑誌
- 558 「離乳食用の食器は自分で買って、マグマグやシューズ
はいただきものです」。 出版・雑誌
- 559 自分の健康法は本来自分で見つけるものでしょう」とい
う北野さん。 出版・雑誌
- 560 定年後に夫婦で受け取る年金額は月額二十三万八千円と
されている。 出版・雑誌
- 561 ただ、彼がいない同土で論じても意味なし。 出版・雑誌
- 562 アジア・オセアニアは三菱でやっていく。 出版・雑誌
- 563 髪の毛も今は自分で選んだ美容院で、流行のシャギーの
入ったショートヘアにしてもらっている 出版・雑誌
- 564 みんなで楽しめるように、オードブルもメイン料理も、
別々のものを頼む。 出版・雑誌
- 565 「自分で育てるビールのつまみ」 出版・雑誌
- 566 これは具を自分で挟むんですよ 出版・雑誌
- 567 「脚を伸ばしたとき」「家族で入ったとき」などを想定
しながら... 出版・雑誌
- 568 村誌をやろうと思ったんですが、とても個人でできるも
のではないことがわかってきた。 出版・雑誌
- 569 ...自分で選んだんじゃないか。 出版・雑誌
- 570 自分で選んだグロ大、という進路を、恥ずかしく思っ
ている自分がみつともないのだ。 出版・雑誌
- 571 A 貿易をトラブルなく進めるために、みんなで話し合
うところです。 出版・雑誌
- 572 WTOで決めたことのほうが、各国の法律よりも強くな
ったわけです。 出版・雑誌
- 573 WTOで決まったことに従わなければいけなくなりました。
た。 出版・雑誌

- 574 自分で望んで飛び込んだんだけど… 出版・雑誌
- 575 自分で撮った顔にいろいろなヘアスタイルを合わせた
り… 出版・雑誌
- 576 自分で直す楽しみって。 出版・雑誌
- 577 自分の性別は自分で決めればいいことで、国に決めても
raitaitaiとは思いません。 出版・雑誌
- 578 人生は自分で切り開かなくては、と立ちあがるところが
ミソだ。 出版・雑誌
- 579 自分の体は自分で見ていきたい。 出版・雑誌
- 580 これからの人生は自分で考えていきたい。 出版・雑誌
- 581 米国では自分の体は自分で守る… 出版・雑誌
- 582 自分でやるほうが体調がよくなるという方もいて… 出版・雑誌
- 583 臨床工学士の役割を自分でやるようなものですから… 出版・雑誌
- 584 全員で集まって勉強会を、数カ月に1回は現地研修など
も行ない… 出版・雑誌
- 585 自分で気づいて、「こういうふうにしたらええんちゃう
かな…」 出版・雑誌
- 586 セレブ系クールデニム派おすすめ 2大ブランドでつくる
大流行のデニスカ徹底着まわし塾… 出版・雑誌
- 587 この例句のどこがどう変わったかを読者自身で考えて頂
きたい。 出版・雑誌
- 588 みんなで見合うようにします。 出版・雑誌
- 589 化粧合板で折り畳みテーブルを自分で作ってみた。 出版・雑誌
- 590 自分で見送らなきゃいけない。 出版・雑誌
- 591 そう、なんでも自分でやっちゃう。 出版・雑誌

- 592 『…後は私共の方で持ちます』と説明すれば、大半が.. 出版・雑誌
- 593 出会いの機会は自分で探して。 出版・雑誌
- 594 印象に残ってるのは我孫子でやった千九百五十四年の関東オープン... 出版・雑誌
- 595 「...あとは自分でいただこうと思ったはずです」 出版・雑誌
- 596 お父さんの最後の手段は自分で稼ぐことだ。 出版・雑誌
- 597 お父さんの最後の手段は自分で稼ぐことだ。 出版・雑誌
- 598 自分で培った自信、チームが与えてくれた自信の厚みが... 出版・雑誌
- 599 自分で隠れていたにせよ、誰かに監禁されていたにせよ... 出版・雑誌
- 600 自分で食べたいから 出版・雑誌
- 601 自分で食べたがる赤ちゃんもでてきます。 出版・雑誌
- 602 焼きたてののりを自分で巻いて食べると、おいしさもひとしお。 出版・雑誌
- 603 鈴鹿の百三十Rとか富士の百Rは自分で言うのもなんですが、常に全開でいけるんです。 出版・雑誌
- 604 長嶋さんじゃないけど、自分で作って、自分でトライする... 出版・雑誌
- 605 自分でやるととんでもない値が出てきてしまうんでアレですが... 出版・雑誌
- 606 借りてるマシンをみんなでまわしてブツブツ文句を垂れる。 出版・雑誌
- 607 毎回スーパーに買いに行くより自分で作ったほうが便利だし... 出版・雑誌
- 608 自分で作るときは“手軽でおいしく” 出版・雑誌
- 609 自分で作るときはシンプルなメニューが多いですよ。 出版・雑誌

- 610 「早朝の仕事がないときは自分で作っています…」 出版・雑誌
- 611 あれ今でも慧舟會でやってないっけ？ 出版・雑誌
- 612 使用人が休みとあつては自分でするしかなかった。 出版・雑誌
- 613 みんなで歌い出すとか。 出版・雑誌
- 614 たいてい自分で作るので、あれこれ調節できますが、やはり外でいただく機会も多い。 出版・雑誌
- 615 ネイルは自分でやる派。 出版・雑誌
- 616 痛めば自分で気づきやすいが、違和感程度のこともある。 出版・雑誌
- 617 オーナメント自分でつくっちゃおうという気分が、もうすでに、素敵じゃないですか。 出版・雑誌
- 618 前後は3番・高橋由、5番・ローズ、6番・清原で固めた左右ジグザグ打線で臨む。 出版・雑誌
- 619 全員で埋めていこうというのが牛島監督の戦略だ。 出版・雑誌
- 620 俺、自分でやるの怖いから、光一がやってるのを後ろで見てるのがいちばんいいの… 出版・雑誌
- 621 身近で深く考えていかなくてはならないようなテーマを、みんなで選びます。 出版・雑誌
- 622 与党3党の女性議員有志で作る「女性議員政策提言協議会」の略称で… 出版・雑誌
- 623 イケてると思うものを自分で見極めることが着こなしに差をつけると思う 出版・雑誌
- 624 それなので自分で開ける人もいるけれど… 出版・雑誌
- 625 二重性を自分で認め、のように認められるほうが自然だと気付くべきなのだ 出版・雑誌
- 626 私は毎年、梅干しを自分で漬けているので、梅干しなら余るほど手もとにありました。 出版・雑誌
- 627 自分で試したほうなんですよ。 出版・雑誌

- 628 自分で盗んできて強くなるという感じですね。 出版・雑誌
- 629 昔は自分で釣ったものを使ってました。 出版・雑誌
- 630 自分で働いて稼げといっても、誰が中国語のできない怪しい中国人の年寄り 出版・雑誌
- 631 3歳くらいになると、「ジブンデ（自分で）」と何でも自分でやりたがるかと思うと... 出版・雑誌
- 632 何でも自分でやらないと大泣きしてヒステリーを起こしてしまいます。 出版・雑誌
- 633 「自分で着てみる？」とそばで見守ってあげましょう。 出版・雑誌
- 634 着せてしまうのではなく、自分でやった、という満足感が得られる... 出版・雑誌
- 635 自分で歩こうとしない 出版・雑誌
- 636 お風呂のときなど自分で決めた順番があるらしく... 出版・雑誌
- 637 自分で決めたものであれば、身につけるのに抵抗は少ないと思います。 出版・雑誌
- 638 気に入ったほうで仕立ててくれるなど、非常に細かな手順を踏むために完成度がきわめて高い。 出版・雑誌
- 639 何ひとつ自分で決めてこなかった。 出版・雑誌
- 640 せっかく自分で作るなら、既製のイラスト素材を使ったありきたりのデザインでは物足りない。 出版・雑誌
- 641 結城紬―伝統柄の結城紬を母娘で着こなす 出版・雑誌
- 642 二人で見つめ合い、抱擁。 出版・雑誌
- 643 自分で見つけだしていくという本来の勉強の形を確認するいい体験になった... 出版・雑誌
- 644 鍋の極意家族でつつく鍋、友人らとにぎやかに楽しむ鍋。 出版・雑誌
- 645 「...二人で会うときはもっとわかりやすく着飾ってきてほしいです」 出版・雑誌

- 646 また、みんなで楽しめるような「アシカサンタの園内パレード」なども行われるので... 出版・雑誌
- 647 で、自分で作った環境がまた自分を変えるし... 出版・雑誌
- 648 4 A - G エンジンはずべて自分で組み、しかも研磨を電動リユーターでやったから... 出版・雑誌
- 649 やれることなら自分でやるってところもいいね。 出版・雑誌
- 650 今後は別に手に入れているエンジンを自分で組んで載せる予定。 出版・雑誌
- 651 これは彼にとっては“問題”ではなく、自分で好んで選択している道なんだよ。 出版・雑誌
- 652 印象は自分で変えられる。 出版・雑誌
- 653 オーバーナイト B A G の中はコットンポーチとプラダで仕分け... 出版・雑誌
- 654 百人ぐらいの修行僧でやってみたかったです。 出版・雑誌
- 655 1 口目の投票欄に自分で選んだ予想は、2 口目から十口目まで反映される。 出版・雑誌
- 656 足腰は丈夫で自分のことは自分でできた。 出版・雑誌
- 657 そっちのほうで待ち受けていると、大王殿の行列とは別に... 出版・雑誌
- 658 エンジン以外の部分はほとんど自分で作り、保守をするようにしている。 出版・雑誌
- 659 自分で打てなければいけません。 出版・雑誌
- 660 スタントもなるべく自分でやるようにしたわ。 出版・雑誌
- 661 何とか自分でまかなうことができる。 出版・雑誌
- 662 ご自分で接いでいる作務衣でサービスしてくれる。 出版・雑誌
- 663 餌は自分で見つけなければならない。 出版・雑誌

- 664 「自分の進路は自分で決める」などと語り... 出版・雑誌
- 665 二人で叶うはずもない未来を語っているだけで、とても幸せだったの 出版・雑誌
- 666 碾きたての蕎麦粉を自分で打ち、茹でたてをいただくという趣向は評判を呼び参加者も多い。 出版・雑誌
- 667 自分で言うのもおかしいが、かつてはちょいとハンサムで... 出版・雑誌
- 668 自分で仕上げたものカナディアンウィスキーコーナーもこの充実ぶり。 出版・雑誌
- 669 帯合わせや結び方によって、母娘で楽しめる。 出版・雑誌
- 670 元生徒と教師の異色のデュオで、二人で話しながらサンプルを何度も作り、形にしていく。 出版・雑誌
- 671 そのあたりの感覚は自分で磨いていくしかない。 出版・雑誌
- 672 自分で食べることや座ることができると、人間らしさを取り戻せ、潜在的な能力が... 出版・雑誌
- 673 中央常任委員会で決ったことはすぐ関東・東海・京都・大阪の各地方に書面で伝達... 出版・雑誌
- 674 自己責任の時代になって、投資の判断は自分でしろといわれますが... 出版・雑誌
- 675 「ちょっと先のことが見えたときに始めるのが株式投資だ」と自分で言っていたので... 出版・雑誌
- 676 これは自分で書いたほうがいいなと思っているときに執筆の依頼があって... 出版・雑誌
- 677 拡張機能を自分で入れるのがいやだが高機能なブラウザを使いたい人には... 出版・雑誌
- 678 手入れやカラーは自分でするんですけど、伸びてくるとどうしても切りたくなっちゃう (笑) 出版・雑誌
- 679 ガーフィック 自分でやるから可愛い... 出版・雑誌
- 680 自己管理型自分の人生は自分で決める、恋愛もセルフプロデュースが主流。 出版・雑誌
- 681 椎名林檎さんは“運命は自分で作り出す”を実践。 出版・雑誌

- 682 自分の人生は自分で決める、そんな意志が見え隠れするが… 出版・雑誌
- 683 自分の身は自分で守るしかないのだと、佐志は反論する。 出版・雑誌
- 684 アレンジは全部自分でやったのよ。 出版・雑誌
- 685 加代と二人で思いつく端から新家庭向きの調度や雑貨を挙げながら… 出版・雑誌
- 686 不安や恐怖、痛みへのまれず自分で乗り越えることができた。 出版・雑誌
- 687 自分でできる体操横になり、片方ずつ足を開きます。 出版・雑誌
- 688 夫婦でできる体操妊婦さんがあぐらをかき… 出版・雑誌
- 689 関連ソフトを自分で選んでインストールする。 出版・雑誌
- 690 大切なのは自分で考える能力せいけ・あつし専門は労働経済学。 出版・雑誌
- 691 いずれにも大切なのは、自分で考える能力です。 出版・雑誌
- 692 「…といっても、お父さんが自分で作った質素なものだけど」 出版・雑誌
- 693 自分でつくれば味も違う！？ 出版・雑誌
- 694 すべて吉本で仕切るというノウハウを確立したわけなんです。 出版・雑誌
- 695 自分で決めるものなんです。ふだん好きっていう感情が出てこないような人と… 出版・雑誌
- 696 自分でつくった「部長はこうあるべき」って理想像にしばらく… 出版・雑誌
- 697 「みんなで勝つためのサポートになろう」って切り替えられると、いいのかもしれないね。 出版・雑誌
- 698 結局、自分で決めているってことは重々承知なのだけでも… 出版・雑誌
- 699 そんな悩みも、自分で作ってしまえば、一気に解決。 出版・雑誌

- 700 皇室で使っている御料牧場でとれた牛乳が雅子妃はどうも苦手のようで...
- 701 だからそれぞれがどういう練習をしていけばいいかが、自分でわかっていました。
- 702 自分で考えて、自分のテニスに合った練習をするという方法ではありません
- 703 リスクも長期運用だから分散されるし、自分で選んだ投信だから運用結果も納得しやすい。
- 704 自己積立方式の個人年金の運用を一部自分でしようと決めた。
- 705 「... 二十代、三十代はお金について自分で知らなければならぬ」
- 706 そのため、自分で作った大事なDVDビデオなど...
- 707 「... 何を捨てて何を取るかきちんと自分でわかっていることが何よりも大切ではないでしょうか」
- 708 世界でひとつのオリジナルペンダント、カレとふたりで作りたい♥
- 709 さまざまに変化するので、自分で思ったようにはいかないうものだ。
- 710 家族で選んだ大黒柱がどっしりと。
- 711 「建築家と建てた家」 1 家族で選んだ大黒柱がどっしりと。
- 712 十年後が楽しみなお宅ですね」 (小栗さん) みんなで選んだ大黒柱。
- 713 「いずれはエジプトやオーストラリアの綿畑を自分で見に行つて...
- 714 自分で滑った感じは鈍い気がしました。
- 715 それを自分で見極めたいと思っています。
- 716 「... あなたたちのほうで探してね」と言っていたが...
- 717 どんな格好であれ、自分で作った野菜はおいしいものです。

718	<u>母と娘で愉しむ</u> [コール ハーン]	出版・雑誌
719	「ち密な野球をする <u>チーム</u> で戦いたかった」と説明する。	出版・雑誌
720	それは「4 番清原」の路線を <u>自分で</u> 打ち出した手前？	出版・雑誌
721	<u>自分で</u> 育てた 4 番打者を作りたいという気持ちからとオレは思うんやけど。	出版・雑誌
722	晴れの日ドレスのデザインを <u>自分で</u> しました。製作は友人に依頼したそう。	出版・雑誌
723	<u>自分で</u> 思い描いたことをちゃんと突き進めていき、実現させる。	出版・雑誌
724	信州上田城のわずか <u>二千五百の兵</u> で迎え撃った。	出版・雑誌
725	時間は <u>自分で</u> 作ろうとしなければ生まれません。	出版・雑誌
726	こうしたセッティングのほとんどは <u>エフエービジョン側</u> で行ってくれるため...	出版・雑誌
727	僕はお金なかったから、 <u>自分で</u> 買える範囲の中で考えに考えて 1 台選ぶわけでしょう。	出版・雑誌
728	鈴木「 <u>自分で</u> 言っちゃったよ（笑）」	出版・雑誌
729	そしてコロを引く人夫たちの周りをお <u>囃子方</u> で固め...	出版・雑誌
730	<u>自分で</u> できるところから、メンテを始めてみよう	出版・雑誌
731	これは、 <u>送信側</u> で入れた I P データグラムそのものである。	出版・雑誌

資料Ⅱ 正順とかき混ぜ語順のガ格主語文

(日本語母語話者および日本語学習者によるカラ格主語文の文処理実験)

正順語順

校長が証明書を渡した。
私が罪を謝る。
学部長が特別賞を授与した。
担当者が電話番号を教えた。
刑事が調査結果を報告した。
課長が面接結果を知らせた。
判事が不正を訴えた。
警察が死亡原因を説明した。
広告部が新製品を発表する。
責任者が間違いを詫びた。
政府が支援を要請した。
受付係がプリントを配布する。
担当者が集合時間を連絡する。
本部が生産中止を指示した。
山田さんが資料を請求した。
担当教授が研究を紹介した。
店長が割引券を郵送した。
係長が契約条件を示した。
入試係が合格者を発表した。
編集長が重要性を解説した。
知事が募金を呼びかけた。
議員が修正案を提出した。
人事課が就職情報を公表した。
事務が成績証明書を発行した。
技術係がシステム情報を通知した。
本人が改正を提案した。

かき混ぜ語順

証明書を校長が渡した。
罪を私が謝る。
特別賞を学部長が授与した。
電話番号を担当者が教えた。
調査結果を刑事が報告した。
面接結果を課長が知らせた。
不正を判事が訴えた。
死亡原因を警察が説明した。
新製品を広告部が発表する。
間違いを責任者が詫びた。
支援を政府が要請した。
プリントを受付係が配布する。
集合時間を担当者が連絡する。
生産中止を本部が指示した。
資料を山田さんが請求した。
研究を担当教授が紹介した。
割引券を店長が郵送した。
契約条件を係長が示した。
合格者を入試係が発表した。
重要性を編集長が解説した。
募金を知事が呼びかけた。
修正案を議員が提出した。
就職情報を人事課が公表した。
成績証明書を事務が発行した。
システム情報を技術係が通知した。
改正を本人が提案した。

首相が援助を求めた。

部長が計画を公開した。

大統領が方針を提示した。

佐藤さんがけんかを仕掛けた。

学生が参加を申し込んだ。

委員会が日程を掲示した。

援助を首相が求めた。

計画を部長が公開した。

方針を大統領が提示した。

けんかを佐藤さんが仕掛けた。

参加を学生が申し込んだ。

日程を委員会が掲示した。

資料 III 正順とかき混ぜ語順のカラ格主語文

(日本語母語話者および日本語学習者によるカラ格主語文の文処理実験)

正順語順

校長から証明書を渡した。
私から罪を謝る。
学部長から特別賞を授与した。
担当者から電話番号を教えた。
刑事から調査結果を報告した。
課長から面接結果を知らせた。
判事から不正を訴えた。
警察から死亡原因を説明した。
広告部から新製品を発表する。
責任者から間違いを詫びた。
政府から支援を要請した。
受付係からプリントを配布する。
担当者から集合時間を連絡する。
本部から生産中止を指示した。
山田さんから資料を請求した。
担当教授から研究を紹介した。
店長から割引券を郵送した。
係長から契約条件を示した。
入試係から合格者を発表した。
編集長から重要性を解説した。
知事から募金を呼びかけた。
議員から修正案を提出した。
人事課から就職情報を公表した。
事務から成績証明書を発行した。
技術係からシステム情報を通知した。
本人から改正を提案した。

かき混ぜ語順

証明書を校長から渡した。
罪を私から謝る。
特別賞を学部長から授与した。
電話番号を担当者から教えた。
調査結果を刑事から報告した。
面接結果を課長から知らせた。
不正を判事から訴えた。
死亡原因を警察から説明した。
新製品を広告部から発表する。
間違いを責任者から詫びた。
支援を政府から要請した。
プリントを受付係から配布する。
集合時間を担当者から連絡する。
生産中止を本部から指示した。
資料を山田さんから請求した。
研究を担当教授から紹介した。
割引券を店長から郵送した。
契約条件を係長から示した。
合格者を入試係から発表した。
重要性を編集長から解説した。
募金を知事から呼びかけた。
修正案を議員から提出した。
就職情報を人事課から公表した。
成績証明書を事務から発行した。
システム情報を技術係から通知した。
改正を本人から提案した。

首相から援助を求めた。

部長から計画を公開した。

大統領から方針を提示した。

佐藤さんからけんかを仕掛けた。

学生から参加を申し込んだ。

委員会から日程を掲示した。

援助を首相から求めた。

計画を部長から公開した。

方針を大統領から提示した。

けんかを佐藤さんから仕掛けた。

参加を学生から申し込んだ。

日程を委員会から掲示した。

資料Ⅳ 正順とかき混ぜ語順の IP 副詞を含めたガ格主語文

(日本語母語話者によるカラ格主語文の文処理実験)

正順語順

10 時に校長先生が表彰状を渡しました。
明日私が犯した過ちを謝ります。
あさって総長が博士号を授与します。
後ほど事務員が会議日程を掲示します。
今日警察が捜査の経過を報告しました。
再来週課長が面接の結果を知らせます。
来週市民団体が政界の汚職を告発します。
昨日刑事が事件の真相を告げました。
来年広報係が新製品を発表します。
火曜日に裁判長が判決を言い渡しました。
先日社長が我が社の意思を表明しました。
水曜日に受付係がスケジュールを配ります。
正午に担当者が集合時間を連絡しました。
去年技術者が分析ツールを提供しました。
もうすぐ試験官が問題用紙を配布します。
夕方研究員が最新の成果を紹介します。
先月係員が新しい連絡先を教えました。
来月融資係が契約の条件を提示します。
本日研究科長が合格者を発表します。
後日編集長が企画の重要性を解説します。
去年知事が募金協力を呼びかけました。
7 月に議員が改正案を提出しました。

かき混ぜ語順

校長先生が 10 時に表彰状を渡しました。
私が明日自分の犯した過ちを謝ります。
総長があさって博士号を授与します。
事務員が後ほど会議日程を掲示します。
警察が今日捜査の経過を報告しました。
課長が再来週面接の結果を知らせます。
市民団体が来週政界の汚職を告発します。
刑事が昨日事件の真相を告げました。
広報係が来年新製品を発表します。
裁判長が火曜日に判決を言い渡しました。
社長が先日我が社の意思を表明しました。
受付係が水曜日にスケジュールを配ります。
担当者が正午に集合時間を連絡しました。
技術者が去年分析ツールを提供しました。
試験官がもうすぐ問題用紙を配布します。
研究員が夕方最新の成果を紹介します。
係員が先月新しい連絡先を教えました。
融資係が来月契約の条件を提示します。
研究科長が本日合格者を発表します。
編集長が後日企画の重要性を解説します。
知事が去年募金協力を呼びかけました。
議員が 7 月に改正案を提出しました。

翌朝人事課が採用情報を公表しました。
後ほど学務係が成績証明書を発行します。
先週年金課が納付期限を告知しました。
明朝広告部が新しい企画を公開します。
今朝市長が財政援助を要請しました。
昼前に部長が再開発計画を説明しました。
二日後に利用者が苦情を申し出ました。
おととい下級生が喧嘩を仕掛けました。
先ほど出納係が代金を請求しました。
毎日アナウンサーが最新情報を伝えます。

人事課が翌朝採用情報を公表しました。
学務係が後ほど成績証明書を発行します。
年金課が先週納付期限を告知しました。
広告部が明朝新しい企画を公開します。
市長が今朝財政援助を要請しました。
部長が昼前に再開発計画を説明しました。
利用者が二日後に苦情を申し出ました。
下級生がおととい喧嘩を仕掛けました。
出納係が先ほど代金を請求しました。
アナウンサーが毎日最新情報を伝えます。

資料Ⅴ 正順とかき混ぜ語順の IP 副詞を含めたカラ格主語文

(日本語母語話者によるカラ格主語文の文処理実験)

正順語順

10 時に校長先生から表彰状を渡しました。
明日私から自分の犯した過ちを謝ります。
あさって総長から博士号を授与します。
後ほど事務員から会議日程を掲示します。
今日警察から捜査の経過を報告しました。
再来週課長から面接の結果を知らせます。
来週市民団体から政界の汚職を告発します。
昨日刑事から事件の真相を告げました。
来年広報係から新製品の情報を発表します。
火曜日に裁判長から判決を言い渡しました。
先日社長から我が社の意思を表明しました。
水曜日に受付係からスケジュールを配ります。
正午に担当者から集合時間を連絡しました。
去年技術者から分析ツールを提供しました。
もうすぐ試験官から問題用紙を配布します。
夕方研究員から最新の成果を紹介します。
先月係員から新しい連絡先を教えました。
来月融資係から契約の条件を提示します。
本日研究科長から合格者を発表します。
後日編集長から企画の重要性を解説します。
去年知事から募金協力を呼びかけました。

かき混ぜ語順

校長先生から 10 時に表彰状を渡しました。
私から明日自分の犯した過ちを謝ります。
総長からあさって博士号を授与します。
事務員から後ほど会議日程を掲示します。
警察から今日捜査の経過を報告しました。
課長から再来週面接の結果を知らせます。
市民団体から来週政界の汚職を告発します。
刑事から昨日事件の真相を告げました。
広報係から来年新製品の情報を発表します。
裁判長から火曜日に判決を言い渡しました。
社長から先日我が社の意思を表明しました。
受付係から水曜日にスケジュールを配ります。
担当者から正午に集合時間を連絡しました。
技術者から去年分析ツールを提供しました。
試験官からもうすぐ問題用紙を配布します。
研究員から夕方最新の成果を紹介します。
係員から先月新しい連絡先を教えました。
融資係から来月契約の条件を提示します。
研究科長から本日合格者を発表します。
編集長から後日企画の重要性を解説します。
知事から去年募金協力を呼びかけました。

7月に議員から改正案を提出しました。
翌朝人事課から採用情報を公表しました。
後ほど学務係から成績証明書を発行します。
先週年金課から納付期限を告知しました。
明朝広告部から新しい企画を公開します。
今朝市長から財政援助を要請しました。
昼前に部長から再開発計画を説明しました。
二日後に利用者から苦情を申し出ました。
おととい下級生から喧嘩を仕掛けました。
先ほど出納係から代金を請求しました。
毎日アナウンサーから最新情報を伝えます。

議員から7月に改正案を提出しました。
人事課から翌朝採用情報を公表しました。
学務係から後ほど成績証明書を発行します。
年金課から先週納付期限を告知しました。
広告部から明朝新しい企画を公開します。
市長から今朝財政援助を要請しました。
部長から昼前に再開発計画を説明しました。
利用者から二日後に苦情を申し出ました。
下級生からおととい喧嘩を仕掛けました。
出納係から先ほど代金を請求しました。
アナウンサーから毎日最新情報を伝えます。

資料 VI 正順とかき混ぜ語順のガ格主語文

(日本語母語話者および日本語学習者によるデ格主語文の文処理実験)

正順語順

警察が事件を調べた。
委員会が計画を実行した。
兄弟が机を運んだ。
カップルがタンゴを踊った。
組合が解決策を見いだした。
家族が旅行先を探した。
夫婦が童謡を歌った。
同期がお土産を贈りあった。
みんながアイデアを考えた。
清掃業者がゴミを収集する。
財務省が予算案を提出した。
観光庁がプランを作った。
事務局が会費を徴収した。
クラスが学級新聞を書いた。
グループが製品を開発した。
スタッフがチラシを配布した。
参加者がプロジェクトを進めた。
ボランティアがパーティーを開いた。
税務署が調査を行った。
文部省が改善策を講じた。
従業員が荷物を運んだ。
内閣府が出生率を予測した。
経産省が改革案を打ち出した。
営業部がデータを集めた。
本部が売れ行きを検討した。
市民団体が募金を呼びかけた。

かき混ぜ語順

事件を警察が調べた。
計画を委員会が実行した。
机を兄弟が運んだ。
タンゴをカップルが踊った。
解決策を組合が見いだした。
旅行先を家族が探した。
童謡を夫婦が歌った。
お土産を同期が贈りあった。
アイデアをみんなが考えた。
ゴミを清掃業者が収集する。
予算案を財務省が提出した。
プランを観光庁が作った。
会費を事務局が徴収した。
学級新聞をクラスが書いた。
製品をグループが開発した。
チラシをスタッフが配布した。
プロジェクトを参加者が進めた。
パーティーをボランティアが開いた。
調査を税務署が行った。
改善策を文部省が講じた。
荷物を従業員が運んだ。
出生率を内閣府が予測した。
改革案を経産省が打ち出した。
データを営業部が集めた。
売れ行きを本部が検討した。
募金を市民団体が呼びかけた。

広報課がポスターを作成した。

議会が法案を決めた。

政府が改革を促した。

二人が問題を解いた。

総務が資料を用意した。

祖父母がランドセルを買った。

ポスターを広報課が作成した。

法案を議会が決めた。

改革を政府が促した。

問題を二人が解いた。

資料を総務が用意した。

ランドセルを祖父母が買った。

資料 VII 正順とかき混ぜ語順のデ格主語文

(日本語母語話者および日本語学習者によるデ格主語文の文処理実験)

正順語順

警察で事件を調べた。
委員会で計画を実行した。
兄弟で机を運んだ。
カップルでタンゴを踊った。
組合で解決策を見いだした。
家族で旅行先を探した。
夫婦で童謡を歌った。
同期でお土産を贈りあった。
みんなでアイデアを考えた。
清掃業者でゴミを収集する。
財務省で予算案を提出した。
観光庁でプランを作った。
事務局で会費を徴収した。
クラスで学級新聞を書いた。
グループで製品を開発した。
スタッフでチラシを配布した。
参加者でプロジェクトを進めた。
ボランティアでパーティーを開いた。
税務署で調査を行った。
文部省で改善策を講じた。
従業員で荷物を運んだ。
内閣府で出生率を予測した。
経産省で改革案を打ち出した。
営業部でデータを集めた。
本部で売れ行きを検討した。
市民団体に募金を呼びかけた。

かき混ぜ語順

事件を警察で調べた。
計画を委員会で実行した。
机を兄弟で運んだ。
タンゴをカップルで踊った。
解決策を組合で見いだした。
旅行先を家族で探した。
童謡を夫婦で歌った。
お土産を同期で贈りあった。
アイデアをみんなで考えた。
ゴミを清掃業者で収集する。
予算案を財務省で提出した。
プランを観光庁で作った。
会費を事務局で徴収した。
学級新聞をクラスで書いた。
製品をグループで開発した。
チラシをスタッフで配布した。
プロジェクトに参加者で進めた。
パーティーをボランティアで開いた。
調査を税務署で行った。
改善策を文部省で講じた。
荷物を従業員で運んだ。
出生率を内閣府で予測した。
改革案を経産省で打ち出した。
データを営業部で集めた。
売れ行きを本部で検討した。
募金を市民団体に呼びかけた。

広報課でポスターを作成した。

議会で法案を決めた。

政府で改革を促した。

二人で問題を解いた。

総務で資料を用意した。

祖父母でランドセルを買った。

ポスターを広報課で作成した。

法案を議会で決めた。

改革を政府で促した。

問題を二人で解いた。

資料を総務で用意した。

ランドセルを祖父母で買った。

資料 VIII 文法テスト

氏名：

生年月日：

性別：

次の文の（ ）に入れることばとして正しいものはどれですか。4つの中から1つだけ選んで、□に✓を書いてください。

(両面印刷ですので、裏面にも✓を書いてください)

1 彼女たちは（ ）、顔がそっくりだ。

☐ 双子の

☐ 双子と

☒ 双子で

☐ 双子だ

2 田中さんと鈴木さん（ ）この問題を解決しました。

☐ から

☒ で

☐ まで

☐ に

3 中山さん（ ）バイオリンが弾けるなんて、信じられない。

☐ を

☒ に

☐ から

☐ で

4 留学に卒業証明書（ ）要るので、発行してもらった。

☐ は

☐ を

☐ に

☒ が

5 弟（ ）囲碁に興味を持ち始めました。

☐ を

☐ から

☒ が

☐ で

6 もう二度としないように、私（ ）注意しておきます。

☐ へ

☐ を

☐ まで

☒ から

7 社長、かばんを（ ）。

☒ お持ちします

☐ お持ちになります

☐ お持たれます

☐ お持ちになれます

8 森さん（ ）言ったことは気にしなくてもいいですよ。

☐ で

☐ に

☐ を

☒ が

9 この仕事はあなたが思うほど（ ）。

☐ 楽くない

☒ 楽じゃない

☐ 楽にじゃない

☐ 楽なじゃない

10 ひとり（ ）いったい何ができますか。

☐ から

☐ へ

☐ を

☒ で

11 今朝の新聞を読んで、近くで交通事故があったことを（ ）。

☐ 知る

☒ 知った

☐ 知っている

☐ 知っていた

12 母（ ）庭で野菜の苗を植えています。

☐ から

☐ を

☐ に

☒ が

13 （ ）は、こちらに置いてください。

☒ お荷物

☐ ご荷物

☐ 貴荷物

☐ 本荷物

14 その辞書は、私（ ）木村さんに渡しておきます。

- ☐ に ☐ を
☒ から ☐ の

15 何かわたし（ ）できることがあれば、おっしゃってください。

- ☐ から ☒ に
☐ を ☐ ので

16 お金が足りなかったので、三人（ ）新しいアルバムを買いました。

- ☐ を ☒ で
☐ と ☐ まで

17 突然妹（ ）部屋に入ってきて、泣き出した。

- ☒ が ☐ に
☐ の ☐ を

18 そのことは、君（ ）みなさんに伝えておいた方がいいですよ。

- ☐ に ☐ を
☐ まで ☒ から

19 林さん（ ）会社をやめた理由をご存知ですか。

- ☐ へ ☒ が
☐ から ☐ さえ

20 後ろに座っている学生（ ）聞こえないので、もう少し大きな声で話してください。

- ☐ で ☐ や
☐ へ ☒ に

21 我が社の営業部（ ）海外からの観光客を接待しました。

- ☒ で ☐ の

☐ なら ☐ を

22 日曜日は、久しぶりに会った友人と楽しい時間（ ）過ごした。

☐ は ☐ で

☐ が ☒ を

23 今回の優勝は選手たち（ ）必死に努力した成果だと言えるでしょう。

☐ で ☐ に

☒ が ☐ へ

24 田中さんに何度電話をかけても（ ）。

☐ つながらないでした ☒ つながらなかった

☐ つながらないだった ☐ つながりませんでした

25 せっかくいい点数を取ったのだから、あなた（ ）も褒めてあげてくださいよ。

☐ まで ☐ の

☒ から ☐ を

26 先生にたくさん宿題を（ ）。

☐ だられた ☐ でられた

☒ だされた ☐ ださせた

27 彼（ ）ラテン語で書かれた本が読めるとは驚きだ。

☐ と ☐ から

☐ ので ☒ に

28 私（ ）課長にこの計画を話しておきましょう。

☐ に ☒ から

☐ を ☐ まで

29 旅行に行ったとき、海の近くのホテル（ ）泊まりました。

☐ を

☐ で

☒ に

☐ まで

30 政治家ではなく、その秘書（ ）汚職容疑で捕まった。

☒ が

☐ から

☐ で

☐ さえ

31 母は私がこどもの時に描いた絵を今も（ ）かざっています。

☐ たいせつ

☐ たいせつで

☐ たいせつな

☒ たいせつに

32 その事件を警察（ ）調べています。

☐ に

☒ で

☐ から

☐ へ

33 会議が始まる（ ）、資料を人数分用意しておいてください。

☐ まで

☒ までに

☐ までで

☐ にまで

34 入学試験の結果は、学務係（ ）発表します。

☐ を

☒ から

☐ に

☐ すると

35 先日はおいしいお菓子を（ ）、どうもありがとうございました。

☐ くれて

☐ もらって

☒ くださって

☐ 差し上げて

36 あんな結果は、私（ ）だって予測できるよ。

☐ までも

☐ からも

☐ で

☒ に

37 最終決定は、組合（ ）決めます。

- | | |
|------------------------------|---------------------------------------|
| <input type="checkbox"/> へ | <input type="checkbox"/> にでも |
| <input type="checkbox"/> までも | <input checked="" type="checkbox"/> で |

38 この部屋は確かに（ ）が、収納がたくさんあって使いやすいので、気に入っている。

- | | |
|-----------------------------------|---|
| <input type="checkbox"/> せまいに違いない | <input checked="" type="checkbox"/> せまいかもしれない |
| <input type="checkbox"/> せまいらしい | <input type="checkbox"/> せまいはずだ |

39 あの人（ ）その謎が解けると思いますか。

- | | |
|---------------------------------------|------------------------------|
| <input checked="" type="checkbox"/> に | <input type="checkbox"/> までは |
| <input type="checkbox"/> から | <input type="checkbox"/> とは |

40 歌手の道は（ ）と思っている。

- | | |
|--|---------------------------------|
| <input type="checkbox"/> あきらめう | <input type="checkbox"/> あきらめろう |
| <input checked="" type="checkbox"/> あきらめよう | <input type="checkbox"/> あきらめる |

41 部下の成長を見ると、本当にたのもし（ ）。

- | | |
|------------------------------|---|
| <input type="checkbox"/> わけだ | <input type="checkbox"/> のみだ |
| <input type="checkbox"/> 始末だ | <input checked="" type="checkbox"/> 限りだ |

42 そちら（ ）例の件をもう一度相手の会社に問い合わせてください。

- | | |
|--|----------------------------|
| <input checked="" type="checkbox"/> から | <input type="checkbox"/> へ |
| <input type="checkbox"/> まで | <input type="checkbox"/> に |

43 当機はまもなく離陸（ ）。シートベルトをお締め下さい。

- | | |
|--------------------------------|---|
| <input type="checkbox"/> されます | <input type="checkbox"/> ございます |
| <input type="checkbox"/> なさいます | <input checked="" type="checkbox"/> いたします |

44 この記事は事実（ ）違っている。

☐ から ☒ と

☐ へ ☐ に

45 奥様によろしくと父が（ ）。

☐ おっしゃいました ☐ 申し上げました

☒ 申しております ☐ おっしゃってりました

46 働きすぎで、山田さん（ ）倒れてしまいました。

☐ を ☒ が

☐ から ☐ で

47 お年寄り（ ）こんなに小さい字が見えるでしょうか。

☐ の ☒ に

☐ から ☐ まで

48 目的地は、バスを（ ）5分ぐらいのところにあります。

☐ 降って ☒ 降りて

☐ 降いて ☐ 降りって

49 その問題について、我が社（ ）も慎重に検討しました。

☐ の ☒ で

☐ を ☐ に

50 花子なら、さっき教室で友達と（ ）よ。

☐ 話す ☐ 話している

☐ 話した ☒ 話していた

51 セールスの電話が（ ）困った。

☒ しつこくて ☐ しつこいで

☐ しつこいくて ☐ しつこかって

52 私が経験（ ）学んだことは多い。

- ☒ から ☐ と
☐ へ ☐ の

53 試験監督（ ）問題用紙が配られます。

- ☐ へ ☐ まで
☐ まだ ☒ から

54 失礼かとは（ ）が、職業欄にも記入をお願いします。

- ☐ お存じです ☒ 存じます
☐ ご存知です ☐ ご存じます

55 もし今（ ）、こちらを手伝ってください。

- ☒ いそがしくなければ ☐ いそがしいじゃなければ
☐ いそがしいじゃないなら ☐ いそがしくなれば

56 市民団体（ ）被災地の募金を集めました。

- ☐ を ☒ で
☐ に ☐ より

57 何度もいやだと言ったのに、母は塾を（ ）。

- ☒ やめさせてくれない ☐ やめられてくれない
☐ やめてくれない ☐ やめさせられてくれない

58 お名前を（ ）よろしいでしょうか。

- ☐ まいられても ☐ うかがわれても
☐ まいっても ☒ うかがっても

59 部長（ ）パリの会議に出席することになりそうです。

- ☐ へ ☐ より

☐ の ☒ が

60 高橋さん（ ）イタリア語が話せるかしら。

☒ に ☐ を

☐ で ☐ から

61 和美は書類のミス（ ）気付いて、すぐに修正した。

☐ を ☐ が

☒ に ☐ で

62 この子（ ）三ヶ国語がしゃべれるはずがありません。

☐ の ☐ と

☐ から ☒ に

63 あさって、社長（ ）本部からいらっしゃるそうです。

☒ が ☐ へ

☐ より ☐ と

64 先輩は英語が（ ）か。

☐ ごできます ☒ おできになります

☐ できられます ☐ できになれます

65 その故障は、私のほう（ ）修理しておきます。

☐ へ ☒ で

☐ を ☐ が

66 早ければ、1時間（ ）終わると思います。

☐ が ☐ に

☒ で ☐ は

67 市長（ ）イベントへの参加を呼びかけました。

☐ までに ☒ から

☐ まです ☐ で

68 ニュートン（ ）万有引力を発見したことで、物理学は大きく進歩した。

☐ に ☐ で

☐ を ☒ が

69 あんなことを言われて、（ ）。

☐ くやしくないでしたか ☐ くやしいじゃなかったでしたか

☐ くやしいじゃありません ☒ くやしくありませんでしたか
でしたか

70 責任者（ ）取引先に連絡してみました。

☐ に ☒ から

☐ を ☐ まで

71 誰から借りたか全く覚えていないので、返したくても（ ）。

☐ 返そうともしない ☐ 返すほかない

☒ 返しようがない ☐ 返すわけにはいかない

72 時間があまりないので、みんな（ ）やりましょう。

☐ から ☐ に

☐ を ☒ で

73 山下さん（ ）その内容が正しく理解できるとは思いません。

☐ で ☒ に

☐ を ☐ から

74 舞台（ ）緊張しすぎて、うまく演技できなかった。

☐ には ☐ からは

☐ のは ☒ では

75 本日は（ ）、光栄です。

☐ お越しになれて ☐ 拝見して

☒ お目にかかれて ☐ ご覧になって

76 こちら（ ）も健太をしっかり叱っておきますよ。

☒ から ☐ では

☐ にとって ☐ を

77 私が来年退職するころには、父はすでに（ ）。

☐ 亡くなるだろう ☒ 亡くなっているだろう

☐ 亡くなっただろう ☐ 亡くなっていただろう

78 委員会（ ）原案を作りました。

☐ を ☐ まで

☒ で ☐ へ

79 そんな理屈が、彼女（ ）わかると思う？

☐ と ☐ で

☒ に ☐ を

80 慎重に考えよう。この件は、安易に（ ）。

☒ 決めるべきことではない ☐ 決めないべきことだ

☐ 決めることではないべきだ ☐ 決めなければいけないべきことだ

81 相談内容に関して、すでに担当者（ ）ほかの会社に頼んであります。

☐ を ☒ から

☐ に ☐ で

82 あのスタッフ（ ）立っているところに行ってください。

☐ を ☒ が

☐ と ☐ で

83 先生（ ）その問題がわかるでしょうか。

☐ とは ☐ では

☒ に ☐ より

84 資料のコピーなら、私たち（ ）用意します。

☒ で ☐ に

☐ を ☐ と

謝辞

この博士論文の完成に到るまでには、さまざまな方から多くのご助言とご協力をいただきました。まず、本論文の査読をしていただいた東北大学文学部・文学研究科の小泉政利先生、名古屋大学国際言語文化研究科の杉村泰先生、志波彩子先生に感謝の意を表したいと思います。特に、小泉先生とともに論文を作成することを通して、非常に多くの刺激を受けてきました。博士課程における最初の研究も小泉先生からの提案を受け、仮説を立て、文処理実験を行いました。また、査読の上では、本研究における文処理実験のデータと生成日本語学の理論を合わせて、結果の解釈、および今後深めていける実験もご提案くださいました。杉村先生、志波先生は、カラ格・デ格主語の理論背景およびコーパス検索の部分についても、厳しく審査し、後置詞主語の研究に示唆に富んだご教示を数多く賜りました。

本研究の第3章第4節（中国語を母語とする日本語学習者によるカラ格主語文の文処理実験）のデータを収集にあたっては、快く実験場所を提供してくださり、調査に最適な環境づくりに努めてくださった日本語教育やサポートに携わる魏志珍先生、陳相洲先生、境智美先生からのご厚意・ご協力がありました。学習者の皆さんも真剣に実験に取り組んでくださいました。また、日本語母語話者および中国語を母語とする日本語学習者によるデ格主語文の文処理実験のデータを収集する際に、名古屋大学に大学院生・学部生として在学する中国人の皆さん、日本人学部生・大学院生の皆さんに実験に協力していただいたことによって、本研究の主要部であるカラ格・デ格主語の処理メカニズムを検討し、考察することができました。さらに、実験の刺激を作成する際、およびコーパス検索の結果を分類する際に、西坂祥平さん、難波えみさん、末松大貴さん、安藤郁美さん、相川伸さんな

どの名古屋大学国際言語文化研究科の大学院生が協力してくださり、感謝を申し上げたいと思います。

そしてなによりも、名古屋大学の玉岡賀津雄先生と出会い、博士後期課程の3年間、玉岡先生のご指導を受けることができたのは、私にとって非常に幸福で、幸運なことであると思います。修士課程においては、主に対照言語学的なアプローチで日本語・韓国語・中国語・英語の主題・主格について研究していました。カラ格・デ格主語文に対して、玉岡先生には、生成言語学を理論背景として、心理言語学のアプローチで研究することを提案されました。文処理実験やテスト調査、データの分析に至るまで、非常に懇切丁寧にご指導をいただきました。玉岡先生のご指導なくしては3年で博士論文を仕上げることはできませんでした。実験手法やデータの分析だけでなく、玉岡先生は、柔軟な考え方や研究に対する情熱も示してくださいました。玉岡先生の後姿を見て、目指す研究者像を描きながら、学ばせていただいたように思っています。なお、3年間、玉岡ゼミの皆さんからもさまざまな方面で手伝っていただきました。この場を借りて、心を込めて、感謝の気持ちを表したいと思います。

最後に、山口大学名誉教授の林伸一先生に感謝したいと思います。山口大学大学院人文科学研究科日本語学・文学論コースに入学させていただいたことで、言語研究の道を歩むことができました。修士課程の2年間、論文投稿や学会発表の機会に恵まれたからこそ、博士後期課程では、諦めずに論文を作成し、修了することができたのです。さらに、真剣に言語学的なコメントや言語教育に関して、いろいろ教えてくださった山東師範大学常勤講師の駱牛牛先生をはじめとして、陰ながら支えてくれた両親、友人などがいたからこそ、ここに研究成果をまとめあげることができたと思います。ここまでに至るのりに関わってくださったすべての方々に、深く感謝申し上げます。